柏原市文化財概報　1998－V

北峯古墳群・田辺遺跡

付・船橋遺跡採集遺物

1999年3月

柏原市教育委員会

北峯古墳群調査地遠景（左下が河内国分寺）

北峯古墳群調査地近景

はしがき

ここ数年、景気の停滞により、民間の開発事業や新規の公共事業が減少傾向にあり、これに伴って発掘調査の件数や規模も減少傾向にあります。これは、埋蔵文化財の保存に努める本市教育委員会にとっては、好ましいことであります。

その一方で、社会の文化財に対する関心は高まっており、文化財の対象も多様化しつつあります。これまで埋蔵文化財の調査と保存を中心に取り組んできた本市でも、幅広い文化財を対象とした調査・研究・保存・普及活動を図っていかなければならないと考えております。

たとえば、建造物や土木構築物、民俗資料や伝承・行事、古文書や石造物、巨木や動植物、そして埋蔵文化財においては積極的な保存・整備などが今後の課題となってくるでしょう。これらの文化財を市民にわかりやすく伝え、その重要性を理解していただけるように努めることが重要であると考えております。

本概報では、2件の公共事業に伴う発掘調査の成果とともに、寄贈していただいた資料の紹介もしております。このように、さまざまな形で資料を残していきたいと考えております。

今後とも、本市文化財行政の充実にご協力いただけますようお願いいたします。

平成11年3月

柏原市教育委員会

教育長　**舟橋　清光**

例　　言

1．本書は、柏原市教育委員会が、平成９・10年度に公共事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、北峯古墳群（北峯古墳群1998―１次調査）と田辺遺跡（田辺遺跡1998―３・８次調査）の緊急発掘調査概要報告書である。北峯古墳群1998－１次調査は（仮称）柏原市立国分東小学校新設工事に伴う調査、田辺遺跡1998－３・８次調査は柏原市立国分小学校のプール新設工事に伴う調査である。

2．北峯古墳群1998―１次調査

調査依頼者　　柏原市土地開発公社（理事長・柏原市長　山西敏一）

調査地所在地　柏原市国分東条町3701他

調査対象面積　15,000m²

調査面積　　試掘調査　15m²、発掘調査　734m²

調査期間　　試掘調査　平成９年７月８日～24日

　　発掘調査　平成10年１月５日～２月９日

3．田辺遺跡1998―３・８次調査

調査依頼者　　柏原市長　山西敏一

調査地所在地　柏原市国分本町６丁目710他

調査対象面積　13,470m²

調査面積　　1998―３次調査　３m²、1998―８次調査　210m²

調査期間　　1998―３次調査　平成10年３月26日～27日

　　1998―８次調査　平成10年８月19日～９月７日

4．発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課　安村俊史が担当した。

5．第３章として、貴瀬誠・米尾一幸両氏から寄贈を受けた船橋遺跡採集遺物について紹介した。

6．本書の編集・執筆は安村が担当したが、第３章の遺物の項は槇原美智子の執筆による。

7．本書で使用した方位は座標北（国家座標第Ⅵ系）、標高はＴ.Ｐ.である。

8．北峯古墳群の調査に際して、大阪府教育委員会文化財保護課記念物係（当時）の瀬川健、大野薫、大楽康宏各氏からご指導をいただいた。

9．調査・整理の参加者・協力者は下記のとおりである。

橘谷　和夫　　柳谷　好子　　長西　茂樹　　川端　　隆　　北野　　重　　石田　成年

寺川　　款　　谷口　京子　　奥野　　清　　谷口　鉄次　　分才　隆司　　尾野　絹江

谷川　洋史　　槇原美智子　　松尾　洋平　　有江マスミ　　乃一　敏恵　　橋口　紀子

松本　和子　　村口ゆき子　　山元　允子

柏原市土地開発公社、柏原市土木課、柏原市施設管理課、（株）上田組、小原工業

目　　次

第１章　北峯古墳群

１．調査に至る経過 …… 1

２．周辺の環境 …… 2

３．試掘調査 …… 5

４．Ⅰ区の調査 …… 7

５．Ⅱ区の調査 …… 10

６．まとめ …… 17

第２章　田辺遺跡

１．調査に至る経過 …… 22

２．周辺の環境 …… 22

３．試掘調査 …… 24

４．発掘調査 …… 25

第３章　船橋遺跡採集遺物

１．貴瀬誠氏採集遺物 …… 30

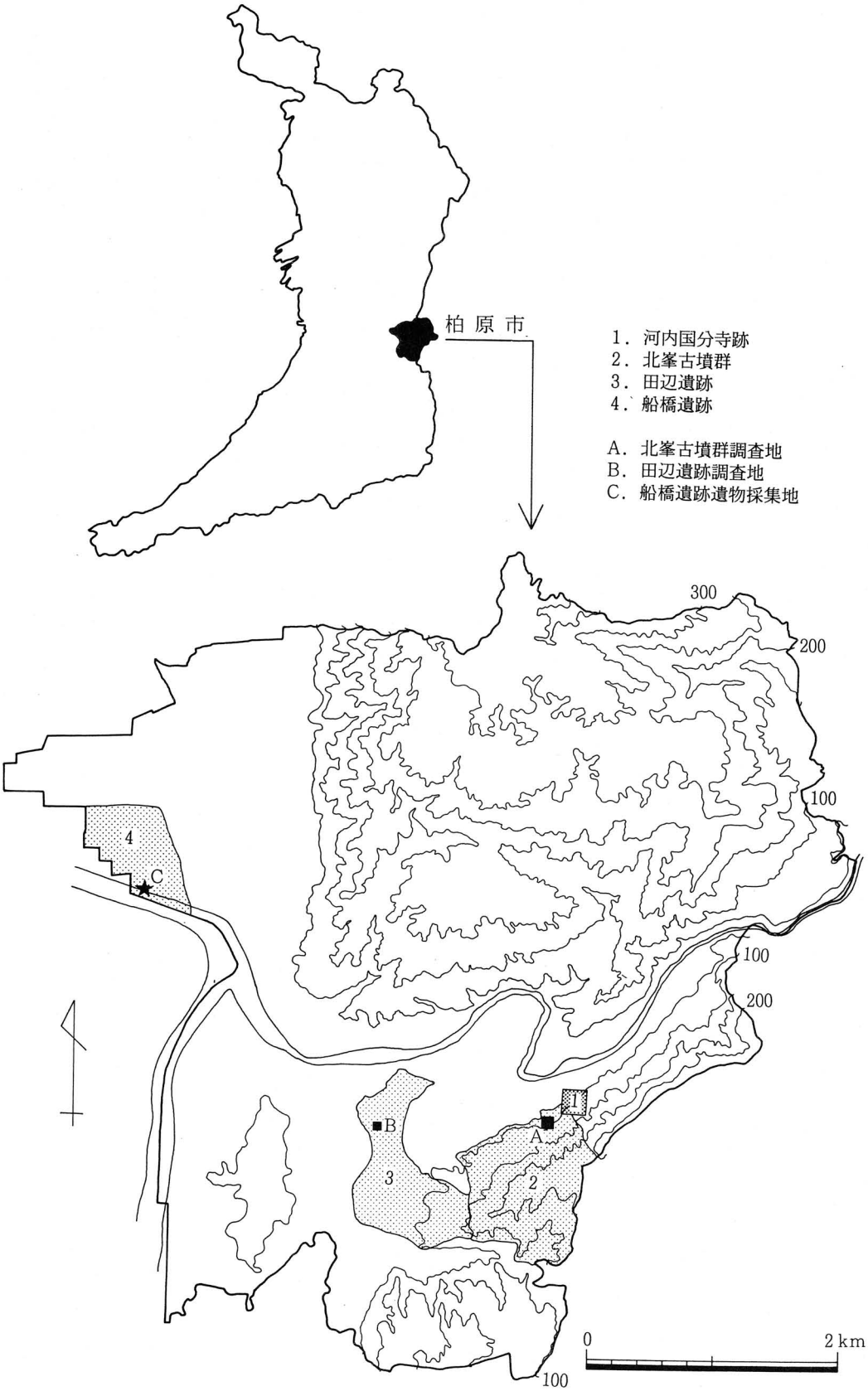
２．米尾一幸氏採集遺物 …… 42

挿　図　目　次

図―1　調査地位置図 …… 0
図―2　北峯古墳群調査地位置図 …… 3
図―3　調査地全体図 …… 6
図―4　Ⅰ区土層図 …… 7
図―5　Ⅰ区西半遺構平面図 …… 8
図―6　Ⅰ区出土遺物 …… 9
図―7　Ⅱ区土層図 …… 11
図―8　Ⅱ区出土遺物① …… 13
図―9　Ⅱ区出土遺物② …… 15
図―10　Ⅱ区出土遺物③ …… 16
図―11　河内国分寺推定寺域 …… 18
図―12　河内国分寺推定伽藍配置・水野案 …… 19
図―13　田辺遺跡調査地位置図 …… 23
図―14　調査区位置図 …… 24
図―15　東壁土層図 …… 25
図―16　遺構平面図 …… 26
図―17　土坑―2 …… 27
図―18　出土遺物 …… 29
図―19　船橋遺跡位置図 …… 31
図―20　大和川右岸詳細図 …… 32
図―21　貴瀬氏採集遺物① …… 34
図―22　貴瀬氏採集遺物② …… 35
図―23　貴瀬氏採集遺物③ …… 36
図―24　貴瀬氏採集遺物④ …… 37
図―25　貴瀬氏採集遺物⑤ …… 38
図―26　貴瀬氏採集遺物⑥ …… 39
図―27　貴瀬氏採集遺物⑦ …… 40
図―28　米尾氏採集遺物① …… 43
図―29　米尾氏採集遺物② …… 44
図―30　米尾氏採集遺物③ …… 45

図　版　目　次

図版１　北峯古墳群・航空写真
図版２　北峯古墳群・航空写真
図版３　北峯古墳群・Ⅰ区
図版４　北峯古墳群・Ⅰ区遺構
図版５　北峯古墳群・Ⅰ区遺構
図版６　北峯古墳群・Ⅰ区東半
図版７　北峯古墳群・Ⅱ区
図版８　北峯古墳群・Ⅱ区全景
図版９　北峯古墳群・Ⅱ区全景
図版10　北峯古墳群・Ⅱ区掘り下げ
図版11　河内国分寺塔跡
図版12　北峯古墳群・遺物
図版13　北峯古墳群・遺物
図版14　田辺遺跡
図版15　田辺遺跡・遺構
図版16　田辺遺跡・遺構
図版17　田辺遺跡・遺構
図版18　田辺遺跡・土坑―２
図版19　田辺遺跡・掘り下げ
図版20　田辺遺跡・遺物
図版21　船橋遺跡・貴瀬氏採集遺物
図版22　船橋遺跡・貴瀬氏採集遺物
図版23　船橋遺跡・貴瀬氏採集遺物


柏 原 市
1．河内国分寺跡
2．北峯古墳群
3．田辺遺跡
4．船橋遺跡
A．北峯古墳群調査地
B．田辺遺跡調査地
C．船橋遺跡遺物採集地
300
200
100
100
200
100
4
C
B
3
2
A
I
0
2 km

図－1　調査地位置図

第1章　北峯古墳群

1．調査に至る経過

本調査は、（仮称）柏原市立国分東小学校建設工事に伴う発掘調査である。調査地周辺の国分東条町は、西側の国分市場、国分本町、田辺と共に、国分小学校の校区内にあたる。しかし、国分小学校が飽和状態にあること、およびその校区が東西3.4km、南北2.6kmと広範囲であること、そして国分東条町東端の採石場跡地に大規模な宅地開発が計画されていることから、柏原市では、国分東条町に小学校を新設することになった。

学校用地はいくつかの候補地の中から、立地や環境等に基づいて、今回の調査地周辺に決定されることになった。これに対して、社会教育課では対象地が河内国分寺跡に近接することから遺跡の存在が予想されること、および1990年度の発掘調査によって対象地北側の尾根上で国分寺に関連すると推定される掘立柱建物の遺構を確認していること[(1)]、また、1984年度の明神山系遺跡分布調査の際に、対象地北西部の法面で横穴式石室かと思われる石組み遺構を確認していること[(2)]から、学校用地をできるだけ現農道の南側で確保するように求めてきた。その結果、若干の変更もあったが、図のように、ほぼ現農道の南側で用地を確保することに決定された。

この結果を受けて、社会教育課では用地交渉の見通しがついた調査対象地の南半、杉田義一氏の所有地（2,448m^2）を対象に、試掘調査を実施することになった。試掘調査は、平成９年７月８日から24日まで、実働７日間で実施した。その結果、中近世の遺物が少量出土したが、遺構はまったく認められず、予想した奈良時代前後の遺物の出土もみなかった。

これらの試掘調査結果と学校建設計画を基に、次のような発掘調査を実施することにした。まず、調査対象地北東部で農道を北側へ付け替える部分については、1990年度の調査によって遺構の存在が予想されるため、発掘調査を実施する。また、対象地中央やや西寄りの校舎建設予定地の部分についても基礎が深く、杭打ちを伴うため発掘調査を実施することにした。前者をⅠ区、後者をⅡ区とする。その他の区域については、工事中の立ち会いで対応することとした。

その後、平成９年11月21日付けで、用地の買収および造成を担当する柏原市土地開発公社（理事長・柏原市長　山西敏一）より埋蔵文化財の発掘通知が提出され、調査委託業者の決定を経て、平成10年１月５日から２月９日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、Ⅰ区では奈良時代前後の遺構や遺物が検出され、Ⅱ区では顕著な遺構は検出されなかったものの、飛鳥時代から近世にわたる遺物が出土し、調査後の断ち割りによって断層の存在が予想されるという結果をみた。なお、調査中には、大阪府教育委員会の瀬川健、大野薫、大楽康宏各氏からご指導をいただいた。

調査後、Ⅰ区については、工事による影響範囲を最小限とし、工事中に立ち会い調査を実施するという条件で工事の着手を認めた。Ⅱ区については、顕著な遺構が検出されなかったため、予定どおり工事を実施することになった。その後の立ち会い調査では、成果はみられなかった。

2．周辺の環境

調査地の南側は、標高200m以上を測る明神山系が急傾斜をなして屹立している。その北側に位置する調査地は、中位段丘面に相当し、標高42～54mを測り、現況では台地状を呈している。その北側は、約10mの比高差を有して（株）光洋精工の工場に至る。この比高差10m前後の落ち込みは、都市圏活断層図『大阪東南部』[3]によると、北東から南西へ直線的に延びる推定活断層として記載されているものである。さらに北側は、国道25号線を挟んで西流から北流へと流れを転じる大和川が位置している。

微地形をみると、調査地の東側はやや深い谷地形を呈し、Ⅱ区から北西へ延びる谷地形も調査地内にみられる。調査地の西側は、北西へ張り出す尾根によって遮られている。また、調査地の南辺の傾斜変換線に沿って、多数のため池がみられる。このため池は自然に湧水しており、晴天が続いても涸れることがないと地元の方に聞いた。

調査地周辺は、雛壇状に整地され、やや高い部分はぶどう等の果樹園として、低い部分は水田として利用され、現在まで目立った開発もされることなく、景観が残されてきた。

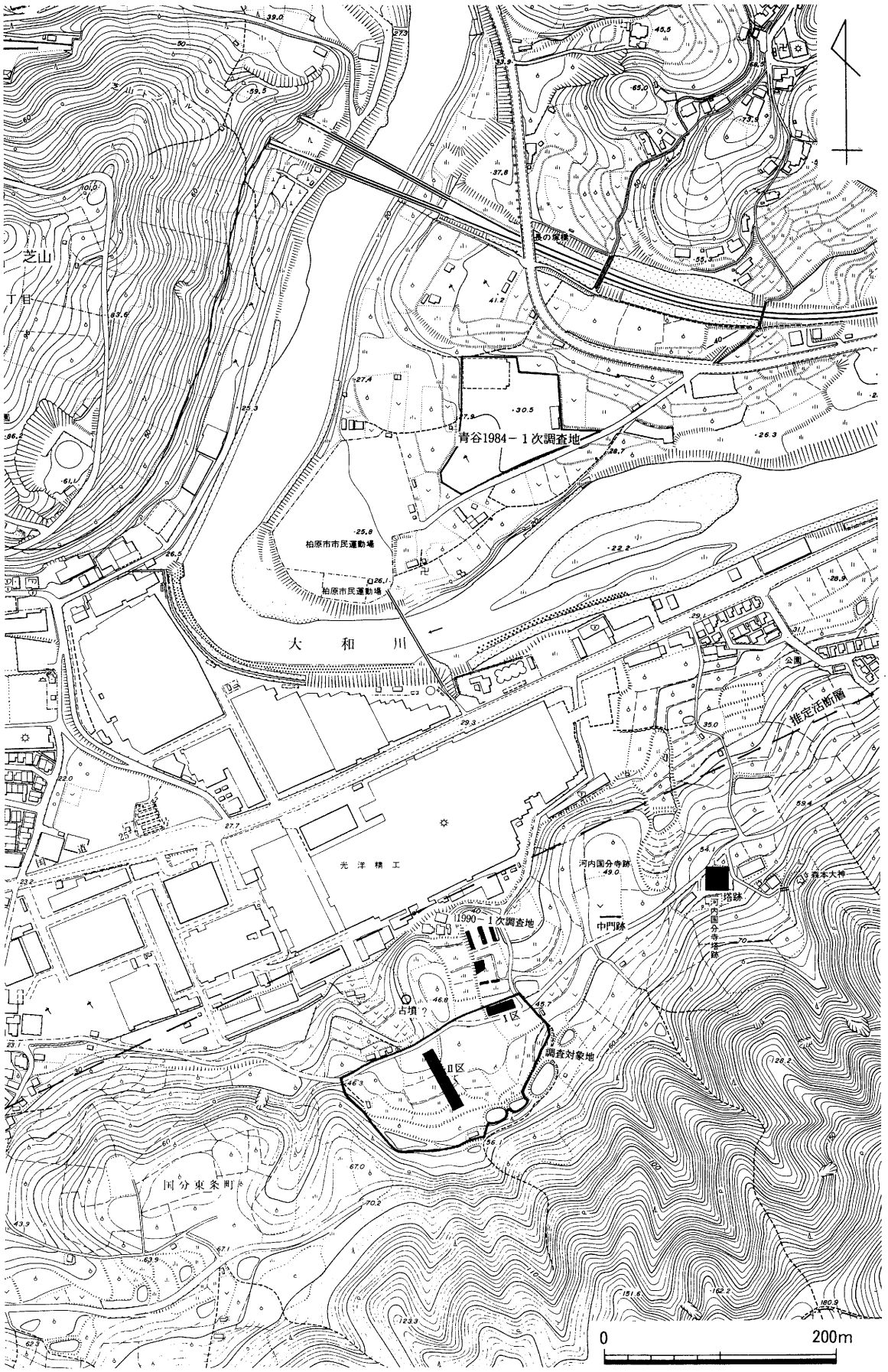
調査地の東には、河内国分寺跡が位置する。東条（ひがんじょう）廃寺、あるいは塔本（とのもと）廃寺とも呼ばれてきたこの寺院跡は、石井信一氏・魚澄惣五郎氏らによって河内国分寺に比定されてきたが、その後、当時大阪府教育委員会の技師であった藤沢一夫氏の研究によってほぼ確定され、また、1956年には大阪府による塔跡の公有化も実現した。[4]

この間、1936年度には大阪府による塔跡の発掘調査が実施されていたが、報告書の刊行をみず、その成果も十分に把握できるものでなかったため、1969年度に、再度大阪府教育委員会によって塔跡、および主要伽藍の存在が予想される西側の尾根上において発掘調査が実施された。[5]

その結果、塔跡では良好に遺存する凝灰岩壇上積みの基壇を確認し、西側の尾根では中門と推定される遺構を確認している。基壇に取り付く階段は、南・北・東の三方で確認され、おそらく西も含めて四方に凝灰岩切石による階段が存在したものと思われる。また、基壇上面には方形の凝灰岩切石が四半敷きにされ、東西長が18.77m、南北長が18.97m、高さ1.542mを測る規模の大きい基壇が確認された。礎石は、心礎を含めて７石が残存しており、いずれも出枘式の花崗岩製である。塔は一辺長10.368m、脇間3.298m、中央間3.772mを測る七重塔と推定されている。

塔跡の西約100mの北へ張り出す舌状台地上には、金堂・講堂などの主要伽藍が位置すると予想されていた。しかし、果樹園として利用されている現況等から調査範囲が限られ、僅かに中門と推定される遺構のみが確認された。ここでは、東西に延びる凝灰岩の石列が検出され、この石列が一部で南側へ張り出す状況が確認された。石列の広がり等は確認されていないが、その北側では基壇の基盤と推定される砂利敷きが確認されており、石列から北側に中門が存在したと推定されている。

遺物としては、９種類の軒丸瓦、９種類の軒平瓦を始めとする多量の瓦のほか、塼・鬼面文様端飾り板・相輪関係銅製品・鉄釘・富寿神宝などが出土している。中でも、複弁七葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦のセットは、河内国分寺式瓦として河内およびその周辺でしばしば認められる。


芝山
青谷1984－1次調査地
柏原市市民運動場
柏原市民運動場
大和川
光洋精工
1990－1次調査地
河内国分寺跡
中門跡
塔跡
河内国分寺塔跡
森本大神
公園
推定活断層
占墳？
Ⅰ区
Ⅱ区
調査対象地
国分東条町
0
200m

図－2　調査地位置図

調査地の北約500m、大和川の対岸には8世紀中葉以降の竹原井頓宮跡と推定される青谷遺跡が位置する。かつては奈良時代の寺院跡とされていたのだが、1984年度の柏原市教育委員会による調査によって特異な配置を有する基壇遺構や石敷き遺構が検出され、塚口義信氏の研究成果などを参考にし、竹原井頓宮跡の可能性が高いと判断されるに至った。[6] しかし、その範囲や規模はいまだに明らかでなく、時期的な位置づけをめぐっても意見が分かれている。筆者は、1984年度の調査によって発見された遺構は、8世紀中葉以降の竹原井頓宮に伴う遺構であり、竹原井頓宮の一部であると考えている。[7]

重要な点は、河内国分寺のすぐ対岸に竹原井頓宮と推定される遺跡が存在することであり、その位置関係は無視できないものがある。調査地の北側で大和川の川幅がもっとも狭くなり、かつて夏目の渡しと呼ばれる渡しがあり、現在もこの間に吊り橋が架けられていることから、おそらく奈良時代まで遡って、何らかの交通手段により、大和川の両岸はこの地で結ばれていたのであろう。

調査地周辺では、1984・1985年度に明神山系遺跡分布調査として将来予想される開発に備えて柏原市教育委員会で分布調査を実施している。[8] 当該地は、第12区として1984年度に分布調査を実施している。分布調査を担当した筆者は、概報で「第12区は畑が多いが、分布調査による成果はなかった。しかし、調査範囲外の第12区北側のぶどう畑で、横穴式石室かと思えるものを発見した。崖面に自然石を積み上げ巨石をのせた石室状の断面がみられる。幅は145cm、高さ110cmをはかり、主軸は南南西を向いている。墳丘は確認できなかったが、古墳の可能性が考えられる。標高は40mと非常に低い。また、その東側の平坦地は、遺跡の存在が考えられ、国分寺の調査の際にも注目されている台地である。」と報告している。

その後、この注目される台地の一部に駐車場の建設が計画され、柏原市教育委員会によって1990年度に部分的に発掘調査を実施している。[9] その結果、掘立柱の遺構が検出され、国分寺に関連する遺構ではないかと考えられたため、盛り土の下に遺構を保存したうえで駐車場を建設してもらうこととした。調査がごく部分的なものであったため、遺構の時期・規模・性格等を明らかにできなかったのは残念であるが、遺構の保存のためにはやむを得ないものであった。ただ、予想どおり、以前から注目されてきたこの台地上に、国分寺に関連すると思われる遺構が確かに存在することが確認できたことは大きな成果であった。

これら以外には、調査地周辺では目立った調査はこれまでに実施されていないが、調査地の西約700m付近に、地名や瓦の出土から河内国分尼寺の存在が推定されていること、そして河内国分寺から国分尼寺を経て河内国府へと長尾街道によって結ばれていたであろうことを指摘しておかなければならない。

なお、調査地は『柏原市の遺跡と指定文化財（遺跡分布図）』[10]では北峯古墳群の名称となっているが、『大阪府文化財分布図』[11]では明神山古墳群となっている。これは『大阪府文化財分布図』作成の際の手違いによるもので、『明神山系遺跡分布調査概報Ⅱ』で報告しているように、本遺跡を本書では北峯古墳群の名称で報告することにする。また、今後は遺跡の性格を明らかにするために東条遺跡等の名称も検討すべきであろう。

3．試掘調査

試掘調査は、調査対象地の南半に５箇所のトレンチを設定して実施した。本来は、対象地の全体にトレンチを設定したかったのであるが、用地買収と工期の関係から南半に限らざるを得なかったものである。各トレンチは、東西1.5m、南北2mの規模とし、調査順に１～５トレンチとした。試掘調査は途中若干の中断をはさみ、平成９年７月８日から24日まで、実働７日間で実施した。

１トレンチは、調査対象地の西端、標高49.1m前後に設定した。地表下25～40cmの灰褐色砂質土から土師質の羽釜等少量の遺物が出土した。その下には無遺物の灰褐色粘質土、花崗岩のブロックを含む褐色粘質土と続く。地表下65cm以下にみられる褐色粘質土は、南から北へ、西から東へと下がっており、地山と考えられる。遺構は認められなかった。深さは140cmまで掘り下げた。

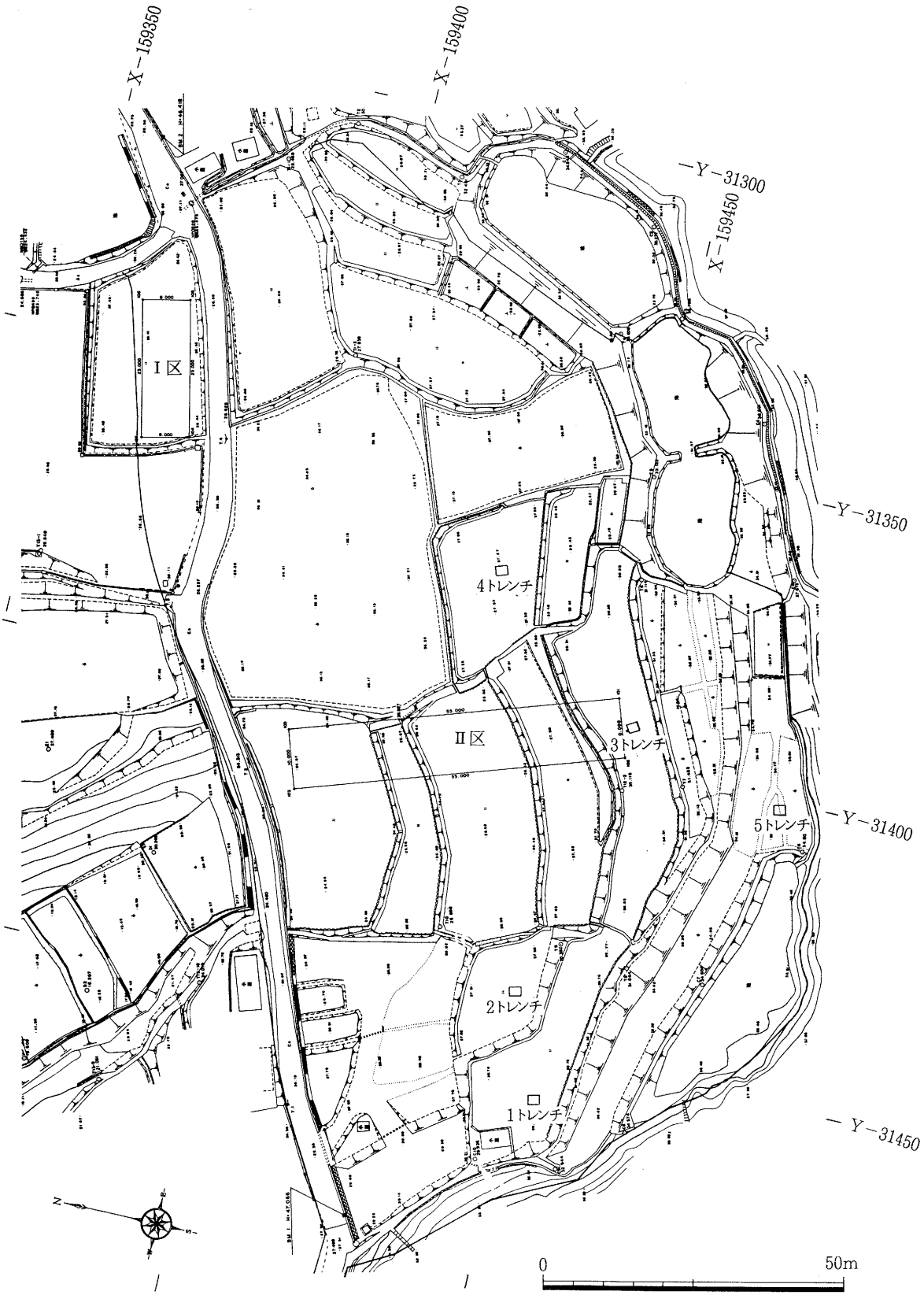
２トレンチは、１トレンチの東18m、標高47.2m前後の１段低い水田面に設定した。耕作土、床土下に灰褐色砂質土、褐色砂質土がみられる。床土からは近世前期の磁器が出土しており、水田として開墾された時期を示しているのではないかと思われる。また、灰褐色砂質土からは少量の土師器が出土している。褐色砂質土は地表下50～95cmにあり、瓦器片が出土している。この２層は中世の遺物包含層と考えられるが、遺物量は非常に少ない。その下には灰褐色粘質土、褐色粘質土がみられるが、非常に堅く締まっており、遺物も認められない。地山と考えて間違いないであろう。深さは130cmまで掘り下げた。

３トレンチは、調査対象地のほぼ中央、南寄りに設定した。標高は49.5m、発掘調査時のⅡ区は、この３トレンチの位置から北側にあたる。耕作土、床土下に灰褐色系の砂質土と黄褐色系の粘質土が互層に堆積している。その下層から瓦器など中世の遺物が少量出土している。さらにその下、130cm以下には堅く締まった黒灰色砂質土がみられ、地山であろう。

４トレンチは、３トレンチの北東34mに位置し、標高46.7mとトレンチの中では最も低い位置に設定したトレンチである。耕作土、床土下に灰褐色砂質土が認められるが遺物は出土していない。その下には青灰色シルトがみられ、この層から土師器や木製品が出土している。時期を明確にできる遺物は認められないが、中世もしくは近世であろう。青灰色シルトは下層へ下がるにつれてかなりの湧水を伴うようになる。４トレンチの南30mにあるため池の影響によるものと思われる。155cmまで掘り下げたが、激しい湧水のため、それ以上の掘り下げを断念した。そのため、４トレンチでは地山を確認できなかった。

５トレンチは、３トレンチの南西30m、最も高い標高54.4m前後、西側にため池がある畑地に設定した。耕作土、床土の下に褐色砂質土が認められ、この層から近世の陶磁器が少量出土している。その下には地表下130cmで青灰色シルトがみられるが、調査では青灰色シルトの上面までの掘り下げを行ったのみである。

以上の試掘調査結果から、調査対象地周辺の本格的な開墾は近世になってからと考えられ、それに先行して、中世に一部が開墾されている可能性があり、灰褐色系の砂質土がこれに伴うものと考えることができるが、遺構はまったく確認できなかった。また、調査前に予想していた国分寺に伴う遺構、すなわち奈良時代頃の住居跡等は遺物と共に、まったく確認できなかった。


－X－159350
－X－159400
－Y－31300
－X－159450
－Y－31350
－Y－31400
－Y－31450
Ⅰ区
Ⅱ区
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
4トレンチ
5トレンチ
0
50m

図－3　調査地全体図

4．Ⅰ区の調査

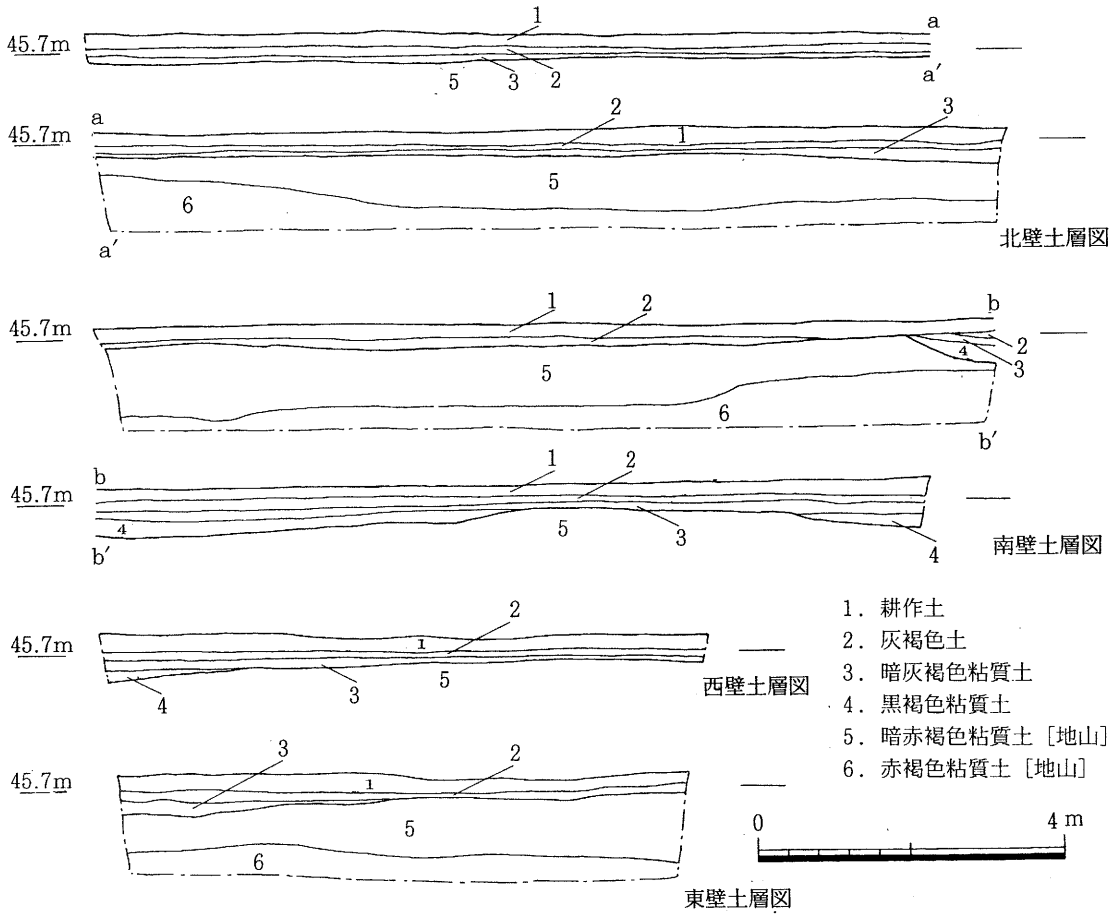
概　要

Ⅰ区は調査対象地北東端部の水田跡に設定した。ここは西から延びてきた農道がやや南へと振っている部分にあたり、計画ではこの農道を直線的に変更し、その南側、学校用地との間にはコンクリート擁壁を設置する予定であった。そのため、道路および地下埋設物、そして擁壁によって埋蔵文化財に影響が生じると考えられたために調査を実施したものである。

調査区は東西23m、南北８m、面積184m²の範囲で設定し、残土の置き場等の関係から、西側88m²と東側96m²の二区に分け、西側の調査区から調査を実施した。その結果、西側の調査区からは掘立柱建物等が検出されたが、東側からは少量の遺物が出土したものの、遺構はまったく認められなかった。そのため、東側の調査区では１m前後掘り下げて下層の状況の確認を行った。

土　層

調査区全体に厚さ10～20cmの耕作土がみられ、その下に床土に相当する灰褐色土が薄く認められる。その下には厚さ10cm程度の暗灰褐色粘質土がみられ、奈良時代から中世の遺物をわずかに含んでいる。暗灰褐色粘質土は、Ⅰ区南東部では認められなかった。その下は土坑―１・２の埋土としての黒褐色粘質土が認められる部分を除くと、すべて暗赤褐色粘質土の地山に至る。旧水田面からわずか20～50cmで地山に至り、予想していたよりも地山面はかなり浅いものであった。



図－４　Ⅰ区土層図

遺　構

遺構はＩ区の西半部でのみ確認された。確認された遺構はピットが23個、土坑が２基である。

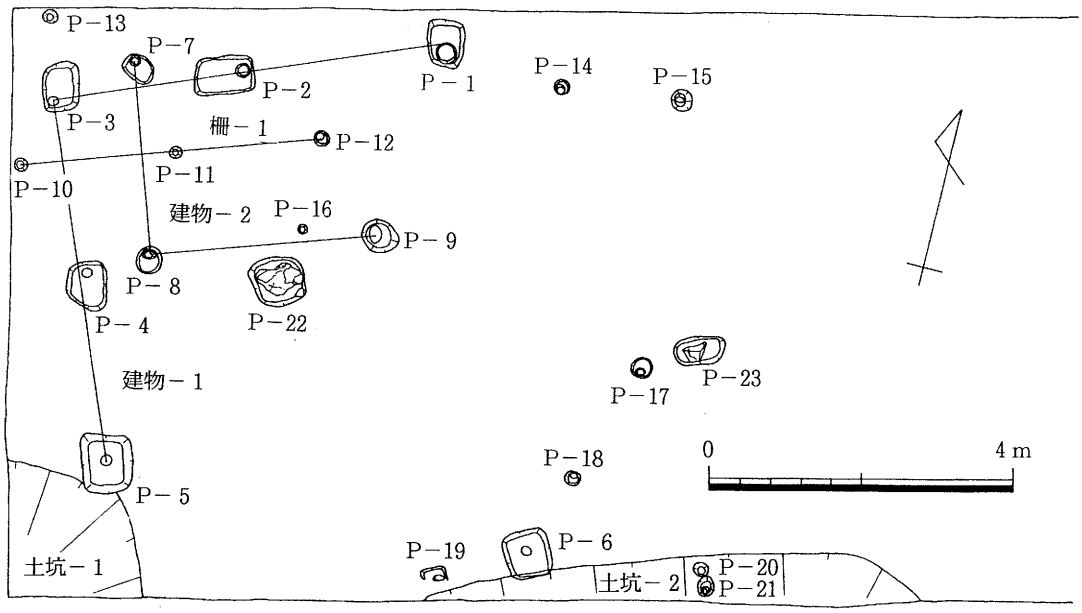
ピットは一辺60cm前後の方形平面を呈するピットと、直径20cm前後の円形平面を呈するピットに大きく分けることができる。これらのピットから建物２棟と柵１列を復元した。

建物―１は、長方形平面を呈するピット―１～５によって構成される。ピット―１～３の柱間寸法は2.6m、2.5mを測り、ピット―３～５の柱間寸法は2.3m、2.5mを測る。各ピットは一辺長50～80cm、深さは10cm前後を残すにすぎないが、ピット―５のみ約30cmの深さを測る。柱の太さはその痕跡から直径14cm前後と復元される。ピット―６がピット―１に対応し、建物が構成されていた可能性もある。建物の軸はN22°W。ピット―１～３・５から土師器や須恵器の小片が出土しており、７世紀後半から８世紀前半の遺物が認められる。

建物―２は、直径30cm前後の円形平面のピット―７～９によって構成される建物である。柱間寸法は2.55mと2.9mを測る。ピットの深さはピット―９で21cmを残すが、ほかは10cm未満である。柱は直径８cm前後と非常に細いものである。建物の軸はN18°W。ピット―９から奈良時代かと思える土師器の小片が出土しているのみである。よって奈良時代の建物かとも思えるが、ピットの形状や規模から考えると、平安時代、あるいは中世まで下る可能性も十分に考えられる。

ピット―10～12によって柵―１を復元したが、対応するピットが調査範囲外へ続いている建物の一部とも考えられる。ピットは直径16～20cmの円形平面を呈し、深さは10cm前後を残す。ピット―10から土師器と平瓦片、ピット―11から土師器片が出土しており、奈良時代かと推定される。奈良時代の遺構と考えるならば、ピットの規模などからやはり柵と復元するほうがよいであろう。

その他のピットも掘立柱建物に伴うものと推定されるが、建物を復元するまでには至っていない。その中で、ピット－14・15・17・20～23から土師器の小片が出土している。時期を明らかにできるものは少ないが、８世紀前半頃の杯が確認できる。



図－５　Ｉ区西半遺構平面図

Ⅰ区南西部で検出した土坑－１は、1.7m以上の規模で、20cm以上の深さを測る。埋土は黒褐色粘質土で、奈良時代の土師器や平瓦が出土している。土坑と考えたが、壁面の傾斜が緩やかであることから自然の落ち込みの可能性も考えられる。

土坑－２は、調査区中央付近の南壁際で検出された。かなり強い傾斜で落ち込んでいることから何らかの遺構であることは間違いないと思われるが、その規模や性格を明らかにすることはできなかった。深さは40cm以上で、黒褐色粘質土を埋土とする。土師器・須恵器（１～５）が出土しており、７世紀中葉を前後する時期の遺物がみられる。

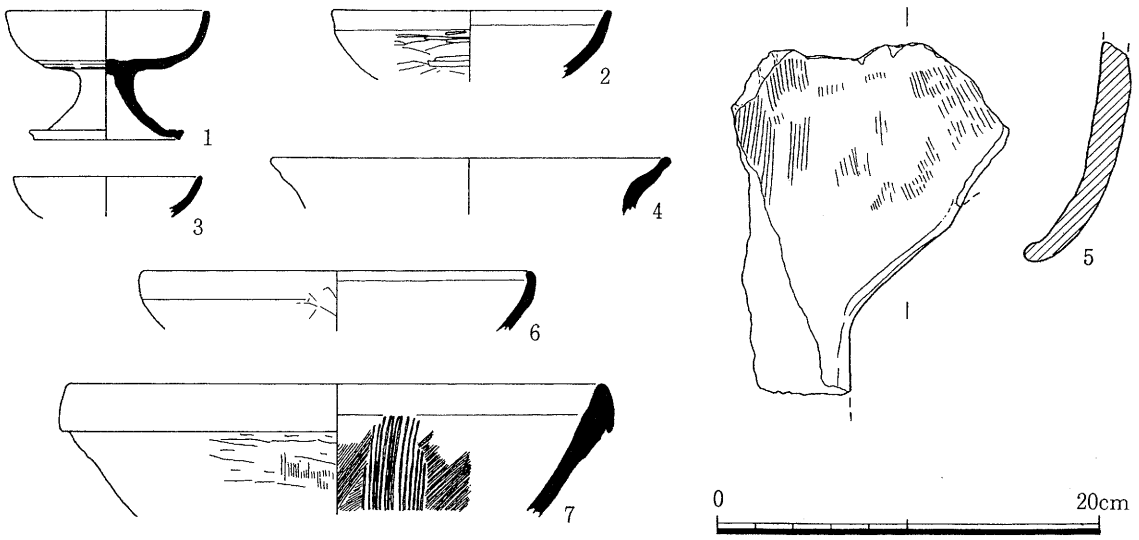
調査区東半部ではまったく遺構が確認できず、検出したピットの残存状況も悪いことから、調査区東半部を中心に、後世にかなり遺構面が削平を受けているようである。

遺　物

遺物は土師器・須恵器・瓦・瓦器が出土している。１～５は土坑－２から出土、６・７は東半部の暗灰褐色粘質土から出土している。

１は須恵器の短脚無蓋高杯。灰白色を呈し、表面はかなり風化している。２・３は土師器の杯。２は口縁端部を丸くおさめる。外面下半がヨコ方向のヘラケズリ、上半がヨコ方向のヘラミガキ、内面はナデ、口縁部はヨコナデ調整。３は小形の杯。内外面とも摩滅のため調整は不明である。４は土師器甕の口縁部。口縁は外反しながら端部で肥厚し、丸くおさめる。ヨコナデ調整で仕上げる。５は移動式の竈。曲げ庇式の焚き口上部にあたる。庇部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。外面タテ方向のハケメ、内面ナデ調整。

６は大形の杯。口縁は内湾し、端部を丸くおさめる。外面ヘラケズリ調整、口縁部はヨコナデ調整、内面は磨滅のため調整不明である。７は瓦質の擂り鉢。体部から直線的に伸びる口縁は、次第に厚くなり、端部で折り返し状に肥厚する。外面はヨコ方向のヘラケズリ後に部分的にタテ方向のハケメ、内面は右上がりの細かいハケメの後に原体幅3.55cm、14条の擂り目が施される。



図－６　Ⅰ区出土遺物

5．Ⅱ区の調査

概　要

試掘調査の３トレンチから北側、本校舎の建設予定地に設定した幅10m、長さ25mの南北に長い調査区である。南から北へ下る傾斜地に造られた５枚の水田にわたり、最も高い南端で標高49.6m、最も低い北端で44.1mを測る。地山までの調査終了後、幅７m、長さ40mの範囲でさらに掘り下げを行った。これは地山の確認とともに、ボーリングデータなどから推定されていた地下の断層を確認することを目的としたものである。

土　層

図－７に太線で示したラインＡ以下、19～38層が地山と判断した。まず地山に至るまでの土層について説明をすると、土層は基本的には傾斜に沿った堆積状況を示している。調査区南端から15m付近までは灰色～褐色系の砂質土がやや北下がりに堆積している。南端から15～20m付近にみられる灰色シルト（６層）からは、土師器・須恵器・瓦・黒色土器・瓦器などが出土している。

20mから30mにかけてはやや複雑な堆積を示す。まず、地山に黒灰色シルト（17層）を埋土とする浅い溝状の遺構が掘り込まれている。この溝状の遺構は等高線に平行するように東西に伸びている。灰色シルト（６層）より下層に相当することから、中世以前の開墾に伴うものと考えられる。その後、このあたりは３段に整形され、赤褐色砂礫土（14層）によってこの段を解消するように盛り土されている。赤褐色砂礫土（14層）は洪積層に由来する土層と考えられ、調査区内には認めることができないものであることから、他所から運ばれてきたものと考えられる。この一連の整地は中世から近世にかけてのものと考えられるが、何を目的としたものかは不明である。

地山面までの調査後、地山の確認と存在の予想される断層に関連する資料を求めて、２～３mをさらに掘り下げた。その結果、やはり19層以下では遺物はまったく確認できず、人為的な土層も確認できなかったことから、ラインＡの面を地山とする判断に誤りがなかったことが確認できた。

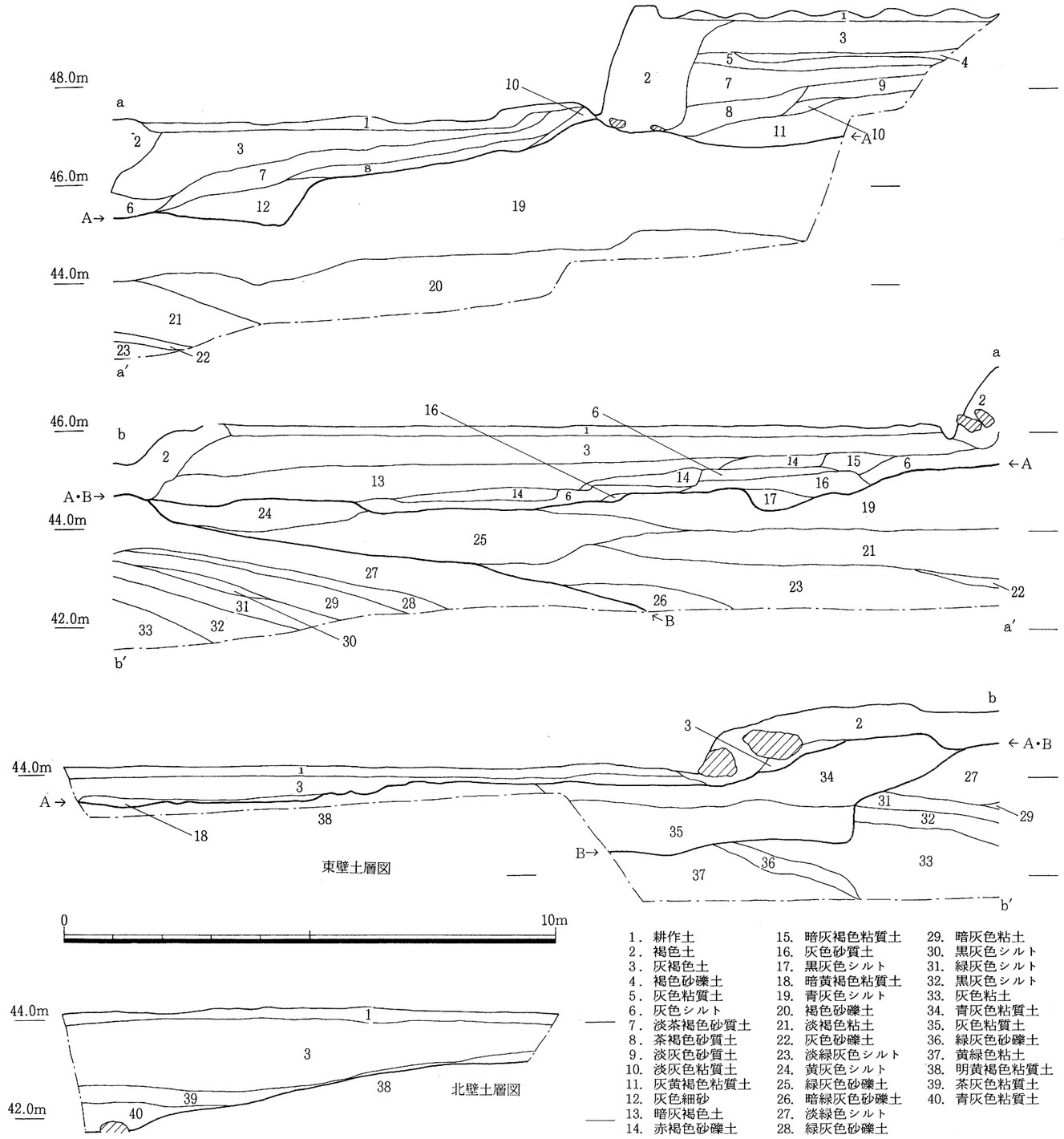
また、南端から30～40m付近の土層が、15～20°の角度で南へ、すなわち傾斜の高い側へ直線的に落ち込んでいることが確認できた。これら南下がりの土層をよく観察すると、南端から25～35mにかけての淡緑色シルト（27層）上面のラインＢを境に、傾斜角度がまったく異なっていることに気付く。おそらく、ラインＢより北側が断層に伴って傾斜した土層であり、ラインＢより南側は断層後に堆積した土層であろう。

37mから44mにかけて、これら断層に伴うと考える土層が断ち切られ、青灰色粘質土（34層）、灰色粘質土（35層）の堆積がみられる。人工的なものと考えることも可能かもしれないが、34・35層は地山と判断しており、この不整合面は自然の営力によるものと考えておきたい。

なお、地山の土層はシルトあるいは粘土と砂礫土の互層となっており、これはラインＢの上下でも変わることはなく、自然の堆積と背後の明神山系の土砂崩壊とが繰り返された結果と思われる。

遺　構

中世から近世にかけての耕作に関連すると考えられる浅い溝状遺構などを除くと、遺構は確認できなかった。


48.0m
46.0m
44.0m
42.0m
a
a′
b
b′
A→
←A
A・B→
←A・B
B→
←B
東壁土層図
北壁土層図
0
10m
1. 耕作土
2. 褐色土
3. 灰褐色土
4. 褐色砂礫土
5. 灰色粘質土
6. 灰色シルト
7. 淡茶褐色砂質土
8. 茶褐色砂質土
9. 淡灰色砂質土
10. 淡灰色粘質土
11. 灰黄褐色粘質土
12. 灰色細砂
13. 暗灰褐色土
14. 赤褐色砂礫土
15. 暗灰褐色粘質土
16. 灰色砂質土
17. 黒灰色シルト
18. 暗黄褐色粘質土
19. 青灰色シルト
20. 褐色砂礫土
21. 淡褐色粘土
22. 灰色砂礫土
23. 淡緑灰色シルト
24. 黄灰色シルト
25. 緑灰色砂礫土
26. 暗緑灰色砂礫土
27. 淡緑色シルト
28. 緑灰色砂礫土
29. 暗灰色粘土
30. 黒灰色シルト
31. 緑灰色シルト
32. 黒灰色シルト
33. 灰色粘土
34. 青灰色粘質土
35. 灰色粘質土
36. 緑灰色砂礫土
37. 黄緑色粘土
38. 明黄褐色粘質土
39. 茶灰色粘質土
40. 青灰色粘質土

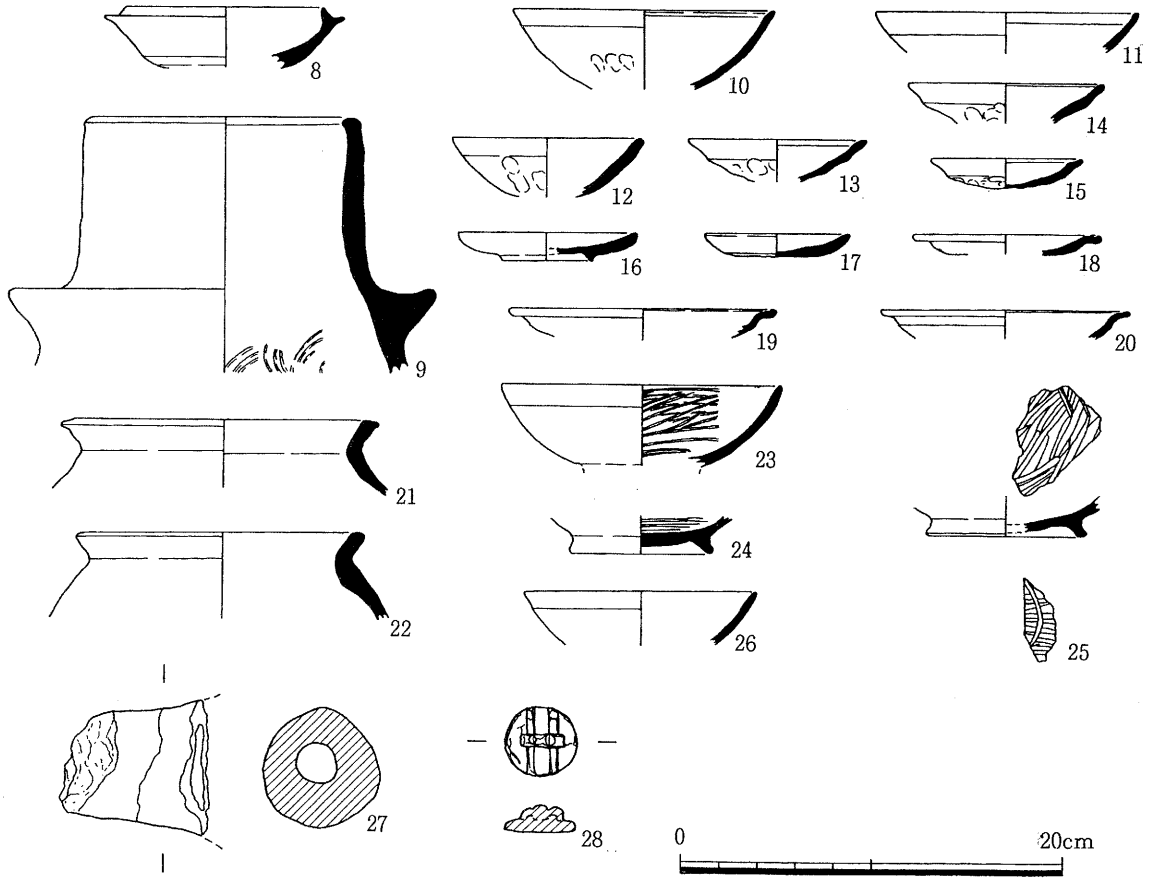
図－7　Ⅱ区土層図

遺　物

遺物は土師器・須恵器・瓦・黒色土器・瓦器・陶磁器・土製品などが出土しているが、量は少なく、残存状態の良好なものもみられない。遺物の大半は調査区南端から15～20mの灰色シルト（6層)、あるいはその周辺から出土しているが、28・35・38は調査区南端の上層から、16・26は北寄りの上層から、17は北端の茶灰色粘質土（39層）から出土している。

8は須恵器杯身。短い立ち上がりを有し、底部外面には回転ヘラケズリを施す。9は須恵質の土管あるいは羽釜とされるものである。直線的に伸びる円筒部は、端部でやや肥厚して丸くおさめる。この円筒部は次第に外方へ膨らむようであるが、全体の形状は不明である。直線状から外方へ膨らむ変換点に鍔が取り付く。鍔上面は平坦面をなし、下方は丸みをおびた断面三角形状を呈する。内外面ともにナデ調整、内面に部分的に同心円の当て具痕が残る。残存部から判断すると、円筒部をソケット状に差し込む土管のような用途を考えるのが妥当と思われる。

10～22は土師器。10～14は杯。10・12の外面には弱い指頭痕が残り、13・14の外面には強い指頭痕が残る。13・14は口縁部と体部の境で段をなしている。15～20は皿。15は13・14と同形態の皿で、口縁部は強く外反する。16は低い断面三角形の高台を伴う。17は平底を呈する。内外面ともナデで調整する。18～20は強く外反した後、端部をつまみ上げるように肥厚する形態の皿である。内外面ともにナデで仕上げる。21・22は羽釜あるいは甕の口縁部。いずれもくの字状に屈曲した口縁部が、21では端部が外方へ拡張し、22では端部の断面が方形状をなす。口縁部は2段のヨコナデ、体部は



図－8　Ⅱ区出土遺物①

内外面ともナデ調整である。

23～25は黒色土器の椀。23は口径14.6cm。内面にはヨコ方向の細かいヘラミガキを施す。24は高台部。底部内面にはヘラミガキがみられる。25も高台部であるが、内外面ともに細かいヘラミガキを施している。23・24は内面のみ黒色、25は内外面ともに黒色を呈する。

26は瓦器椀。内外面ともに磨滅が激しく、調整は不明である。比較的浅い体部と推定される。

27は鞴の羽口。残存長7.6cm、孔径2.2cmを測る。先端部は欠損しているが、破損部分にも溶融が認められるので、破損後も使用していたのではないだろうか。裾部はハの字状に広がると思われるが、欠損のため全形は明らかにできない。

28は面子であろう。直径3.7cm、厚さ0.6cmの円板に2状の細い突帯とこれにかかる棒状の取っ手が付く。取っ手の上面には2箇所にくり込みがみられる。明橙色を呈し、上面には釉が施される。

29～40は瓦である。29・30は軒丸瓦。29は複弁七葉蓮華文軒丸瓦で、これまでに河内国分寺や青谷遺跡を初め、各地で出土している軒丸瓦である。外区には珠文と鋸歯文がめぐる。この資料からは確認できないが、中房は1＋6の蓮子を配し、弁間の界線が1本欠失していることがこの種の軒丸瓦の特徴である。外径は16.4cm、内区径は9.0cm、中房径は4.0cmと復元できる。30も蓮華文軒丸瓦であるが、小片であるため詳細は不明である。内区の直径は19cm弱に復元でき、29よりもかなり大きくなる。外区は内縁に幅の狭い鋸歯文をめぐらせている。これまでに河内国分寺で出土している軒丸瓦に該当するものは見あたらない。瓦当裏面には丸瓦部の剥離痕がみられる。

31は唐草文軒平瓦。右から左へと伸びる唐草は細く、上下に反転しながら続いている。おそらく均整唐草文であろう。内区の幅は2.2cmと狭く、1.5cm幅の上外区に疎らな珠文が施されている。珠文の間隔は約1.8cmである。長さは23cmを残しているのだが、瓦当面がわずかしか残存していないため、細部が確認できない。国分寺では初見であるが、田辺瓦窯出土瓦に同型品がある。[12]

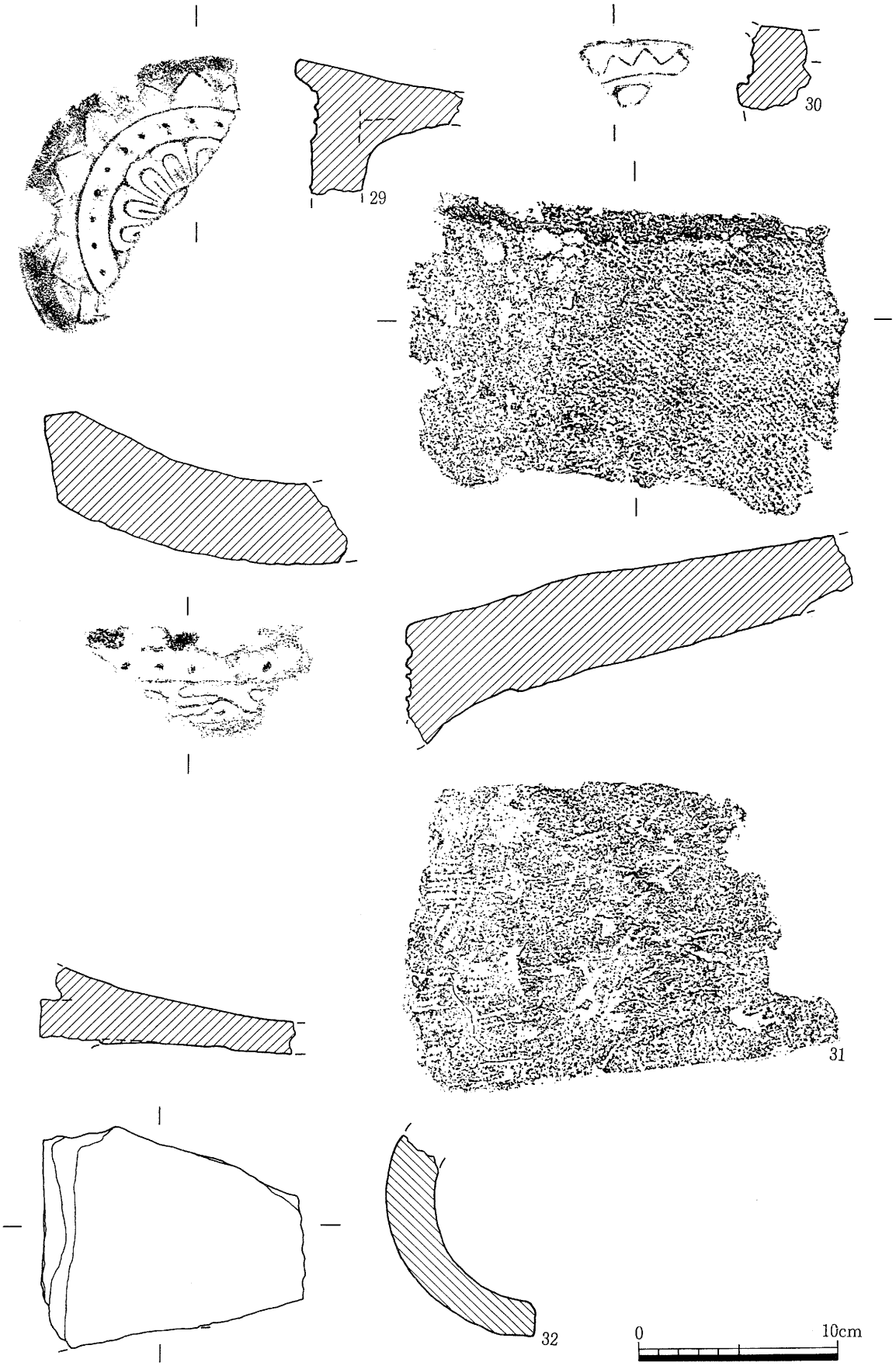
32は軒丸瓦の瓦当部が剥離した丸瓦部である。凹凸両面に補充粘土が部分的に残っている。凸面はタテ方向のナデ、内面は布目痕の上に補充粘土が施され、ナデで仕上げられている。

33は玉縁式の丸瓦。凸面ナデ調整、凹面には布目が残り、端面はヘラケズリ、側面もヘラケズリを施すが、一部に分割の際の破面が残る。

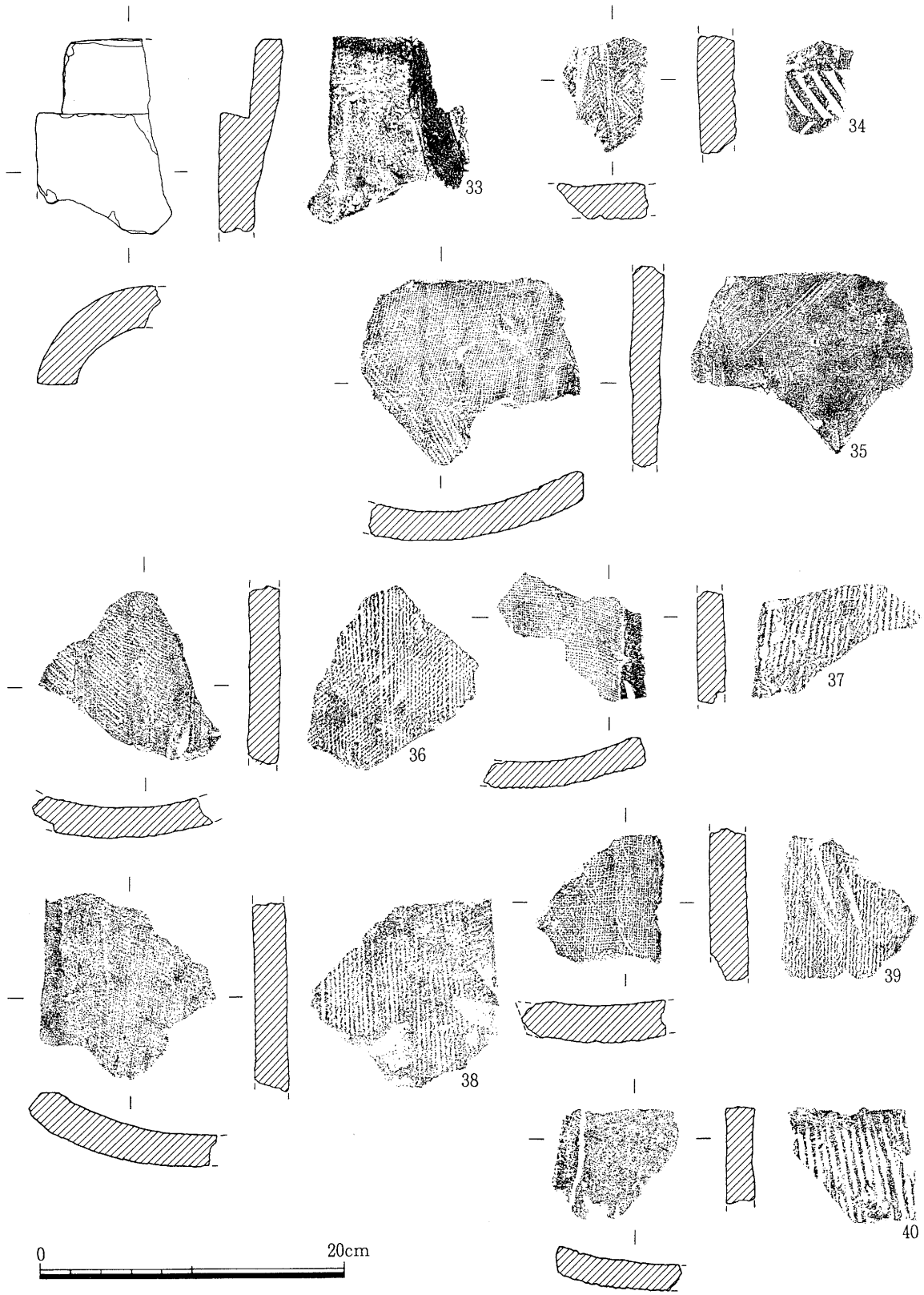
34～40は平瓦。34の凸面には有軸綾杉の叩きが施される。色調は灰色を呈し、通有の綾杉文叩きの平瓦と変わるところはない。通有の平瓦は桶巻き作りであるが、本例は桶巻き作りか一枚作りか判断できない。35の凸面は板状工具によるナデで仕上げられている。おそらくナデに先行する叩きが存在したのであろうが、その痕跡はまったく認められない。

36～40は凸面に縄叩きを施す平瓦。36・39は4本／cm、37・38は3本／cm、40は2本／cmの縄目である。36は凹凸両面に糸切り痕がみられる。37の側面はヘラケズリによって調整されるが、凸面寄りが未調整となっており、分割の際の破面のようにもみえる。しかし、凹面に模骨痕はまったくみられない。38の側面は、角を面取りし、丁寧なヘラケズリ調整を施している。

34・37など一部の平瓦が桶巻き作りの可能性を残しているが、大半の瓦は一枚作りである。



図－9　Ⅱ区出土遺物②



図－10　Ⅱ区出土遺物③

6．まとめ

調査のまとめ

調査の結果、Ⅰ区では掘立柱建物や柵が検出され、一部は中世に下るかと思われるが、その大半が奈良時代前後の遺構と推定されるものであった。この位置は、野上丈助氏らによって僧房などが存在するのではないかと推定されていた地にあたり、これらの遺構の発見は注目できる。しかし、建物の軸は南北からはかなりずれており、むしろ地形に即して建てられているようである。現状では国分寺に関連すると推定される遺構が、この台地上に存在するという指摘にとどめておきたい。

これらの遺構のなかに、国分寺に先行する時期の遺構や遺物が見出せることは注目できるであろう。土坑－２はその性格や規模を明らかにできないが、７世紀まで遡る可能性をもつ遺構であり、建物－１も８世紀前葉と推定される。Ⅱ区からも７世紀代の須恵器や土師器が出土している。

次に、奈良時代以後、遺跡がどのように継続するのかが問題となる。遺構が確認できず、遺物量も少ないが、土師器・黒色土器の出土から９～11世紀にも何らかの営みがあったと考えてよいであろう。寺院関連施設なのか、集落なのか、もしくは農耕に伴うものなのか。これを判断することはできないが、少なくとも周辺に人々が居住しており、この地を何らかのかたちで利用していたことは間違いないであろう。そして、それは河内国分寺に関わるものであったと考えてよいであろう。大阪府教育委員会による調査概報には、鎌倉時代前葉頃に河内国分寺が壊滅したことが文献史料からも考古学的資料からも立証できると報告されている。今回の資料もこれに矛盾するものではないと考えるが、もう少し早く、平安時代末頃に廃寺となっている可能性も考えておきたい。[13]

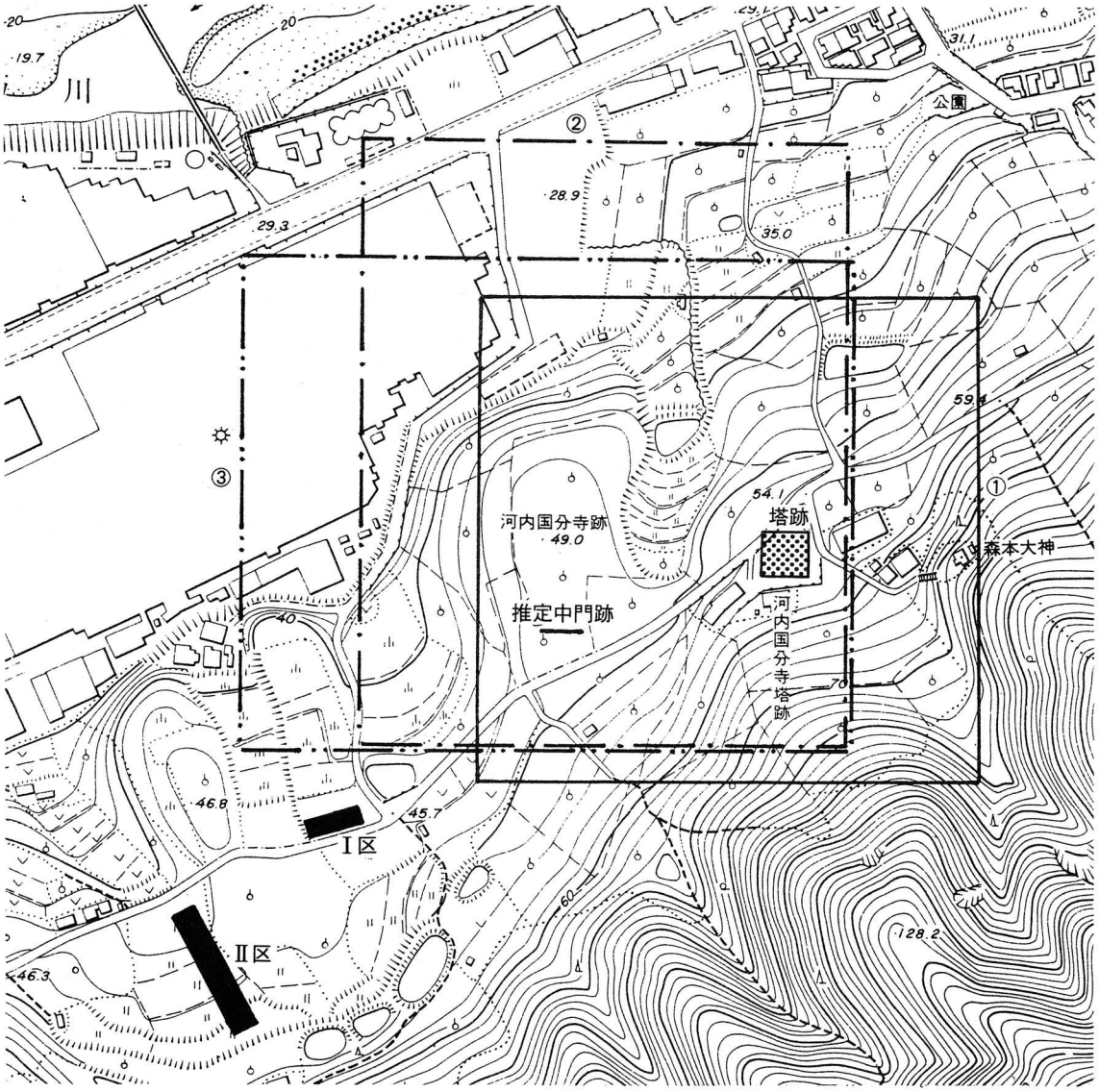
その後、14世紀以後の遺物が少量みられる。おそらく、これは農地としての開墾に伴うものであったと考えられる。しかし、その規模はまだ小さく、調査対象地全体が開墾されるのは近世になってからであろう。そして現在まであまり変化することなく、農地としての景観を伝えてきたものと考えられる。

河内国分寺の寺域について

ここで、河内国分寺の寺域について検討してみたい。先述のように河内国分寺の伽藍は、塔跡と中門跡と推定される遺構以外は確認されていない。そこから寺域や他の伽藍の位置を復元しなければならないのだが、これがなかなか厄介である。塔跡の南側は急傾斜の明神山系が迫り、そこから舌状の台地が北へと数本延びている。当然その間には谷が刻まれている。建物を建設できるスペースは限られ、寺域を限る築地や回廊などの施設が寺域を完周していたとは、とても考えられないのである。それでは、これまでにどのような寺域が復元されてきたのか。それをまず見てみたい。

柏原市の「遺跡分布図」[14]では約２町四方の寺域が復元され（図―11・①）、当然のことながら『大阪府文化財分布図』[15]でもほぼ同様の寺域が復元されている。どのような経緯でこの寺域が復元されるに至ったのか筆者は知らないが、現在は、この範囲を河内国分寺跡として扱っている。

一方、1969年度の大阪府教育委員会の調査結果に基づいて、水野正好氏は東西２町、南北２町半の寺域を復元されている（図―11・②、12）。水野氏は、中門の北側平坦地に金堂・講堂が位置し、講堂の東西に経楼と鐘楼が位置する。中門から東西に延びる回廊は塔院に取り付き、その北側に食

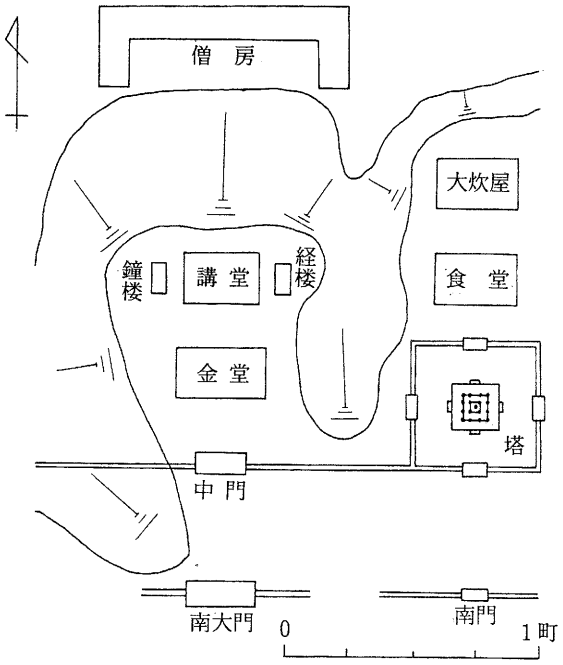


図－11　河内国分寺推定寺域・1／3,000（①文化財分布図　②水野正好氏案　③野上丈助氏案）

堂と大炊屋を想定している。中門の南には南大門、塔院の南には南門を想定している。そして僧房は、講堂の北側の台地斜面下に復元されている。[16]

これに対して、同じく調査に参加された野上丈助氏は、僧房がもう一本西側に延びる台地上に位置し、東西２町半、南北２町となる寺域を復元されている。野上氏の推定寺域は地図上で示されたものではないが、記述を基に復元すると、図―11・③のようになる。[17]

以上、これまでに示されている三つの寺域復元案について検討を加えてみたい。まず、水野氏が想定するように、推定中門跡の北側に金堂・講堂が位置することは、地形や瓦の散布状況から動かし難いであろう。しかし、他の建物配置については、まったく推測の域をでないものである。最も問題となるのは北側台地下に想定された僧房の位置であり、推定金堂付近と僧房付近では現在の比高差で約20mを測る。そこで野上氏は僧房をもう一本西側の台地に想定したのであり、このほうが無理がないように思われる。



図－12　河内国分寺推定伽藍配置・水野案
（『河内国分寺跡発掘調査概要』に加筆）

この野上氏が想定した僧房の位置が、今回調査したⅠ区および1991年度に調査した地にあたるのである。これまでの調査から、奈良時代と推定される掘立柱建物は検出したのだが、僧房と判断できるものは確認できていない。また、③のように寺域を復元すると、Ⅰ区は寺域外となり、Ⅰ区北側の台地の一郭しか寺域に含まれず不自然である。野上氏の指摘するように東西２町半の寺域を復元するならば、推定寺域をもう半町南にずらせたほうがすっきりするように思う。そうすると、Ⅰ区も寺域に含まれ、Ⅰ区南西で農道が屈曲する位置が寺域南西隅となり、この農道が直線的に東へ延びて南大門に至るという寺域を復元することができる。

しかし、この復元にも問題が残る。まず寺域南東部には山地が含まれ、方形の寺域は現実的には無理である。また、中門が寺域のほぼ中央に位置することになり、主要伽藍が寺域の北東部４分の１に集約された変則的な寺域となってしまう。全国的にみれば、このような自然地形を取り込んだ寺域や変則的な伽藍配置は決して珍しいものではないので気にすることはないのかもしれない。しかし、大和に次ぐ大国である河内国の国分寺として考えるとき、やはり疑問が残るのである。

これまでの検討から、現時点では水野氏と野上氏の復元案の重複する２町四方の範囲とするのが妥当なのではないかと思える。ただ地形から考えると、もう少し東に寄ってもいいのではないかとも思える。それでは僧房をどこに求めるか。この２町四方の範囲内に想定するならば、南大門と中門の間、もしくは塔の北側のどちらかであろう。どちらに考えても、不可能な立地ではないと考える。あるいは、寺域外に別院のような形で僧房を想定することも不可能ではないだろう。その場合に最も有力なのが、やはりⅠ区の位置する台地であるが、塔の北東部の一郭も可能性として考えておきたいと思う。

以上のように、現状では２町四方の寺域として考えておきたいが、僧房などが別院として立地する可能性、また東西２町半となり、寺域が南へ寄る可能性も残しておきたいと考えている。

それでは、なぜこのような狭隘で不規則な地形のところに河内国の国分寺が建立されたのか。これについては以前にも触れたことがあるので詳述しないが、奈良時代の官道としての龍田道の位置、竹原井頓宮の位置、河内国府へのルート、田辺史氏ら地元有力氏族の意向、そして大和川を見下ろ

し芝山を借景とする素晴らしい景観、これらの理由によって、この地に河内国分寺が建立されたと考えられるのである。[18]

調査地周辺の断層について

奈良県から大阪府へと狭隘な地形をぬって西流する大和川は、その南北両岸の隆起、沈降、断層などの複雑な地質変動に伴って形成されたものである。南岸に沿ってはしる断層帯は大和川断層帯と呼ばれており、『都市圏活断層図・大阪東南部』[19]には、「推定活断層（地表）」として、調査地が位置する台地の北側、（株）光洋精工との境界の落ち込みを通って北東から南西へと直線的に延びる延長４kmの活断層が想定されている（図－２）。推定活断層（地表）とは「地形的な特徴により、活断層の存在が推定されるが、現時点では明確に特定できないもの。または、今後も活動を繰り返すかどうか不明なもの。」とされている。この推定活断層が断層であることはほぼ間違いないであろう。ここでは、後者の「今後も活動を繰り返すかどうか不明なもの」、すなわちこの断層が最後に動いた時期が明らかでなく、今後の予測がつかないということになる。

さて、今回の小学校建設に先だって実施された財団法人災害科学研究所の地質調査結果によると、明神山系とその北側の台地との境をはしる断層が大和川断層帯の主断層であり、先述の推定活断層は副断層であるということである。主断層は調査対象地南端を通り北東から南西へと推定活断層と平行に延びている。しかも、地質調査の結果によると、両断層の中間、現農道付近を通って延びる副断層も想定されており、断層活動の中心が北側に移動していると想定されている。

主断層は山側が隆起する逆断層であり、この繰り返しによって200ｍの比高差が形成されたようである。この逆断層によってもちあげられた部分が北側へ押し出し、破砕面付近に低角度の断層帯を形成したと推定されており、今回の調査地のⅡ区がこの位置に相当する。すなわち、Ⅱ区の掘り下げによって確認した南側（山側）に沈降する土層の成因は、この低角度断層によるものと推定できるのである。しかし、土層を実見した限りにおいては、押し出しによるものと考えるよりも、南側が沈降する断層の存在を想定することもできるのではないかと思われる。

地質調査結果では、この主断層の活動後、２本の副断層の間が隆起したものと推定されている。この想定隆起地が、Ⅰ区から北側にかけての僧房が存在する可能性を推定した地に相当し、Ⅰ区周辺が地質的にも安定し、遺構面が浅いことは、この断層の成因によるものと考えられる。同様に、Ⅱ区周辺が湧水を伴う不安定な粘質土を主とする土層から成っており、奈良時代前後の遺構がほとんど営まれておらず、耕作地としての開墾を待つことになったこともうなずけるのである。

ところで、これらの断層が活動した時期は明確にできていない。地質調査結果では、主断層の活動時期が、中位段丘層に相当する崩積土層に変位を与えていることから、崩積土層の堆積年代（約13万年～６万年前）よりも新しいということが指摘されている。Ⅱ区での調査結果からみると、断層後に形成された土層が堅く締まった地山であることを考えると、１万年前よりも新しいということは考えがたいように思われる。これらの推定からすると、主断層の活動時期は、１～６万年前と考えることができるが、理科学的な調査を実施していないので、あくまでも推定である。また、その後に活動したと推定される副断層については、まったく時期を考える材料がみられない。

地質調査結果によると、調査地中央を南北に走る断層の存在も予想されており、調査地周辺の地形が複雑な地質によって形成されていることを知ることができるのである。

今後に向けて

今回の調査によって、Ｉ区周辺に国分寺に関連する可能性のある遺構が確認できたことは大きな成果であった。今後、周辺の調査によって国分寺の寺域や伽藍を明らかにしていくことが必要であろう。ただ問題となるのは、この地に小学校が建設された後に予想される周辺の開発に対する対応である。国分寺の塔跡は幸い大阪府によって公有化されている。しかし、主要伽藍か位置するその西側の台地は、地主の好意によって保存していただいているだけであり、これまでに何ら公的な措置をとることができないままである。寺域全体の史跡指定や公有化、とりあえずは主要伽藍地の保存に努力していかなければならないと考えているのだが、正直なところ、いまだにその見通しは立っていない。今後、検討をすすめていきたいと考えている。

注

（１）柏原市教育委員会『柏原市所在遺跡発掘調査概報・1990年度』1991
（２）柏原市教育委員会『明神山系遺跡分布調査概報Ｉ』1985
（３）建設省国土地理院『１：25,000　都市圏活断層図・大阪東南部』1996
（４）大阪府教育委員会『柏原市国分東条町河内国分寺跡発掘調査概要』1970
（５）注（４）に同じ
（６）柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報・1984年度』1985
　　塚口義信「竹原井頓宮と智識寺南行宮に関する二、三の考察」『古代史の研究』４号　1982
（７）安村俊史「竹原井頓宮と青谷遺跡」『ヒストリア』第148号　1995
（８）注（２）文献および柏原市教育委員会『明神山系遺跡分布調査概報Ⅱ』1986
（９）注（１）に同じ
(10) 柏原市教育委員会『柏原市の遺跡と指定文化財』1998年度改訂
(11) 大阪府教育委員会『大阪府文化財分布図』1996
(12) 大阪府教育委員会『田辺遺跡発掘調査概要Ｉ』1983
(13) 注（４）に同じ
(14) 注（10）に同じ
(15) 注（11）に同じ
(16) 注（４）に同じ
(17) 野上丈助「河内国府と国分寺址について」『河内国府と国分寺址の検討』古代を考える10　1977
(18) 注（７）文献および安村俊史「河内国大県郡の古代交通路」『河内古文化研究論集』1997
(19) 注（３）に同じ

第2章　田　辺　遺　跡

1．調査に至る経過

本調査は、柏原市立国分小学校のプール新設工事に伴う試掘、および発掘調査である。柏原市施設管理課から平成10年3月16日付けで提出された埋蔵文化財の発掘通知に基づいて、教育委員会社会教育課では平成10年3月27・28日の両日にプール建設予定地の近くに2箇所のトレンチを設定して試掘調査を実施した。その結果、建設予定地の北側半分は過去の造成によって地山まで大きく削平を受けていると考えられたが、南側半分には遺構が残っている可能性が高いと考えられた。この結果に基づいて、建設予定地の南側半分を対象とした発掘調査を実施することにした。

その後、調査委託業者の決定を経て平成10年8月17日から準備工にかかり、19日から機械掘削を開始した。調査の結果、遺物包含層はまったく残っておらず、遺構の残存状態も非常に悪いものであったが、掘立柱建物に伴うと思われる柱穴遺構などが検出され、それに伴って遺物の出土もみた。これらの調査成果を、9月3日に国分小学校の6年生を対象に公開・説明し、校内の遺跡について学習する機会を設けることができた。

調査は9月17日にすべて完了し、その後、整理作業に取りかかった。

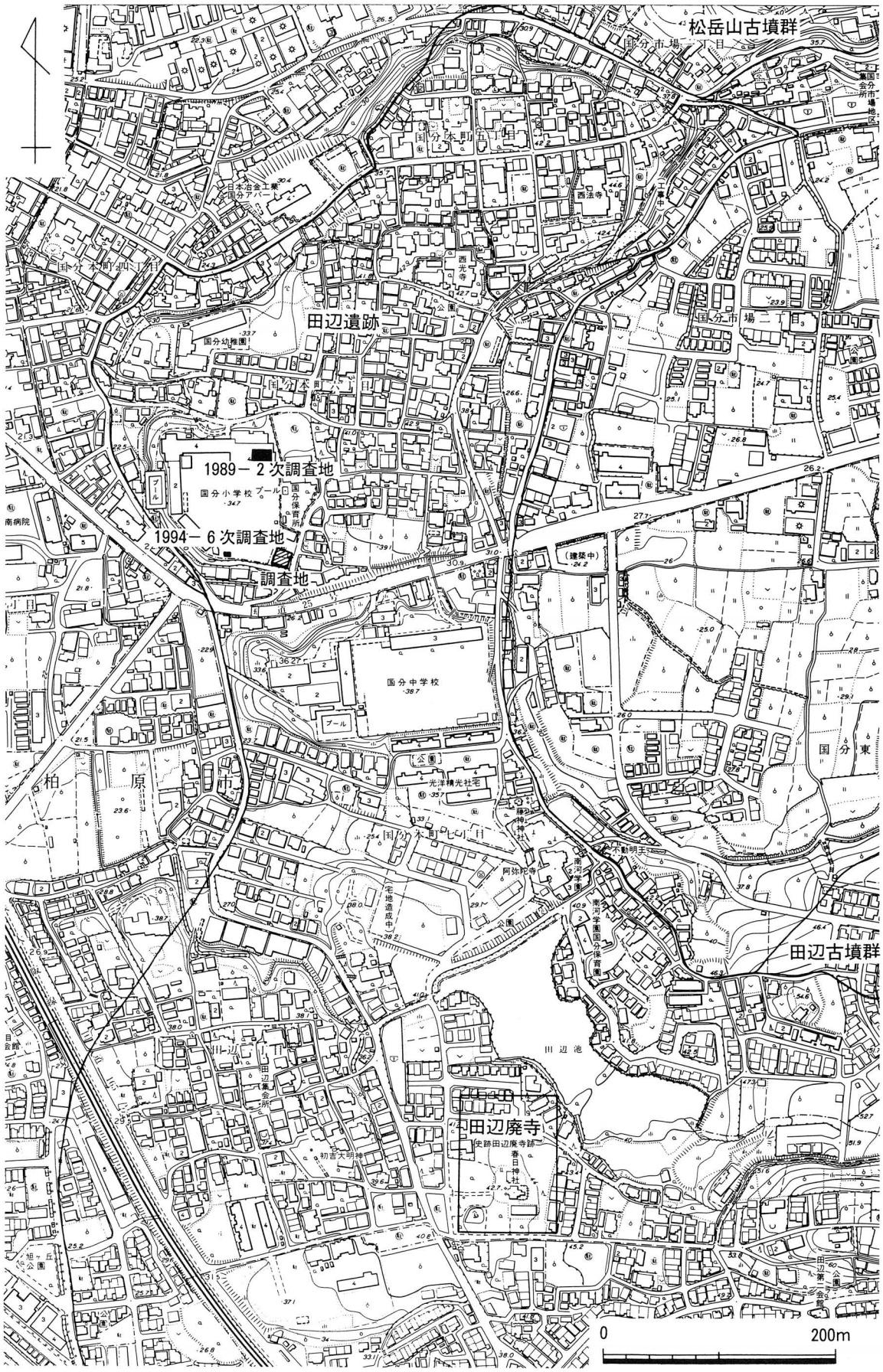
2．周辺の環境

調査地は、南から北へと張り出す台地上に立地し、この台地上すべてを田辺遺跡の範囲としている。調査地の南南東550mに位置する国史跡の田辺廃寺の北には、田辺池を擁する谷が存在する。谷付近で台地の幅は狭くなり、そこから北にかけては、再び幅も広くなり、標高も高くなる。そして、この台地は北東の松岳山古墳群の位置する台地へとつづいている。

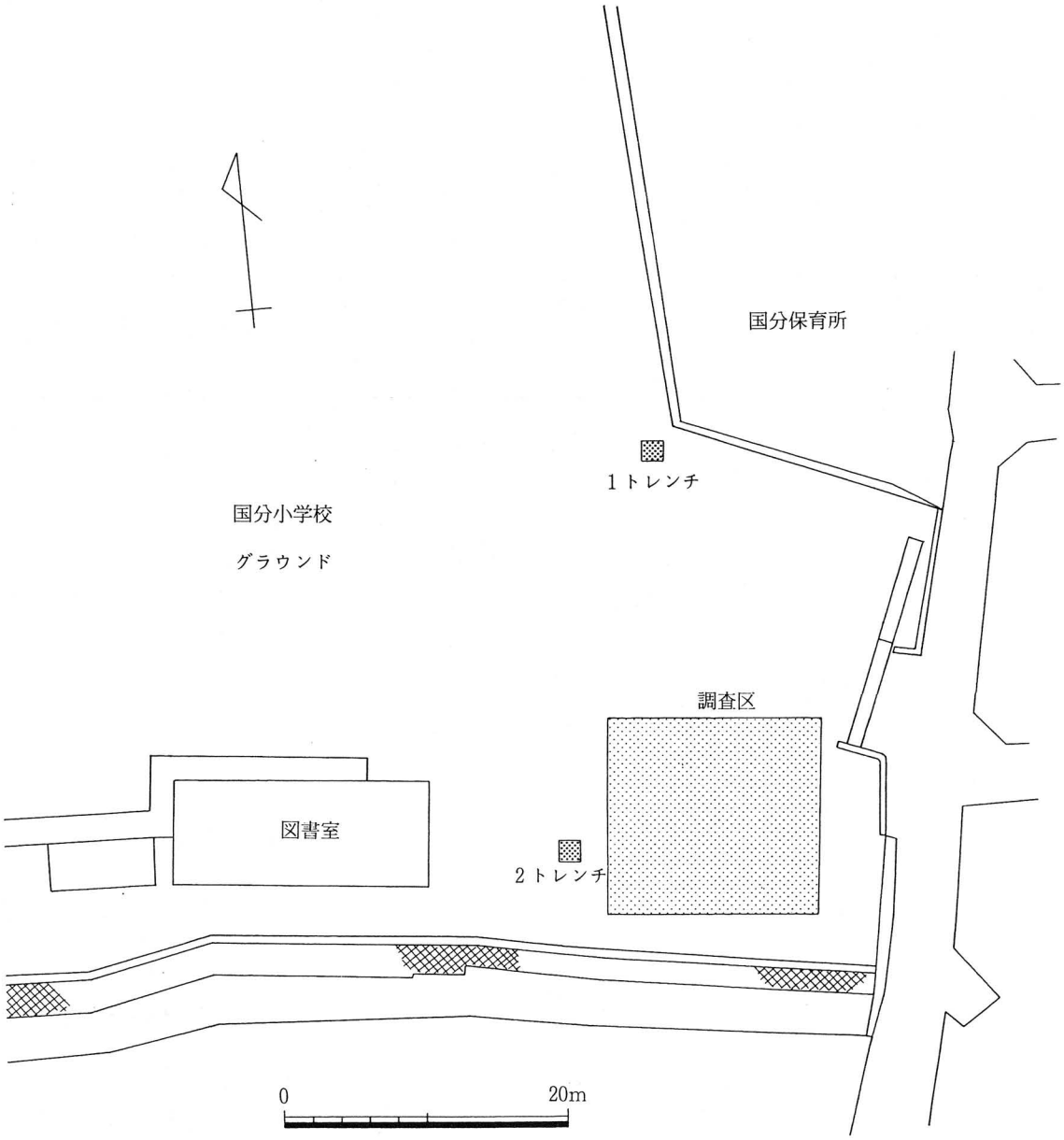
調査地と南側の国分中学校の間には、国道25号線が通っている。現在は、この国道によって台地は分断されており、切り通し状の地形を呈している。しかし、周辺の微地形や調査結果から推定すると、国道付近は国道開設以前から標高が低かったようである。

田辺遺跡では、サヌカイト製の翼状剥片や有茎尖頭器などが出土しているが、遺構とともに遺物が確認できるのは古墳時代中期以降である。そして最も多くの遺物・遺構が確認されているのは7世紀であり、やや少なくなりながら8世紀へとつづいている。また、7世紀末の創建と考えられる田辺廃寺や終末期群集墳の田辺古墳群、火葬墓群なども注目される遺跡である。

これまでに、国分小学校の校内では、2度の調査を実施している。1989―2次調査では、7世紀を中心とする鍛冶関係の遺物が多量に出土しており（『田辺遺跡』1990）、1994―6次調査では、掘立柱の遺構や井戸などが確認されている（『柏原市所在遺跡発掘調査概報』1994）。また、国分中学校内からも7世紀を中心とする鍛冶に伴う遺物や銅の鋳造に伴う遺物などが出土しており、調査地付近は7世紀代の金属器生産に関わる遺跡が広がっていたようである。今回の調査でも、少量ではあるが、鉄滓が出土している。



図－13　調査地位置図



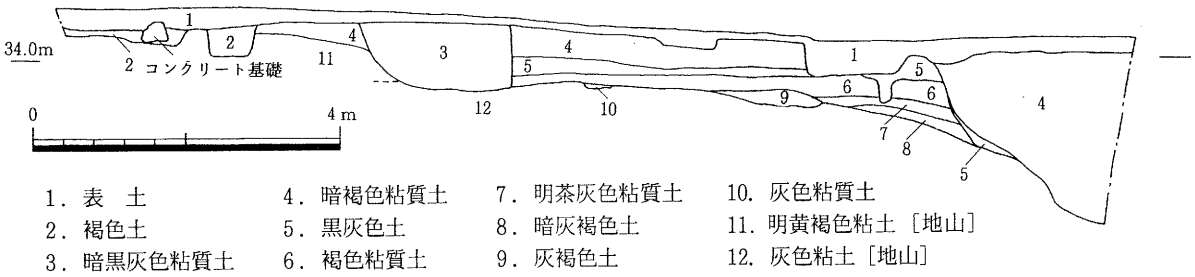
図－14　調査区位置図

3．試掘調査

試掘調査は、調査対象地の北西部に1トレンチ、南西部に2トレンチを設定して実施した。いずれも幅1m、長さ1.5mのトレンチである。既設の建物が存在し、対象地全体がアスファルト舗装されていた関係で、以上のような小規模な2箇所のトレンチしか設定できなかった。

調査の結果、1トレンチでは地山が最近の造成等によって、大きく削平を受けていることが確認され、遺構・遺物ともに存在しなかった。一方、2トレンチでは、遺構や遺物包含層は認められなかったものの、近世と考えられる耕作土から、陶磁器や土管が出土した。

以上の結果から、調査対象地の北側は過去の造成によってかなりの削平を受けていると考えられたが、南側は近世の耕作などに伴って削平を受けている可能性が強いものの、最近の工事による影響は及んでいないようであり、遺構や遺物が残存しているのではないかと考えられた。



図－15　東壁土層図

4．発掘調査

概　要

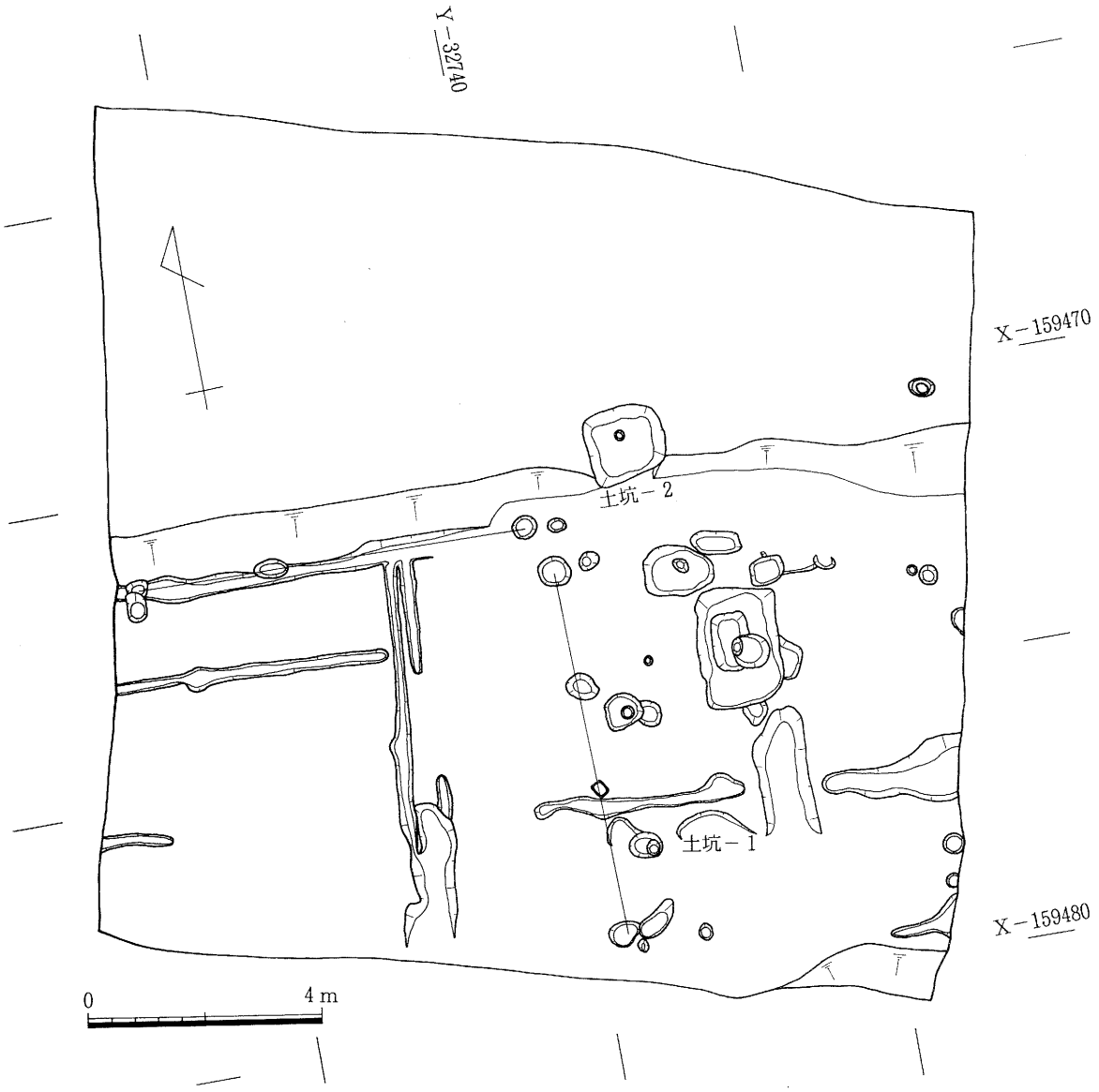
発掘調査は、プール建設予定地の南側半分に、東西15m、南北14mの範囲で設定したが、既設の建物の基礎等のため、ややいびつな平面形となってしまった。調査区の中央やや北寄りを境に、地山面の高さが大きく異なっている。すなわち、北側が南側よりも40～50cm高くなっているのである。この一段高い北側からは遺構はほとんど確認できず、南側からは古代から近世にかけての柱跡や溝などが検出されている。遺物の出土量は少ないが、古墳時代後期から奈良時代、中世、近世のものが出土している。

土　層

過去の造成や建物の基礎によって、土層はかなり攪乱を受けており、最も良好な状態を留めていた東壁の土層を観察することにする。暗褐色粘質土（4層）は過去の造成に伴う盛り土であり、黒灰色土（5層）が近世以降の耕作土と考えられる。褐色粘質土（6層）は水田の床土と考えられ、この土層中に古代から近世にかけての遺物が少量含まれている。明茶灰色粘質土（7層）と暗灰褐色土（8層）は古代の遺物包含層の可能性が考えられるものであるが、顕著な遺物が出土していないため、断定はできない。これらの土層を大きく切り込んで南端にも暗褐色粘質土がみられるが、これは調査区の南側と東側に構築されているコンクリート擁壁設置に伴う盛り土と考えられる。

遺構はすべて地山面で確認されている。地山は北側が明黄褐色粘土（11層）、南側が灰色粘土（12層）であるが、部分的には黄褐色ないしは赤褐色の粗砂もみられる。調査の最後に断ち割って下層の状況を確認したところ、やや厚い粘土層の間に10～50cmの厚さの砂が互層にみられる状況を示している。これらの各層は、水平よりも南側が若干高くなっており、現在の地形とは逆の傾斜を示している。すなわち国分中学校付近から緩やかに北へ下る地形であったのではないかと考えられる。そのように考えると、現国道25号線付近の一段低い地形は、比較的新しい開析谷によるものか、あるいは断層によるものの可能性も考えられる。

現地表面から地山までの深さは、北東部で最も浅く36cm、南東部で最も深く248cmを測る。地山の標高は、一段高い北側で34～34.5m、南側は33.6m前後を測り、最も深い南東部で31.9mとなる。おそらく、北から南へ緩やかに傾斜する斜面を8m前後の幅で、平坦に造成したものであろう。現在は遺構を確認できない北側も、同様に平坦に造成されていたのではないだろうかと考えられる。



図－16　遺構平面図

遺　構

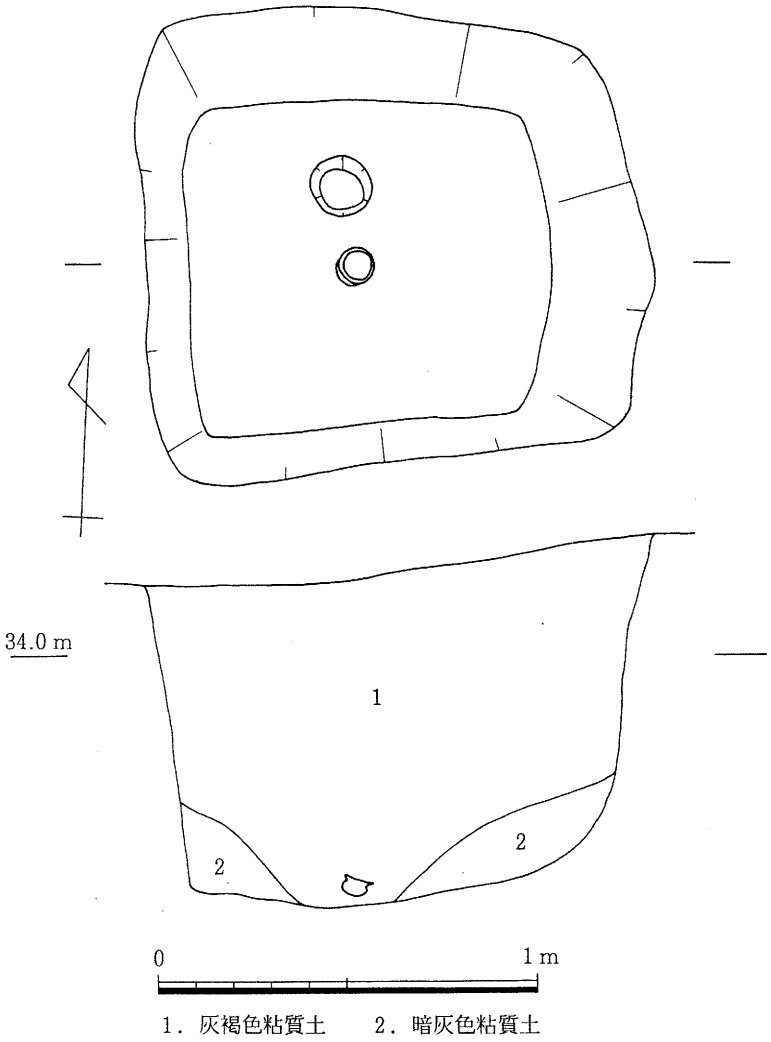
遺構は、掘立柱柱穴と考えられるピット33、土坑３、溝11を検出した。

ピットは、直径20cm前後の円形平面を呈する小規模なものが多く、一辺50cm前後の方形平面を呈するものが少数みられる。いずれも深さ数cmを残すのみであり、ピットの可能性を考えての精査中に消失してしまったものもある。かなりの遺構が、過去に削平を受けて消失しているものと考えられる。そのためか、建物を復元できるような配列を示すピットは確認できなかった。

その中で、柱間約220cmで東西に並ぶピット列と、柱間約200cmで南北に並ぶピット列が確認できた。どちらもほぼ真東西、真南北の方位を示しており、このような柱列、おそらく柵状の施設が存在したものと考えられる。柱列を構成するピットは、いずれも円形平面を呈するものであり、少量の土師器・須恵器を伴っている。時期を明らかにできる遺物は７～８世紀のものであり、８世紀頃の柵状の施設と復元しておきたい。しかし、この２本の柵によって囲まれた範囲からは、ピット

がまったく検出されておらず、柵の性格・機能については、明らかにできない。その他のピットから出土する遺物も、ほとんどが７～８世紀のものであり、その時期の建物群が存在したものと推定される。

土坑―１は、直径120cm前後の円形平面を呈するかと思われるが、南側が削平を受けているため、確認できない。深さも４cm程度を残すにすぎない。埋土は黒褐色粘質土で、内面に星形の当て具痕を残す須恵器の甕片（８）、土師器の杯（９）などが出土しており、上面から土師器の小形手づくね高杯（11・12）が出土している。



図－17　土坑－２

土坑―２は、地山が段をなす部分に掘り込まれている。東西133cm、南北122cmの方形平面を呈し、壁面は急角度で落ち込んでいる。深さは92cmを測り、底部はほぼ平坦である。底面のやや北寄りに、直径16cm、深さ10cmの柱痕跡かと思える小穴が認められる。また、底面のほぼ中央に、土師器の小形の甕（15）が正置されていた。地鎮のような祭祀に伴う土器と推定され、壷内の土を持ち帰り、精査したが、何も検出できなかった。埋土は、底部周辺に暗灰色粘質土がみられるほかは、灰褐色粘質土の単一土であり、一挙に埋め戻されたと考えられる。柱穴と考えることもできるが、これに対応するピットは見出せず、柱を樹立していたと考えるならば、単独の遺構と考えざるを得ないであろう。土師器の小形甕以外には、須恵器杯蓋（３）、土師器の杯（10）・手づくねの高杯（13）・つまみ（14）、平瓦（19）、鉄滓などが出土しており、これらの遺物から、８世紀前葉～中葉の時期と推定される。

溝は、いずれも東西あるいは南北方向であり、埋土や出土遺物から、調査区南東部にみられる４条の溝は奈良時代のものではないかと考えられ、東西方向の溝は東側へ、南北方向の溝は南側へと傾斜している。調査区南西部にみられる溝は、灰色の埋土であり、近世の耕作に伴うものと考えられる。幅は10～20cm、深さ数cmの浅い溝であり、複数の溝の合流も認められる。

遺　物

遺物は、須恵器、土師器、瓦、瓦質土器、陶磁器、埴輪、鉄滓などが出土している。

１～８は須恵器。１～３は杯蓋。復元口径は、それぞれ14.0cm、11.8cm、17.2cm。４は杯身。低い高台を有する杯身である。５は高杯の脚部。長脚二段透しの下段にあたる。凹線下に長方形の透かしが三方に穿たれるようである。内面にはしぼり目が残る。６は有蓋短頸壷の蓋であろう。平坦な天井部から口縁が直線的に延びる。天井部回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。７は擂り鉢の底部。底は厚く、体部との境は稜線状をなす。８は甕もしくは壷の体部片である。ほぼ平らな板状を呈するので、かなり大きな個体になると思われる。外面は平行叩きの後にナデており、内面には同心円状の当て具痕がみられる。同心円の中心には直径1.6cmの星形がみられる。

９～15は土師器。９・10は杯。どちらも表面が全体に剥離しており、調整や口縁端部の形状が確認できない。11～13は小形手づくねの高杯。11の杯部は浅く、外方へ開くが、12の杯部は内湾気味で深い。いずれも指頭で整形しており、杯部はナデ、脚部外面はタテ方向の指ナデ、脚端部から内面にかけてはナデで仕上げる。14は円板状を呈するつまみ。15は完形の小形の甕である。扁平な球状の体部から内湾した後に緩やかに外反する口縁に至り、端部はやや肥厚する。体部外面はユビオサエからナデ、そのため表面の凹凸が激しい。内面は板状工具によるナデの後にナデで仕上げる。口縁はヨコナデ。口径9.2cm、器高6.6cm。口径と体部径とはほぼ等しい。

16は土師質で、おそらく移動式竈の底部であろう。底部は直角に内方へ屈曲し、体部は直線的に立ち上がる。器壁は2.2cm前後の厚みを有する。内面底部の直上はヘラケズリを施すが、他はナデで仕上げる。ただし体部外面は、ナデに先行するヘラケズリを施している。復元底径は46.4cm。胎土は雲母等の砂粒を含み、灰褐色を呈する。通常の移動式竈とは胎土・焼成ともに異なっており、むしろ瓦に近い胎土のものである。

17は瓦質の羽釜。鍔から口縁にかけては二段の段をなし、鍔は短く水平に延びる。体部外面ヨコ方向のヘラケズリ、他はヨコナデ、内面はヨコ方向のナデを施している。

18は円筒埴輪の底部である。底部は自重で内面に肥厚している。

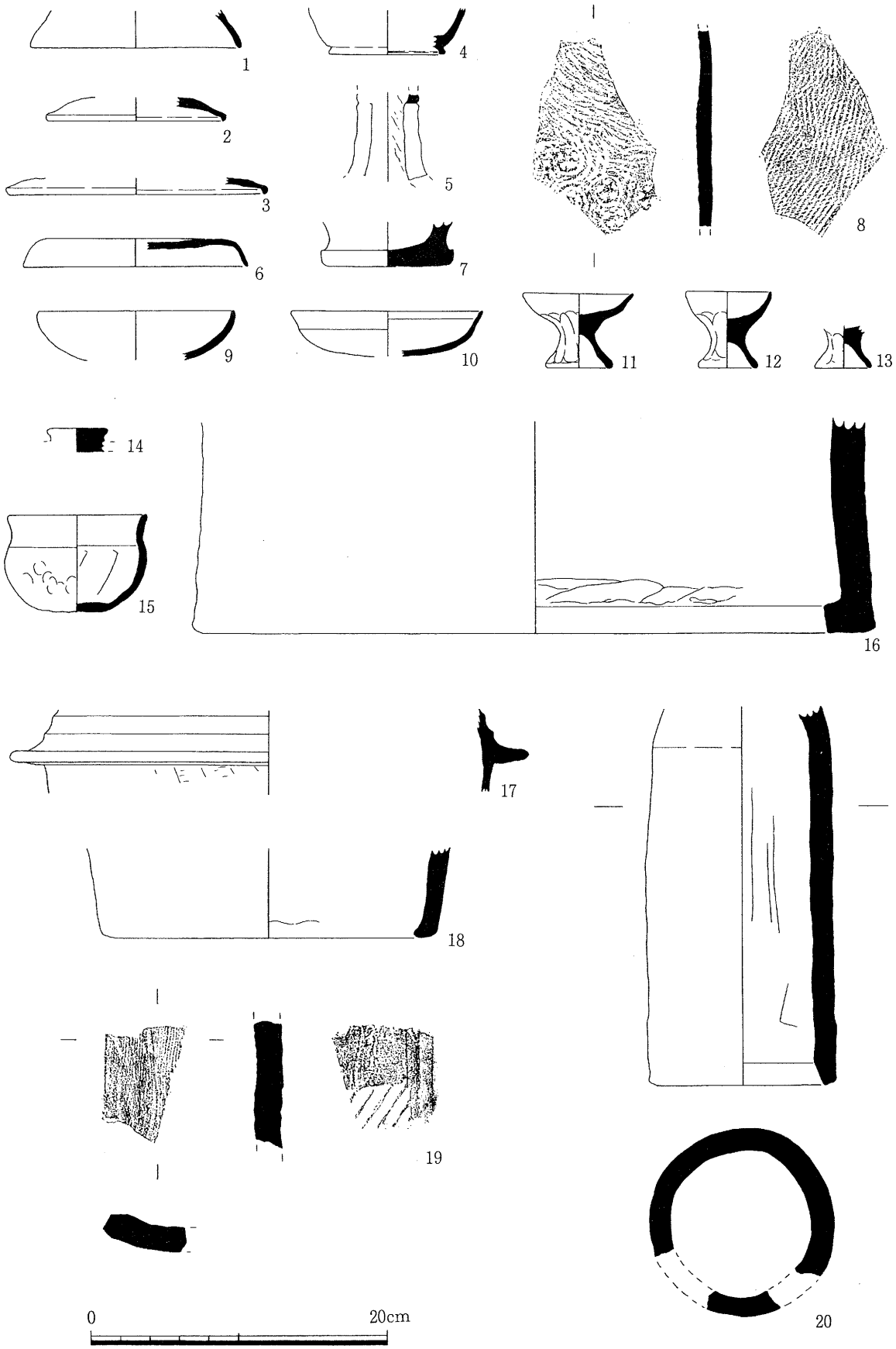
19は平瓦。凸面にはナデの後にヨコ方向の無軸綾杉タタキを施す。凹面には経緯糸とも10本／cmの布目が残り、部分的にナデがみられる。側縁は３面のヘラケズリによって、面をなす。

20は土管であろう。外径12.6cm、現存長25.8cm。後端部は斜めにカットをして面をなす。外面はナデ、内面はケズリからナデを施す。２トレンチの褐色粘質土（６層）から出土しており、時期を特定できないが、形態や胎土は丸瓦によく似たものがみられる。

８・９は土坑―１から、３・10・13～15・19は土坑―２から、20は２トレンチから、他は褐色粘質土（６層）などから出土している。

まとめ

調査地周辺は、７～８世紀にかけての集落が広がっていたと考えられ、その一部で鍛冶も営まれていたようである。また、台地上という立地から、削平・盛り土による造成も行われていたようであるが、近世の開墾やその後の開発によって、遺跡の残存状況は必ずしも良好ではない。



図−18　出土遺物

第３章　船橋遺跡採集遺物

１．貴瀬誠氏採集遺物

経　過

1993年末に、現在和歌山市在住の貴瀬誠氏より、貴瀬氏が過去に船橋遺跡で採集した遺物を柏原市に寄贈したいとの申し出があった。これを受けて、1994年１月に貴瀬氏より遺物の寄贈を受けた。貴瀬氏は、遺物の採集地点を克明に記録しており、表面採集資料とはいえ、個々の遺物と出土地点が対照できるため、船橋遺跡の研究において貴重な資料となると考えられた。本市では、その後、少しずつ遺物の実測等の整理作業を進め、一応の整理作業が終了したのでここに報告するものである。貴瀬氏のご好意に感謝したい。

船橋遺跡の浸食状況

船橋遺跡は、宝永元年（1704）に大和川の流路が付け替えられることによって、その河床となった遺跡である。そのため、増水や流路の変化によって遺跡は次第に浸食され、遺構や遺物の露出がみられるようになった。そして1954年、上流に堰堤が建設されて以来、その下流の浸食が激しくなり、遺構や遺物の露出が激しくなった。

その後、1956～1958年にトレンチ調査や遺物の採集が実施され、船橋遺跡の重要性が再確認されるに至った。その後も小規模な調査や周辺域での調査によって、船橋遺跡の性格が次第に明らかになってくる一方で、浸食による遺跡の損壊も年々進んでいった。そしてその間、出水のたびに遺物が露出することが知られるようになり、盗掘も後を絶たない状況であった。[(1)]

本市でも、遺跡の保存方法を模索し、建設省大和川工事事務所と話し合いをもったり、露出した遺物の表面採集や写真、測量図などの記録作成に努めてきた。本市で初めて現況測量図を作成した1982年以後の河岸の状況を図―20に示したので、これに沿って経年変化について説明したいと思う。まず、1982年頃には、河岸は柏原市と藤井寺市の市境付近に存していた。その後、河岸は徐々に後退し、1990年には平均で10m、最も激しい部分では15mも河岸が後退している。この頃に貴瀬氏の遺物採集が集中しており、本市で確認している状況でも、増水ごとに数十cmから１mもの河岸の崩落、後退がみられ、その崩落土内や崩落面に遺構や遺物が露出する状況であった。

1991年に、河岸の後退を防ぐ目的で、建設省によって護岸ブロック積み工事が行われた。護岸工事は２箇所で実施され、その長さは55mと45mであった。しかし、この護岸工事によって、工事箇所以外の浸食が一段と激しくなった。1993年の河岸と比較すると、わずか２年間に平均で10m、最も激しい箇所では20mもの河岸の後退がみられるに至った。それと共に、遺物の出土もあまりみられなくなり、遺跡の大半が損壊されたことを伺わせるものであった。

このような状況のもと、1992年から護岸を兼ねて、自然石を積み上げる浄化施設工事が上流から順に実施されることとなった。工事に先だって、本市では試掘調査を実施したが、船橋廃寺の伽藍推定地にあたる上流部分は二次堆積土ばかりであり、遺物も認められなかった。しかし、1993年に

本郷遺跡
本郷老人集会所
公園
柏原小学校
柏原支所
八尾保健所
大正一丁目
柏原郵便局
NTT
柏原営業所
船橋遺跡
古町
大正一丁目
大和建設
事務所
柏原警察署
老人いこいの家
柏原駅
商工会館
大王寺鉄道学園
柏原教会
上市
清州
河内橋
建設省柏原水質
自動監視所
大和川
詳細図参照
0
200m

図－19　船橋遺跡位置図

工事予定であった護岸の上流部分と2箇所の護岸の間の試掘調査を実施した結果、遺構・遺物が残存していることが確認されたため、工事予定区域全域の発掘調査を実施することになった。調査区は、上流側をⅠ区、下流側をⅡ区とした。これは河岸における初めての本格的な調査となった。[2] 続いて1996年にさらに下流、藤井寺市域にかけての範囲で試掘調査を実施したが、遺構面は流水や攪乱によって完全に破壊されていることが判明した。

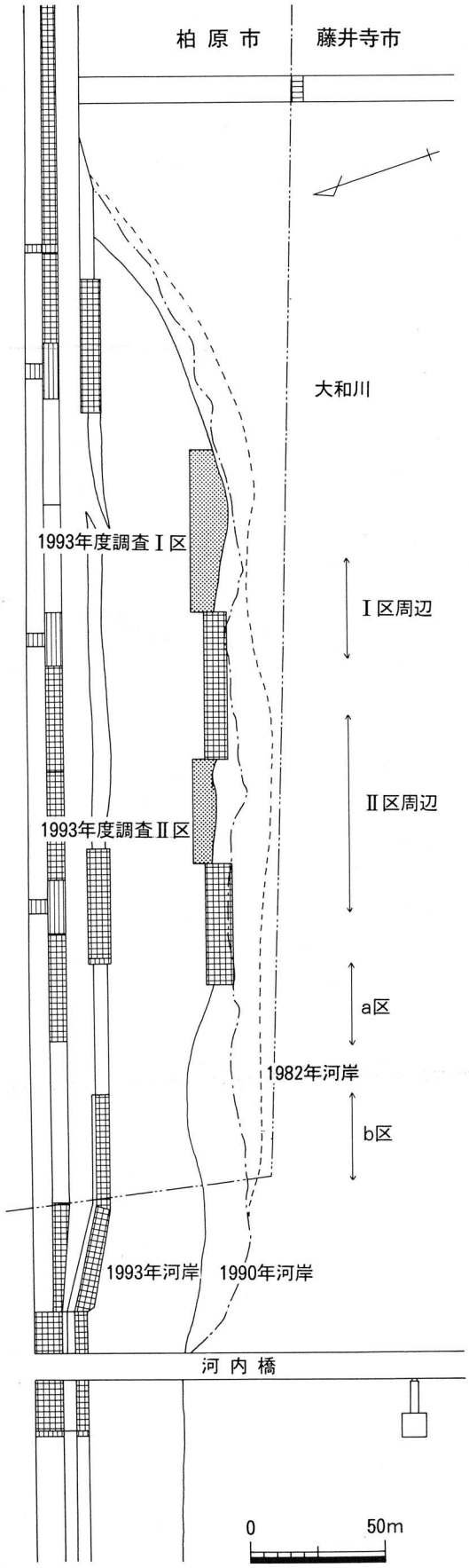
以上の調査結果や河岸の変化から船橋遺跡の現況について考えてみると、1993年度Ⅰ区の北側は既に過去の流水によって削平を受けていることが確認されており、下流のブロック積み護岸から河内橋にかけての間も流水によって完全に破壊されていることが確認された。後者の埋土は北へ下がる状況を呈しており、Ⅰ区北側と同様、1960年前後に大和川の主要な流路が北側の堤防直下にあったことに伴う埋土と考えられる。すなわち、1993年度のⅠ区・Ⅱ区周辺のみが中州状に残っていたにすぎないことがわかる。よって、現在も遺跡が残存しているのは、Ⅰ区・Ⅱ区とブロック積み護岸の周辺のごく僅かだけであり、河岸の船橋遺跡は、ほぼ全壊してしまったといえるであろう。さまざまな障害があったとはいえ、遺跡を保存できなかった責任は重いと考えており、今後の糧としていきたい。

貴瀬氏の採集地点

貴瀬氏は採集地点を8地区に分割して記録を作成しておられたが、1993年度の調査との関係を重視したいと考えるため、ここではⅠ区周辺、Ⅱ区周辺、Ⅱ区の下流50m付近を中心とするa区、Ⅱ区の下流100m付近を中心とするb区、そして河内橋下流の藤井寺市域にあたるc区の5地区に分割して扱うこととする。

遺　物

遺物は出土地点の明らかなものと不明なものに区分し、まず、出土地点の明らかなもの（1～68）から報告する。



図－20　大和川右岸詳細図

1～3縄文土器の深鉢。いずれもⅡ区周辺から出土している。2・3には2条の刻目突帯文がみられる。調整は板状工具によるヘラケズリを施す。縄文時代晩期の船橋式、長原式の深鉢である。

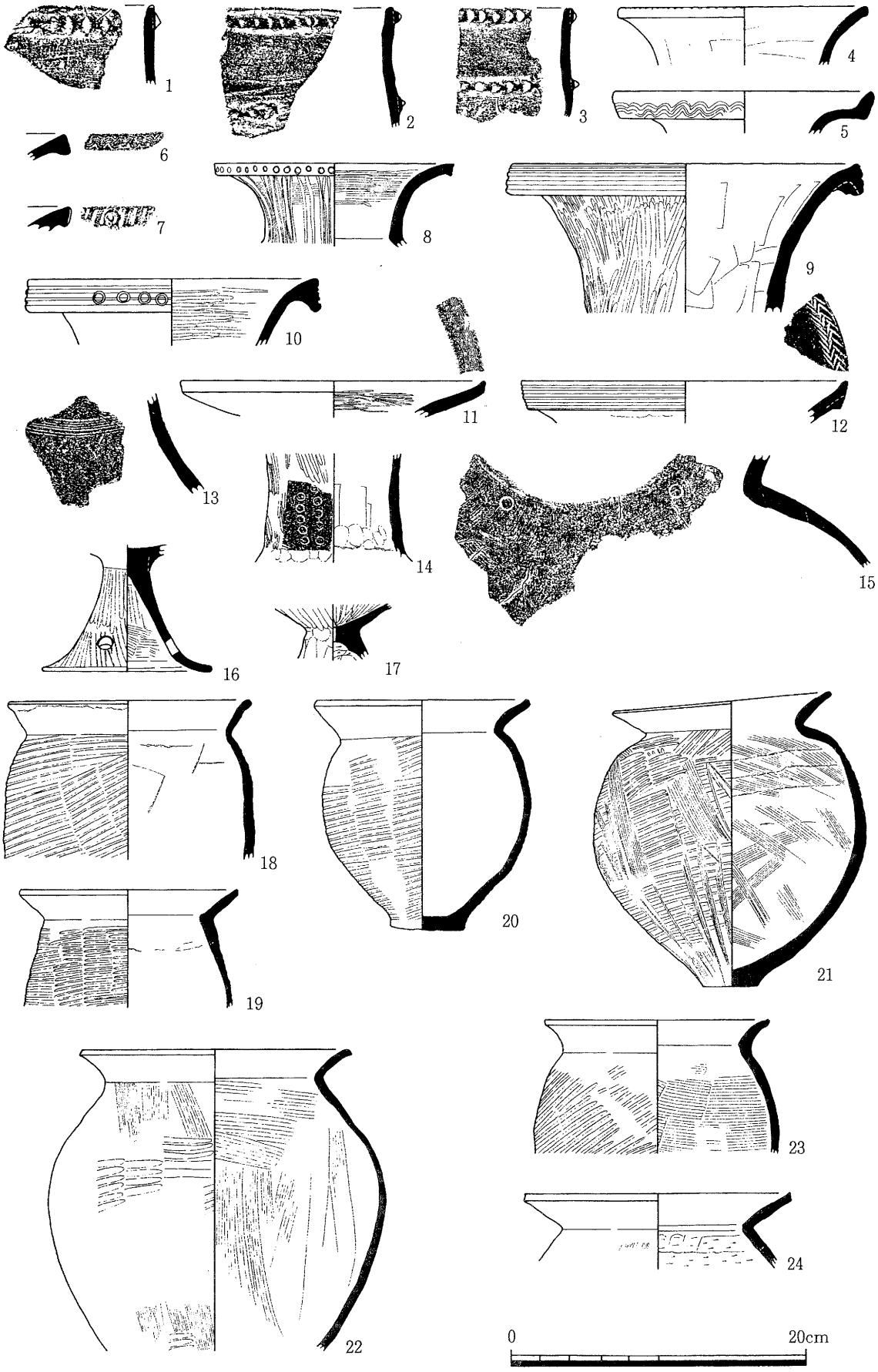
4～23は弥生土器。9・12・14・17はⅠ区周辺、11・13はⅡ区周辺、5～7・21・23はb区、4・8・10・15・16・18～20・22はc区から出土している。4～15は壺。口縁部端面を上下に拡張し、刻目・直線文・波状文・円形竹管文・竹管による押捺凹線文がそれぞれにみられる。弥生時代中～後期のものである。16は高杯。脚部に3方向の円孔を穿つ。17は器台。台部底に穿孔がみられる。庄内期に下るものであろう。18～23は甕。18～20は体部外面に平行叩きを施し、21・22は平行叩きの後にハケメを施す。23は平行叩き目をナデ消している。20は口径14.3cm、器高15.8cm、底径5.0cmを測る完形。21は口径14.7cm、器高20.1cm、底径3.7cmを測る。いずれも弥生時代後期のものである。

24～58は土師器。34・44・51・56・57はⅠ区周辺、26・30・35・39・40・52・55・58はⅡ区周辺、25・27・36・37・42・46・53・62はa区、32・33・41・48・50・66・67はb区、24・28・29・31・38・43・45・47・49・54はc区から出土している。

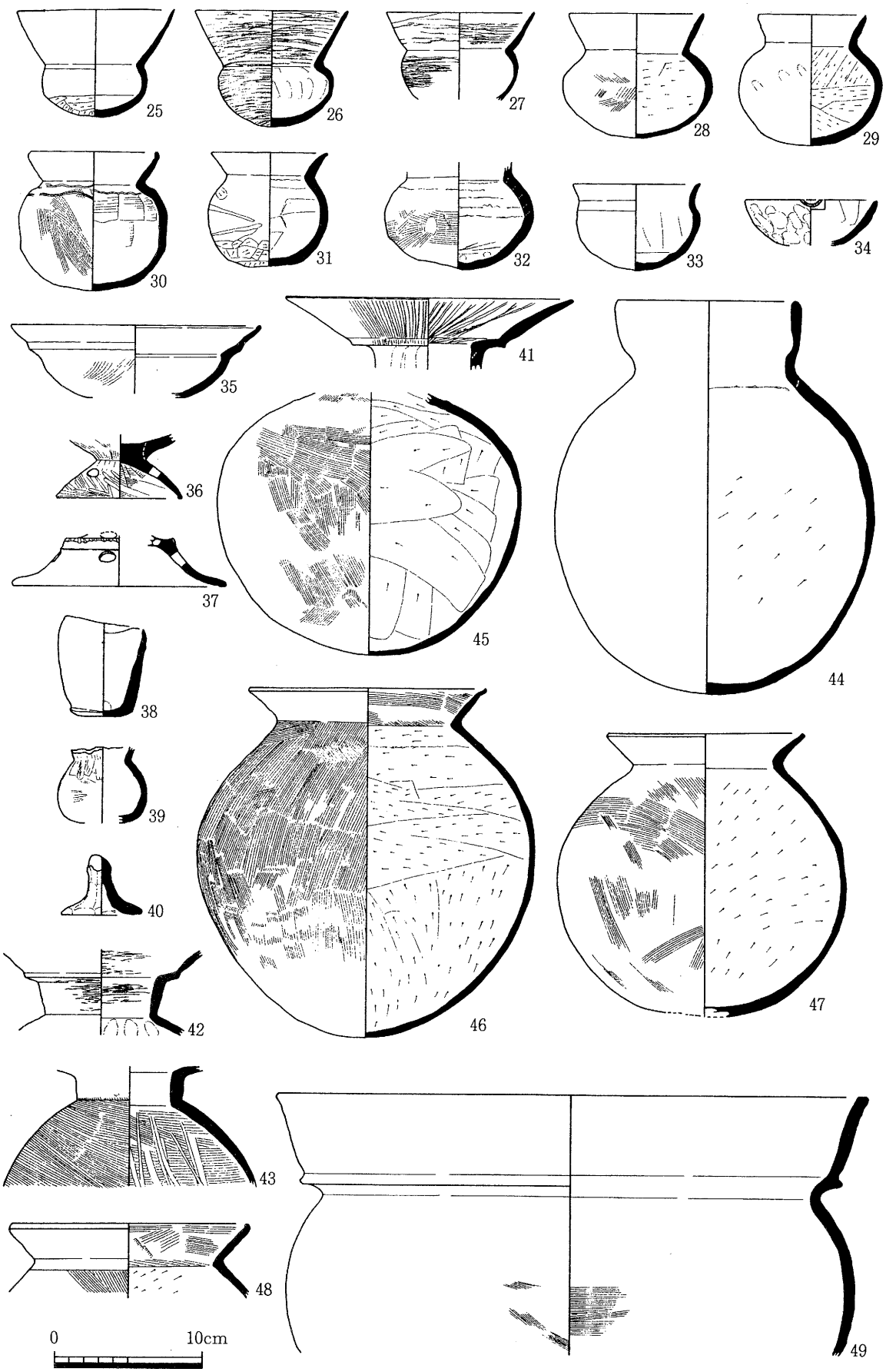
24は庄内期の甕。体部外面は平行叩きをナデ消しており、内面はヘラケズリ。25～33は小型丸底壺。26・27・31は外面ヘラミガキ調整、28・30・32は外面ハケメ、25・29は外面ナデを施す。29は口径7.4cm、器高9.0cmの完形品。31も口径7.8cm、器高7.9cmの完形品、33も口径8.6cm、器高6.0cmの完形品である。34は口縁部を1箇所打ち欠いた椀、35は有段口縁の鉢である。36・37は器台。36は脚部の3箇所に円孔を穿つ小形器台である。37は鼓形器台の脚部。刻目突帯と円孔を有する。38～40は小形、手づくねの土器である。38はコップ形の鉢。口径5.4cm、器高6.9cmを測り、伴出遺物から布留式の時期であることがわかる。39は口縁を欠損するが、小形丸底壺の形態を呈しており、38とほぼ同時期のものであろう。40は高杯の脚部。7世紀頃のものであろう。

41～45は壺。41～43は二重口縁の壺。41は口縁部内外面に放射暗文状のヘラミガキを施す。43の体部内外面はハケ調整である。44は直口壺。内面ヘラケズリを施す。45は肩部外面にヨコ方向のハケメが巡る。46～48は甕。46は口径16.3cm、器高23.9cm、47は口径13.3cm、器高14.4cmを測り、外面に煤が付着している。49は口径39.8cmを測る大形の鉢である。50・51は杯。51は内面に放射状暗文を施す。52～54は高杯。52は杯部内面に放射状暗文とラセン状暗文を施す。54は口径24.1cm、器高15.0cm、裾径13.6cmを測る。55は内面に2段からなる放射状暗文・ラセン状暗文を施す鉢。56・57は甑。56は内外面にハケメを施す。口径29.0cm。57は外面指頭調整、内面板ナデを施す。口径32.4cm。58は羽釜。口縁部を欠失。外面ハケメ調整を施す。

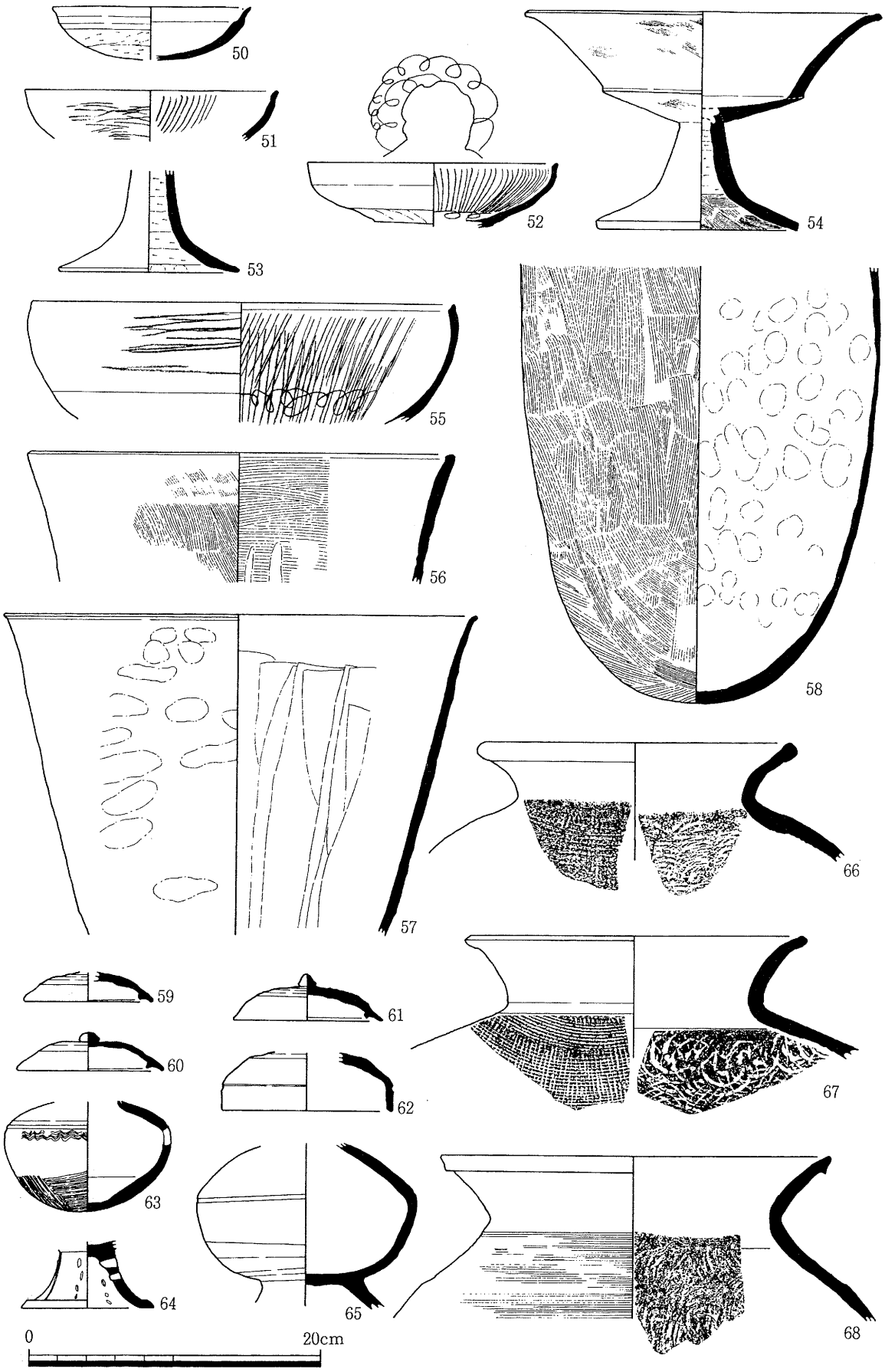
59～68は須恵器。65はⅠ区周辺、61・63・64・68はⅡ区周辺、62はa区、66・67はb区、59・60はc区から出土。59～62は杯蓋。59～61は天井部につまみをもつ。60は口径9.9cm、器高2.6cm、61は口径10.1cm、器高3.2cm。62は凹線を巡らすことによって稜が浮かぶ。63は瓶。口縁部欠失。体部外面最大径に1条の削り出し突帯、5条からなる波状文、底部に平行叩きを施す。色調は淡橙色を呈する。64は高杯。杯部欠失。脚部に縦並びの刺突文と透かし窓のための切り込みを1条施す。65は台杯壺。口縁部、裾部欠失。体部外面最大径に1条の凹線を施す。66～68は甕。66は口縁端部



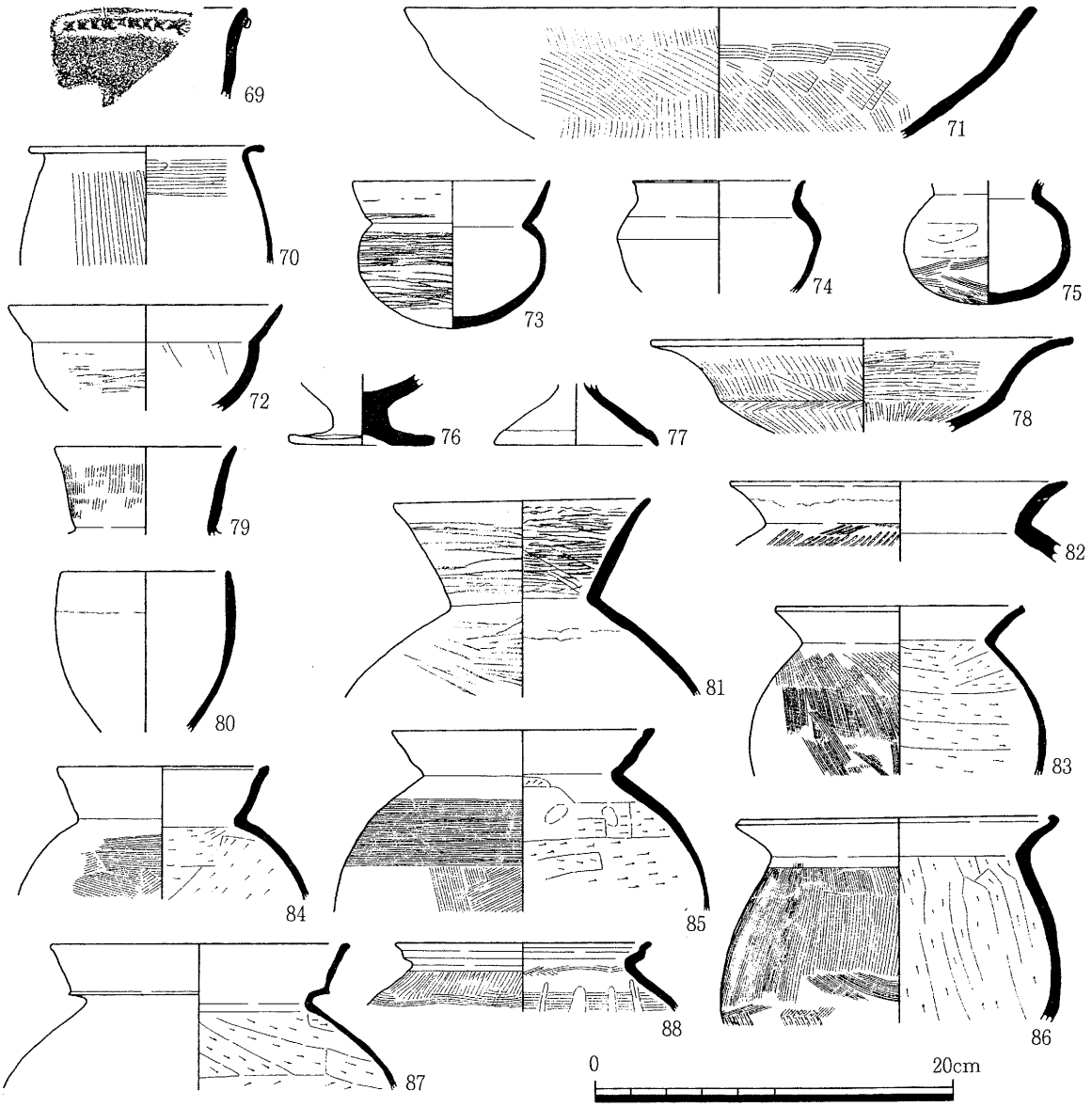
図－21　貴瀬氏採集遺物①



図－22　貴瀬氏採集遺物②



図－23　貴瀬氏採集遺物③



図－24　貴瀬氏採集遺物④

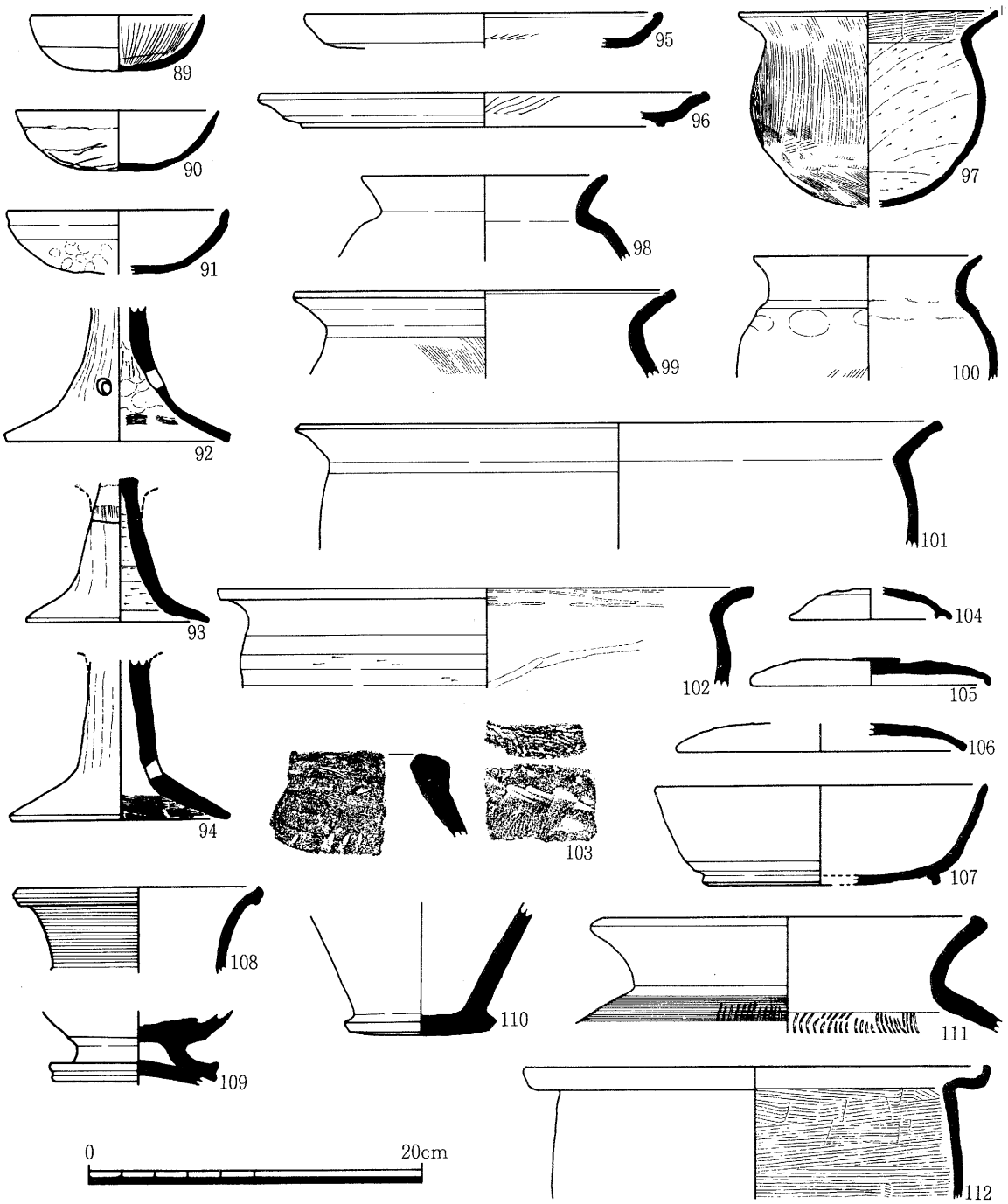
を玉縁状とする。体部外面を格子叩きの後にカキ目、内面に同心円叩きを施す。口径20.8cm。67は口縁端部に面をもつ。体部外面は平行叩きの後にカキ目、内面に同心円叩きを施す。口径22.7cm。68は体部外面にカキ目、内面に同心円叩きの後にすり消しを施す。口径26.6cm。

69～112は出土地点不明の土器である。

69は縄文土器の深鉢。口縁部に刻目突帯を貼り付ける。

70は弥生土器の甕。内外面ともにヘラミガキ調整を施し、外面に煤が付着する。口径13.0cm。71は弥生土器の高杯。内外面ともに乱方向の粗いハケメ調整を施す。口径35.3cm。

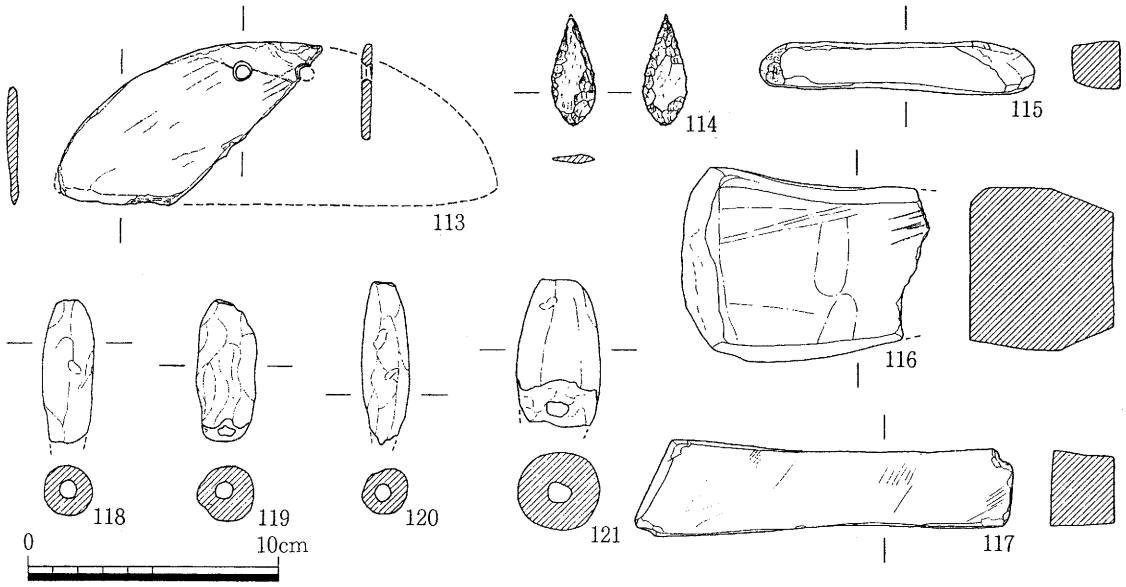
72～103は土師器。72～75は小型丸底壺。72・73はヘラミガキ調整。74は口径9.5cmを測る。75はハケメ調整を施す。76は低脚杯であろう。脚部は大きく裾広がりとなる。77は器台の脚部。78は高杯の杯部。79は直口壺。80は瓢形壺の口縁部であろう。81は広口壺。82～88は甕。87は直立する口



図－25　貴瀬氏採集遺物⑤

縁、88はＳ字状の口縁を呈する。72～88は庄内式～布留式の土器である。76・87は山陰系、80・88は東海系の土器であろう。

89～91は杯。89は内面に放射状の暗文を施す。口径10.5cm、器高3.4cmを測る完形品。92～94は高杯。92・94は脚に円孔を穿つ。95・96は皿。ともに内面に放射状の暗文を施す。96は高台が付く。口径26.6cm、器高2.1cm、底径21.8cm。97～100は甕。97は体部外面ハケメ、内面ケズリ調整。101・102は鍋。101は口径38.2cm。102は外面ヘラケズリ、内面に粗いヘラミガキを施す。口径32.2cm。



図－26　貴瀬氏採集遺物⑥

103は竈。口縁端部に面をもち、円弧状の叩きを施す。89～103は７～８世紀のものであろう。

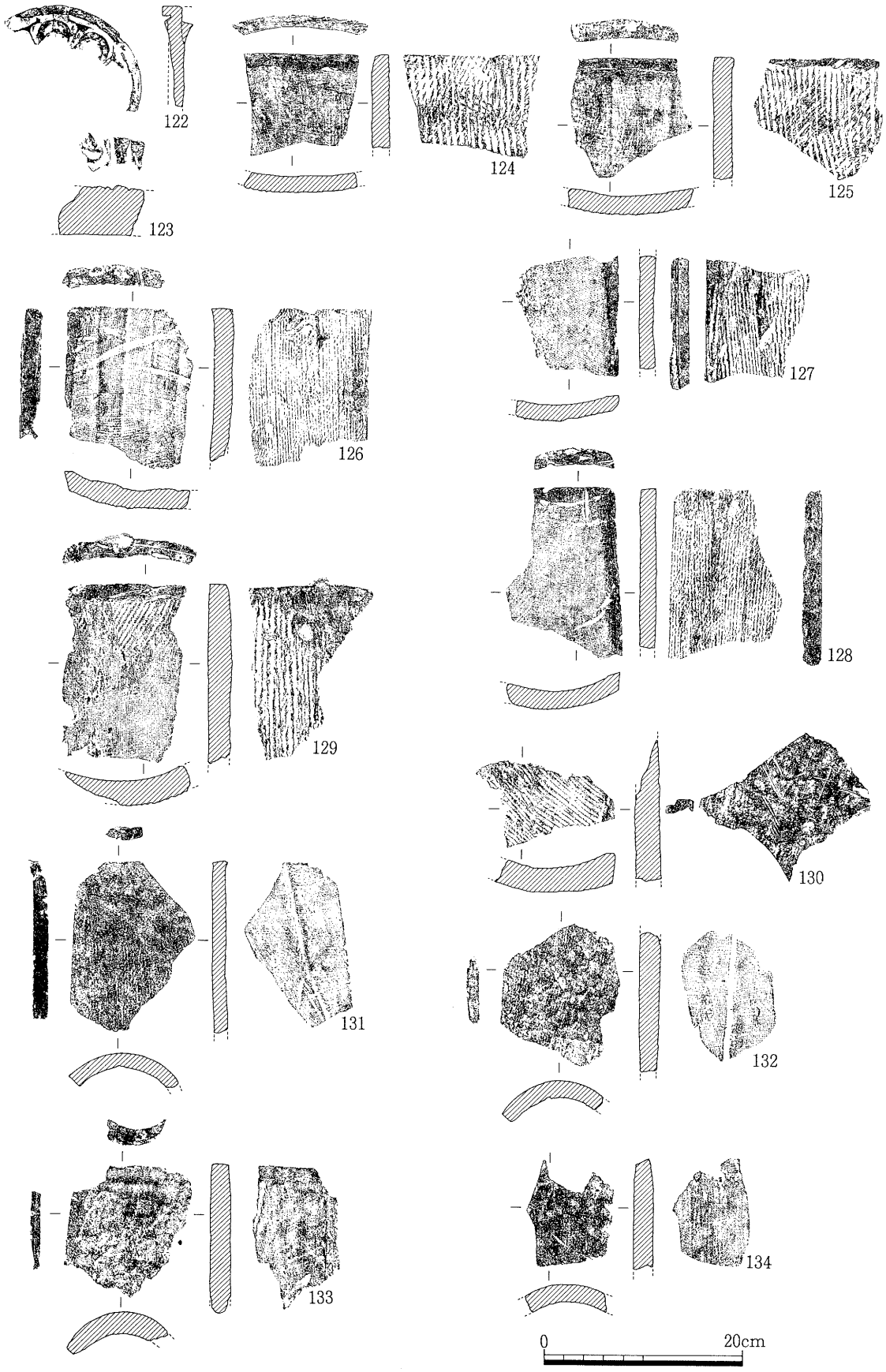
104～111は須恵器。104～106は杯蓋。104は口径9.5cmと小形で、口縁部内面にかえりを有する。105は天井部が平らに近くなり、天井部中央には扁平な擬宝珠つまみを付す。口径14.2cm、器高1.7cm。107は杯身。口縁部がハの字形に開き、高台はやや高く内端面を接地する。口径19.6cm、器高6.0cm、底径13.3cm。108は壺の口縁部。外面にカキ目を施す。口径14.6cm。109は高杯。脚部内面に他の須恵器片が融着している。110は擂鉢。111は甕。体部外面は平行叩きの後にカキ目、内面は同心円の叩きを施す。口径22.2cm。

112は瓦質の鍋。口縁部を外折し、さらに上方に屈曲させる。体部内面に６本／cmのハケメ調整を施す。口径27.7cm。

113～117は石製品。117はⅠ区周辺、115・116はａ区、113はｃ区から出土している。113は磨製の石包丁。直線刃半月形態。やや大形。刃は両刃。背部に面をもち、回転穿孔による紐孔を２箇所に穿つ。緑泥片岩製。114は無茎式石鏃。先端部欠失。基部に自然面をもつ。サヌカイト製。長さ4.3cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm。115～117は砥石。３点ともに全面を砥面とする。流紋岩製。

118～121は土錘。完形ではないが、中くらいからやや大形のものがみられる。

122～134は瓦。すべてⅡ区周辺から出土している。122は素弁蓮華文軒丸瓦。須恵質を呈する。周縁は細くて低い直立縁で素文。花弁は十葉、弁端は円形、中房は欠失する。123は鬼瓦。ごく一部の小片である。124～130は平瓦。124は縄目と平行線の叩き、125は平行線の叩きを斜方向と縦方向に施す。126～129は縄目叩き。129は凹面に糸切り痕がみられる。130は凸面の平行叩きをすり消している。131～134は丸瓦。凸面はいずれもすり消しがみられる。



図－27　貴瀬氏採集遺物⑦

まとめ

以上の表面採集遺物を1993年度の発掘調査成果も参考にしながらまとめておきたい。

縄文時代晩期の土器はⅡ区周辺からのみ出土している。1993年度の調査やその後に採集された線刻絵画を有する深鉢もⅡ区周辺からのみ出土しており、縄文時代晩期の遺物は、この地点に集中するようである。

弥生時代の遺物は全域から出土するが、ｂ区・ｃ区での集中が注目される。特に河内橋の下流約30ｍの地点からは多くの弥生土器が出土している。

庄内期から布留期にかけての土器も全域から出土しているが、1993年度の調査で多量の庄内式土器が出土したⅠ区よりも、より下流のａ～ｃ区の出土が多いことが注目される。ｃ区では、布留式と考えられる土坑から、28・29・31・38・45・47・54の土器が一括で出土している。採集資料とはいえ、良好な資料である。あるいは庄内期から布留期にかけて、集落の中心が下流側（西側）へ移動しているのかもしれない。

５～６世紀代の遺物は、1993年度の調査とともに採集資料でも非常に量が少ない。７世紀代になると遺物量は再び多くなり、Ⅰ・Ⅱ区周辺で多く出土する。７～８世紀代の瓦は、今回の採集資料ではすべてⅡ区周辺から出土しているが、1993年度の調査ではⅡ区から出土をみておらず、Ⅰ区から上流側に寺院が広がっていたと考えられることから、Ⅱ区周辺での出土は瓦の廃棄土坑のような遺構に伴うものではないかと考えられる。

以上のように、採集資料ではあるが、船橋遺跡の変遷を解明するにあたって貴重な資料となった。今後、大規模な調査を実施することが難しいと考えられることから、これらの資料を有効に活用していきたいと考えている。

注

（１）大阪府教育委員会『河内船橋遺跡出土遺物の研究（Ⅰ）』1958
　　大阪府教育委員会『河内船橋遺跡出土遺物の研究（Ⅱ）』1962ほか
　　なお、船橋遺跡の過去の調査・研究については、松尾洋平「船橋遺跡の研究史」『船橋遺跡』柏原市教育委員会1994にまとめられている。

（２）柏原市教育委員会『船橋遺跡』1994

2．米尾一幸氏採集遺物

概　要

ここでは、大阪市在住の米尾一幸氏によって船橋遺跡で採集され、柏原市教育委員会に届けられた遺物を紹介する。米尾氏には、これまでにもしばしば船橋遺跡の採集遺物を届けていただいており、中でも1993年７月に採集された線刻絵画を有する縄文時代晩期の突帯文土器は貴重な資料となっている。[(1)] 本報告では、その後、1993～1995年にかけて採集され、柏原市教育委員会に届けられた遺物を年次ごとに紹介する。

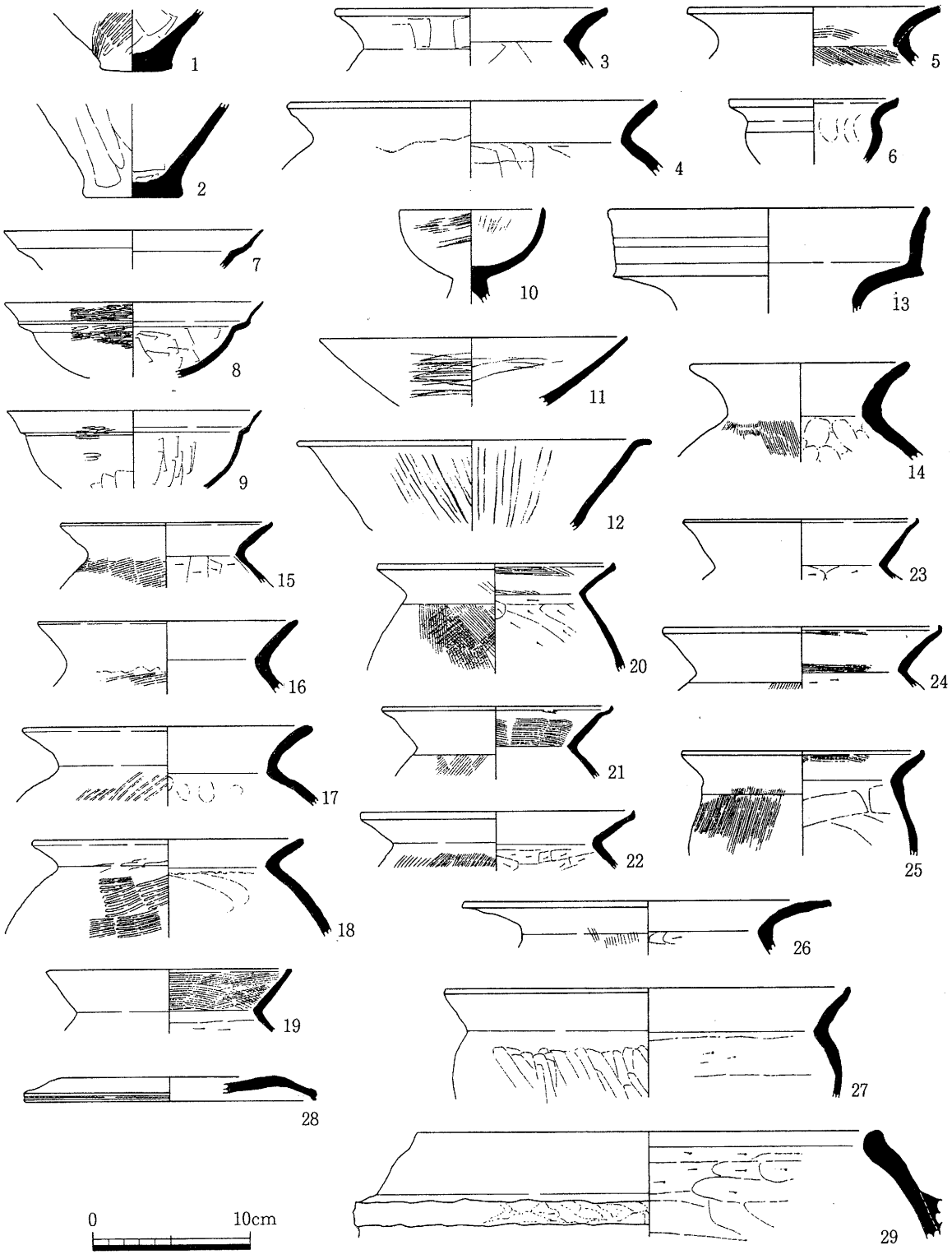
遺　物

１～29は、1993年10月27日およびその前後に採集された遺物である。

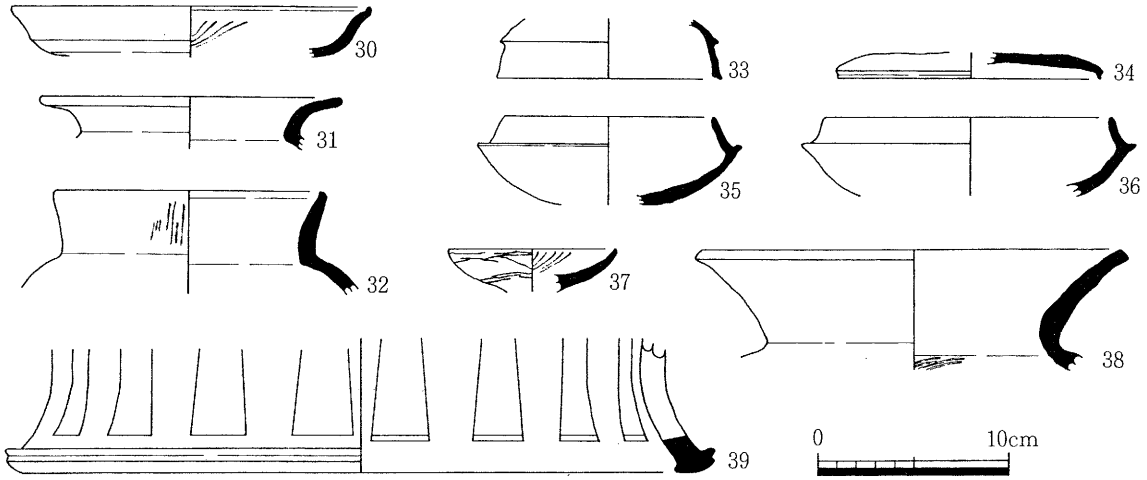
１～５は弥生土器。１・２は甕の底部で、ともに平底。１は外面平行タタキ調整。２は生駒西麓産の胎土をもち、外面板状工具によるナデ調整がみられる。底部はともにナデ調整をする。１の底径は4.6cm、２は6.4cm。３～５は甕の口縁部。「く」の字形に外反し、端部はわずかに上方につまみ上げる。３は内面板状工具によるナデ調整、外面平行タタキ調整。口径17.4cm。４は内面は板状工具によるナデ調整、外面は風化のため詳細不明。口径23.4cm。５はハケメ調整を施す。口径16.0cm。

６～27は土師器。６は口径10.8cmの小形の鉢。丸味をもつ体部から外湾する口縁部、端部は上方につまみ上げる。外面体部に粘土紐積み上げ痕がみられる。７～９は有段口縁の鉢。丸味をもつ体部から「く」の字形に段をもつ口縁部。７は内外面ともに指ナデ調整。口径16.4cm。８・９ともに内面板状工具による無数の木口痕がみられ、外面ヨコ方向のヘラミガキ調整をする。８の口径は16.4cm、９は16.2cm。10～12は高杯。脚部を欠失する。10は椀形の杯部、11は直線的に外方へ広がる杯部をもつ。ともに内外面にヘラミガキ調整がわずかにみられるが、風化のため詳細不明。10の口径は9.2cm、11は19.7cm。12は直線的に外方へ広がる体部から口縁部は外折し、端部はやや丸くおさめる。内外面に放射状のヘラミガキ調整を施す。口径22.5cm。13・14は壺の口頸部。13は上方に拡張する口縁部をもつ。外面拡張部には３条の凹線文をもつ。口径20.6cm。14は「く」の字形に外反する口頸部をもつ。端部はやや丸味をもち終わる。体部内面に指ナデ調整、外面にはタテ方向のハケメ調整と粘土紐積み上げ痕がみられる。口径14.2cm。

15～26は甕。15・20～24は庄内式の甕。うち15・20・24は生駒西麓産の胎土をもつ。口縁部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部は上方につまみ上げる形態をもつ。15・22は体部内面にヘラケズリ調整、外面はタタキ調整。20・24は口縁部内面にハケメ調整、体部内面はヘラケズリ調整。体部外面にはタタキのちハケメ調整がみられる。21は口縁部内面にハケメ調整、体部外面にタタキ調整。23は細片のため体部内面のヘラケズリ調整のみみられる。15の口径は13.4cm、20は15.0cm、21は14.6cm、22は17.4cm、23は15.0cm、24は17.8cm。19は布留式の甕。「く」の字形に屈曲する口縁部に、口縁端部は内側にやや肥厚する。口縁部内面にハケメ（７本／cm）調整、体部内面はヨコ方向のヘラケズリ調整がみられる。口径15.4cm。16～18は「く」の字形に屈曲する口縁部に、端部は丸くおさめる。体部内面は指ナデ調整、外面はタタキ調整がみられる。16の口径は16.5cm、17は



図－28　米尾氏採集遺物①



図－29　米尾氏採集遺物②

19.1cm、18は17.8cm。25は「く」の字形になだらかに外反する口縁部から、端部は上方につまみ上げる。口縁部内面と体部外面にハケメ調整、体部内面には板状工具によるナデ調整がみられる。口径15.2cm。26は大きく外折する口縁部に、端部は面をもつ。体部内面にヘラケズリ調整、外面にはタタキ調整がみられる。口径23.4cm。

27は鍋。「く」の字形に浅く外反する口縁部に、端部は上方に立ち上がり、丸くおさめる。体部内外面にヘラケズリ調整がみられる。口径25.8cm。

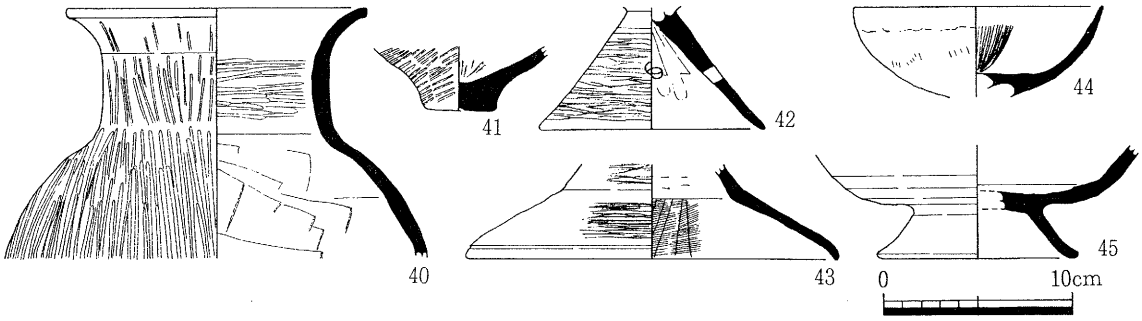
28は須恵器の杯蓋。平らな天井部をもち、その端で大きくZ字状にカーブを描き、端部で下方へ屈曲させ段をなす。天井部中央は欠失しているが、扁平な擬宝珠様つまみが付くものと思われる。天井部外面に回転ヘラケズリ調整、内面には回転ナデのち一定方向のナデ調整がみられる。口径は18.5cm。

29は土師質の羽釜。鍔は欠失している。内傾する口縁部から、口縁端部は上方にやや立ち上がり、丸くおさめる。体部内面にヨコ方向のヘラケズリ調整、外面には煤が付着している。口径29.4cm。

30～39は、1994年7月5日に採集されたものである。

30～32・37は土師器。30は皿。外湾しながら上方にのびる口縁部に、端部はつまみ上げ、尖り気味に終わる。体部内面に放射状の暗文、外面にはヘラケズリ調整がみられる。口径18.7cm。31は甕。大きく外折する口縁部に、端部は丸くおさめる。口縁部は左まわりのヨコナデがみられ、内外面ともに煤けている。口径15.7cm。32は口縁部がやや外方へ広がり気味の直口壺。口縁部外面にタテ方向のヘラミガキ調整がみられる。口径13.8cm。37は小形の器台。台部は欠失。杯部内外面にヘラミガキ調整がみられる。口径8.9cm。

33～36・38・39は須恵器。33・34は杯蓋。33の稜は丸く比較的鈍い。口縁部はハの字形に開き、端部は面をもち凹む。外面は厚く灰かぶりのため詳細は不明。口径12.0cm。34は平らな天井部をもち、端部で下方へ屈曲して段をなす。天井部中央は欠失しているが、扁平な擬宝珠様つまみが付くと思われる。天井部外面は回転ヘラケズリ調整、内面は回転ナデのち一定方向のナデ調整。口径は13.8cm。35・36は杯身。内傾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。受け部はやや水平にとどま



図－30　米尾氏採集遺物③

る。ともに風化のため詳細不明。35の口径は11.2cm、36は15.0cm。38は甕。「く」の字形に外折し、端部は面をもち終わる。体部内面には円弧叩き調整がみられる。外面は細片のため不明。口径22.0cm。39は大形の円面硯脚部。台形状の透かし窓がみられる。裾部には１条の凸帯が巡り、端部は丸味をもつ面をもつ。裾径37.4cm。

40～45は、1995年６月に採集された遺物である。

40・41は弥生土器。40の壺は、なで肩の体部から屈曲して直立する頸部、口縁部はなだらかに外反し、口縁端部は肥厚せずそのまま終わる。調整は外面にタテ方向の、頸部内面にヨコ方向のヘラミガキを施し、体部内面には工具によるナデ調整を行う。口径15.7cm。41は甕の底部。外面にタタキを施し、内面には工具痕を残す。

42～44は土師器。42は器台。直線的に開き、円形透かし孔が穿たれている。調整は脚部外面にヨコ方向のヘラミガキ、内面に工具によるナデと指ナデ調整を施す。43・44は高杯。43はハの字形に広がる裾部から、屈曲して内方向に直立気味の脚部をもつ。調整は外面にヨコ方向のヘラミガキ、内面は裾部にヨコ方向のハケメのち放射状のヘラミガキを施し、脚部はヨコ方向のヘラケズリを行う。44は椀形の杯部。調整は外面に一部工具痕がみられるほかは、風化のため詳細不明。内面には細かな放射状暗文が施される。

45は須恵器の台付鉢。ハの字形に広がる短い台部に、見込みの広い鉢部をもつ。調整は鉢部外面を回転ヘラケズリ、内面にナデを行い、見込みにはタタキが残る。脚部は内外面ともにナデ調整が施される。

まとめ

採集遺物は、弥生時代から中世にかけてのものがみられる。いずれも1993年度の調査地から下流、河内橋周辺にかけて採集されたものである。1993年度の採集遺物は庄内期の遺物を中心とし、1994年度の採集遺物は古墳時代から８世紀にかけての遺物が多い。1995年度の採集遺物は時期にバラツキがみられ、数量も少ない。その後は遺物の出土をほとんどみなくなったと米尾氏が言っておられ、柏原市でも遺物を採集することがほとんどなくなった。

注

（１）安村俊史・松尾洋平「表採遺物」『船橋遺跡』柏原市教育委員会　1994

図　　版

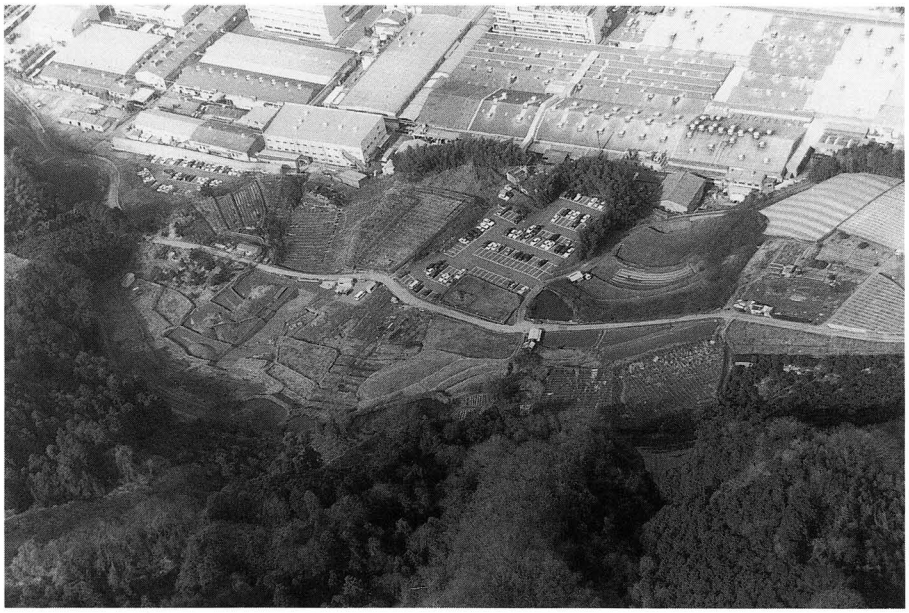
図版１　北峯古墳群・航空写真

左下が調査地
（南東から）

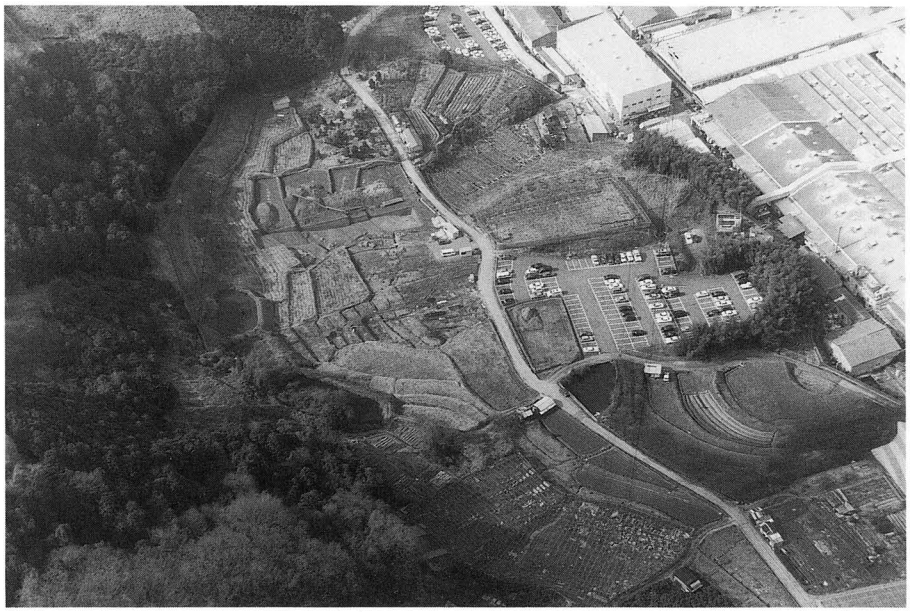
左寄りが調査地・
右寄りが国分寺跡
（南から）

左寄りが調査地・
下方が国分寺跡
（東から）

図版２　北峯古墳群・航空写真



調査地全景
（南から）



調査地全景
（東から）

調査地全景

図版３　北峯古墳群・Ｉ区

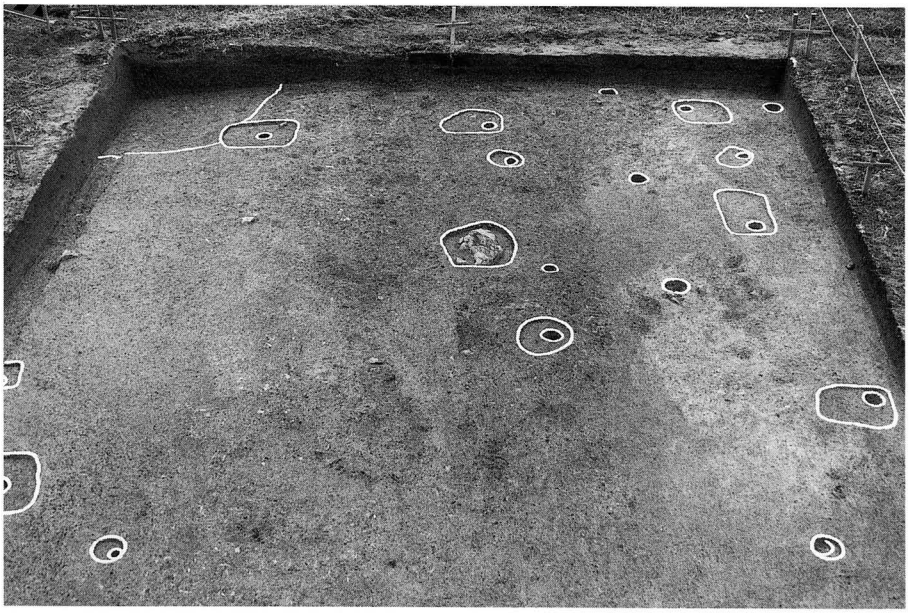
調査前（西から）

調査地から国分寺
跡を望む(西から)

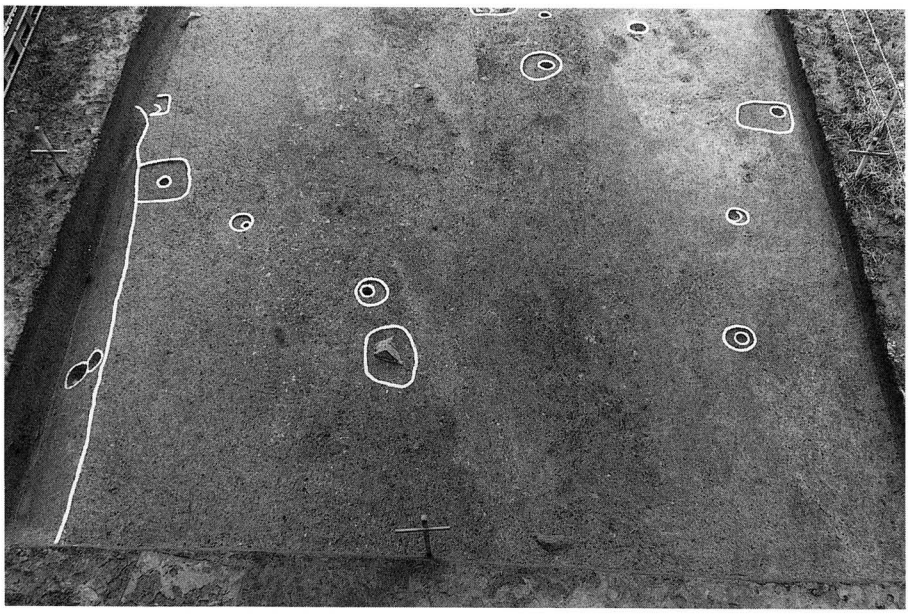
調査風景
（西から）

図版４　北峯古墳群・Ⅰ区遺構

西半遺構
（東から）



西半遺構
（東から）

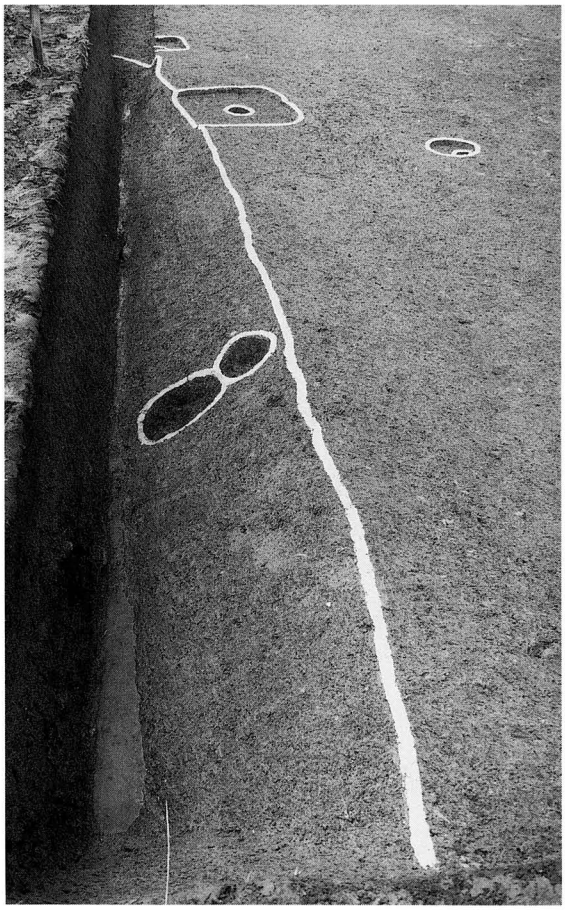


西半遺構
（東から）

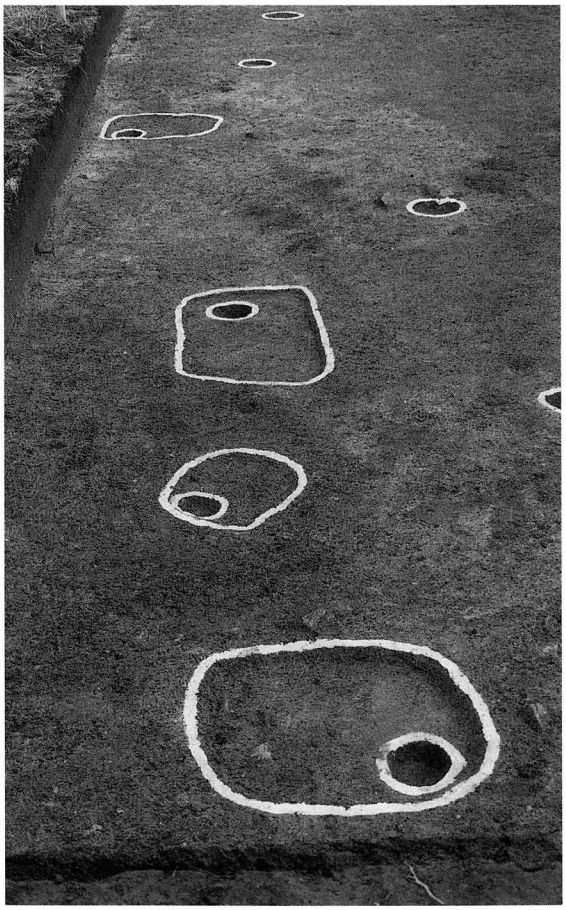
図版５　北峯古墳群・Ｉ区遺構

建物－１・柵－１
（東から）

土坑－１（南から）

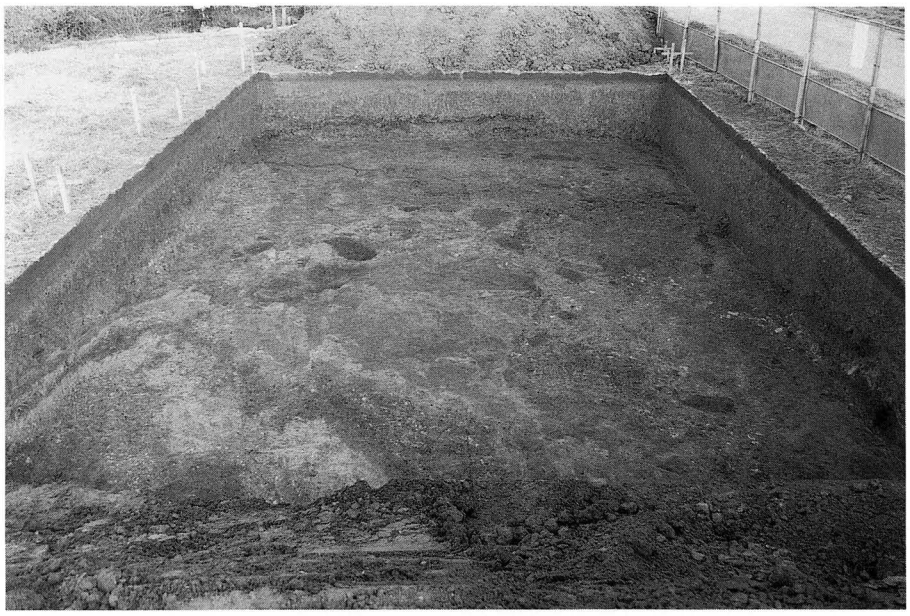


土坑－２（東から）



ピット－１～３（西から）

図版６　北峯古墳群・Ⅰ区東半



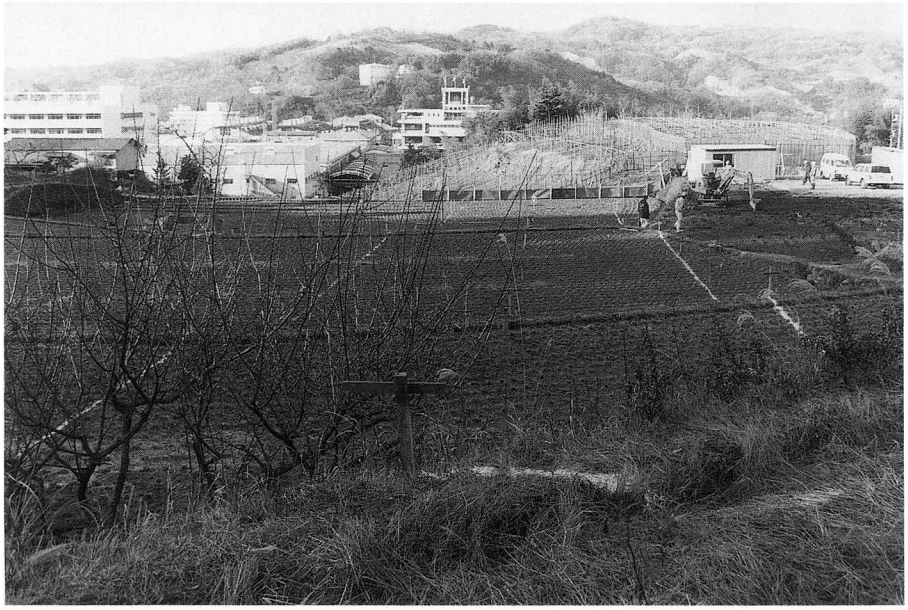
東半（西から）

東半（東から）

東半土層
（北から）

図版７　北峯古墳群・Ⅱ区

調査前（西から）



調査前（南から）

全景航空写真

図版８　北峯古墳群・Ⅱ区全景

全景（北から）

南半（北から）

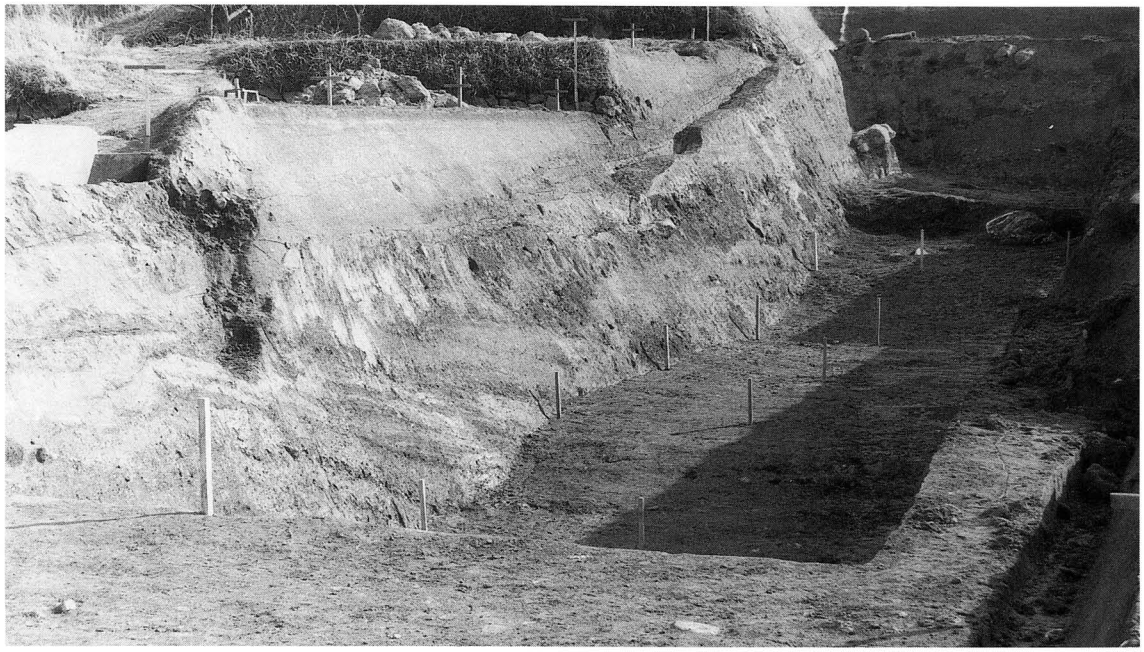
図版９　北峯古墳群・Ⅱ区全景

全景（北から）

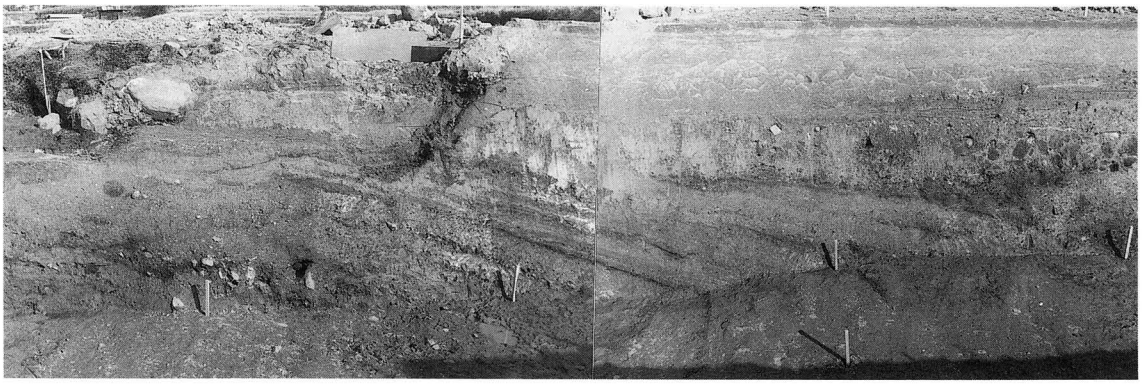
調査風景（北から）

図版10　北峯古墳群・Ⅱ区掘り下げ

全景（北から）



全景（北西から）



土層（西から）

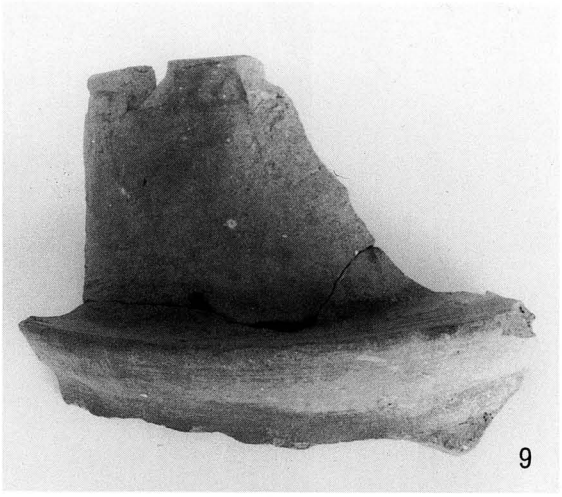
図版11　河内国分寺塔跡

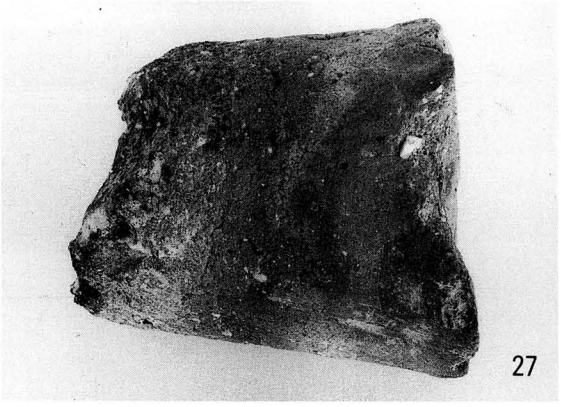
基壇（南東から）

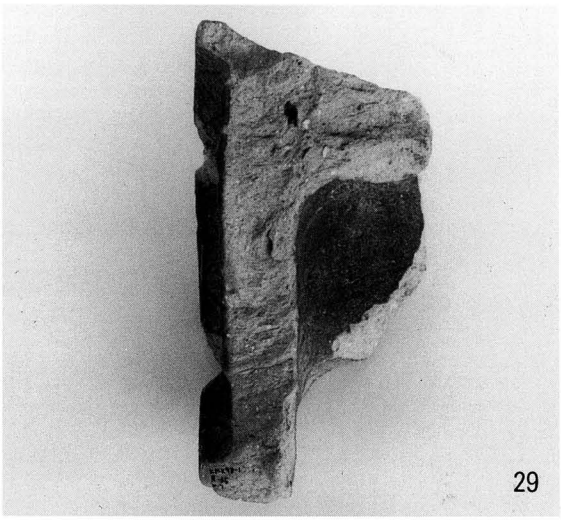
基壇上面
（東から）

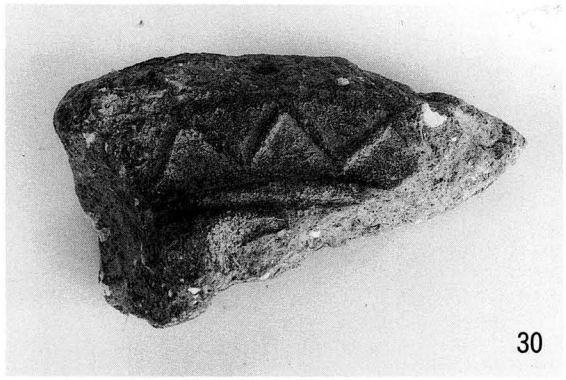
基壇上面
（南東から）

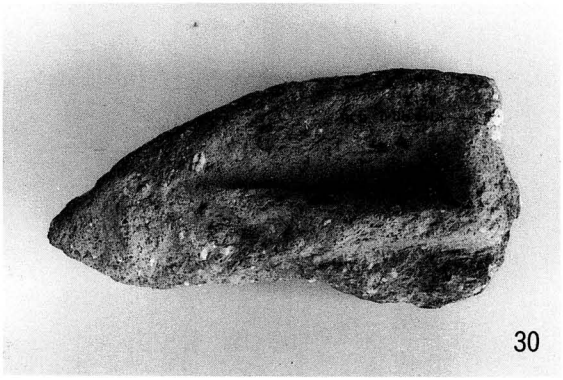
図版12　北峯古墳群・遺物











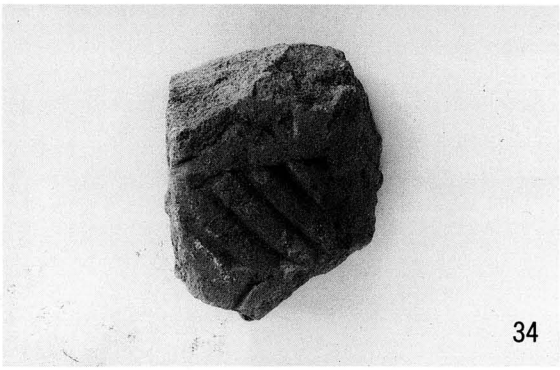
図版13　北峯古墳群・遺物

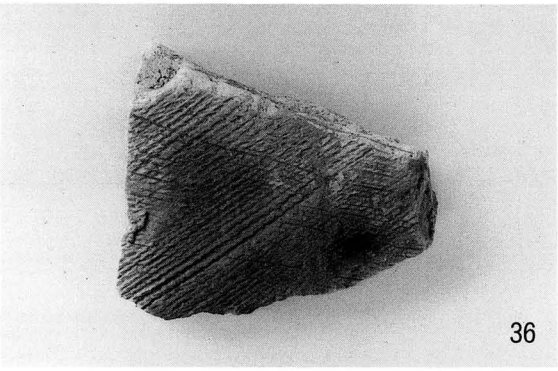
31

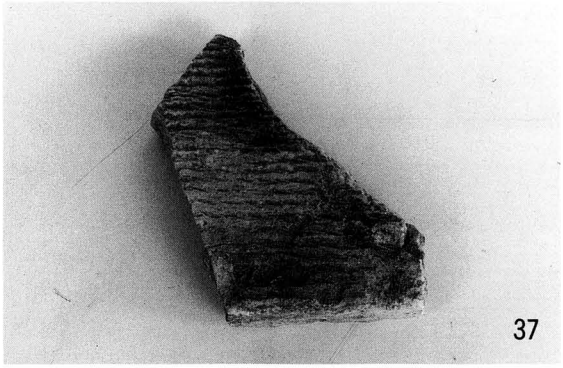
31

32

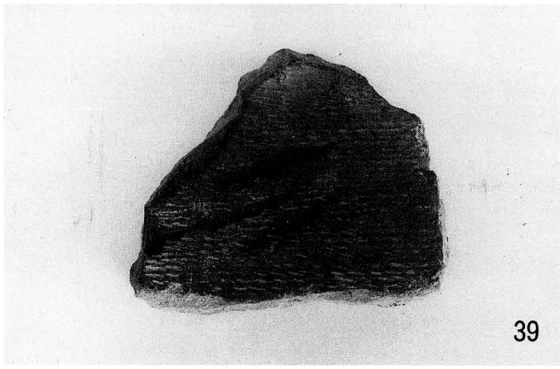
32

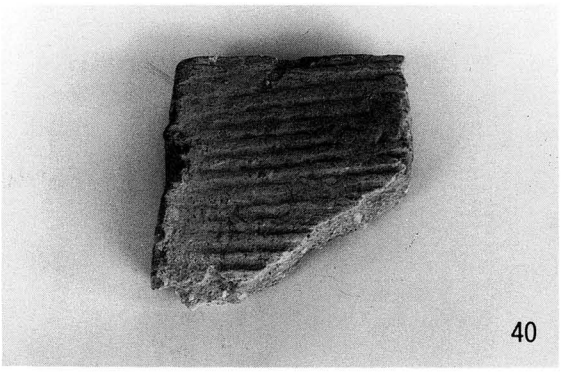

34


36


37

38


39


40

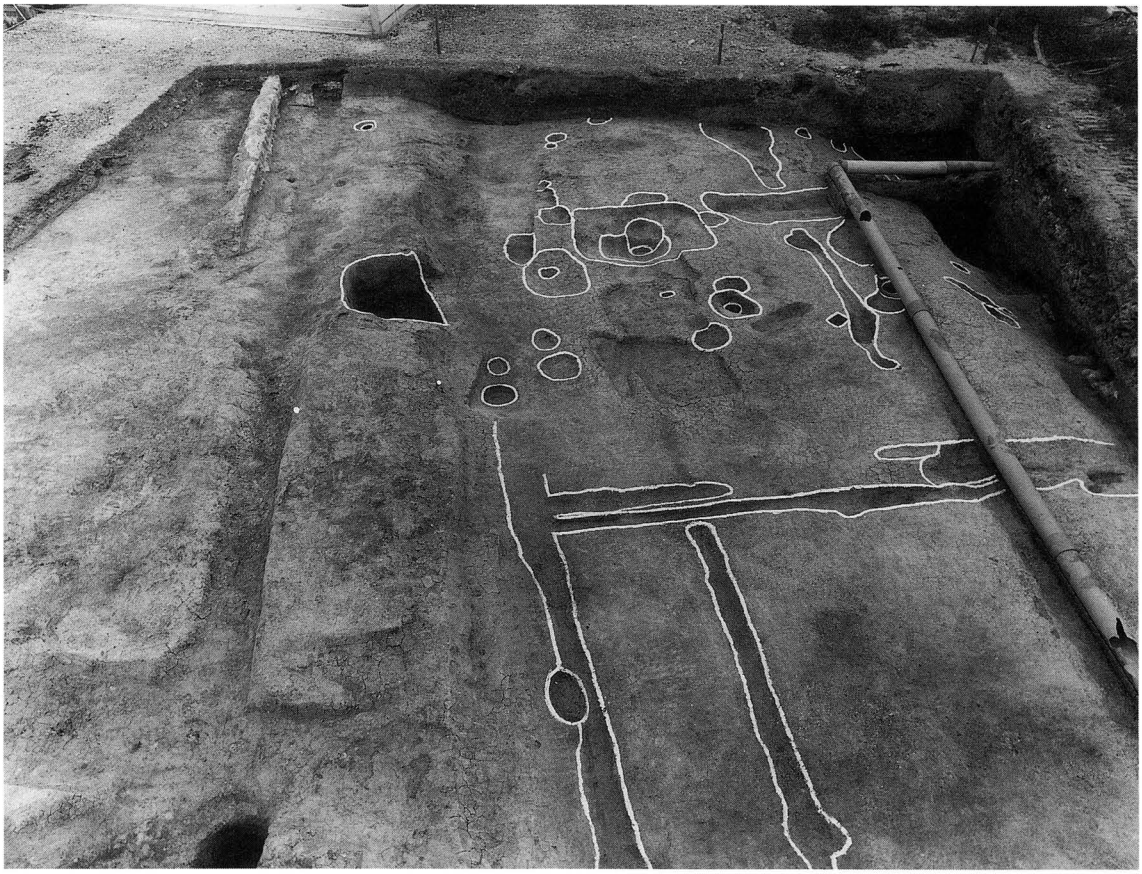
図版14　田辺遺跡

田辺遺跡全景
（南から）

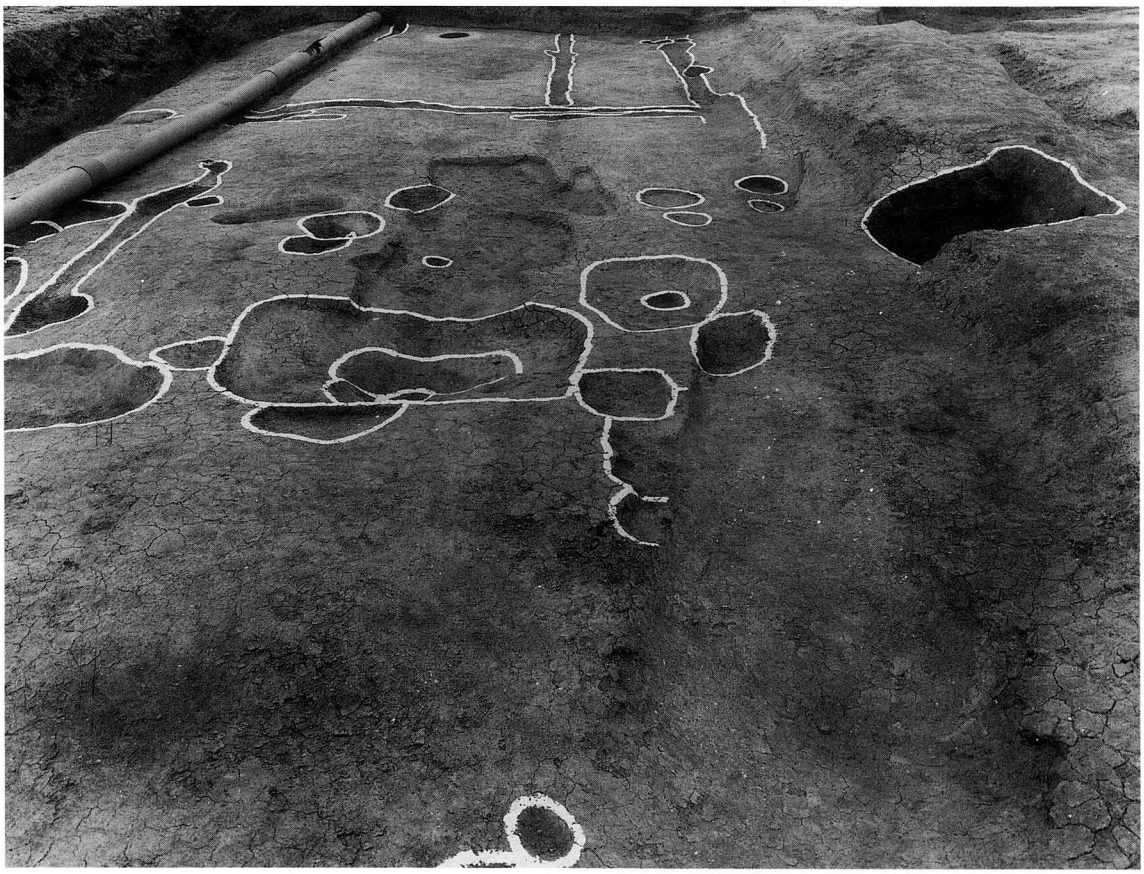
中央が調査地
（西から）

調査前
（北東から）

図版15　田辺遺跡・遺構



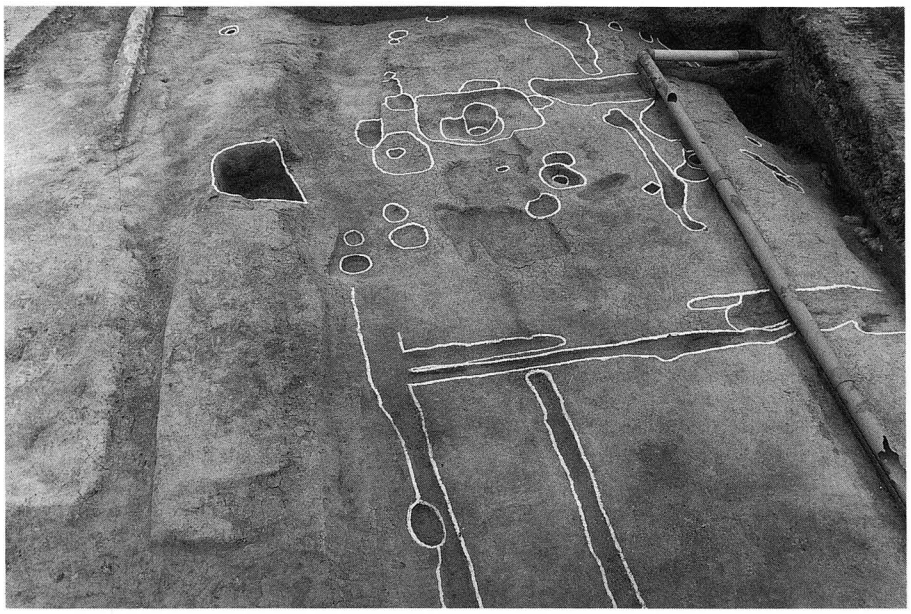
全景（西から）



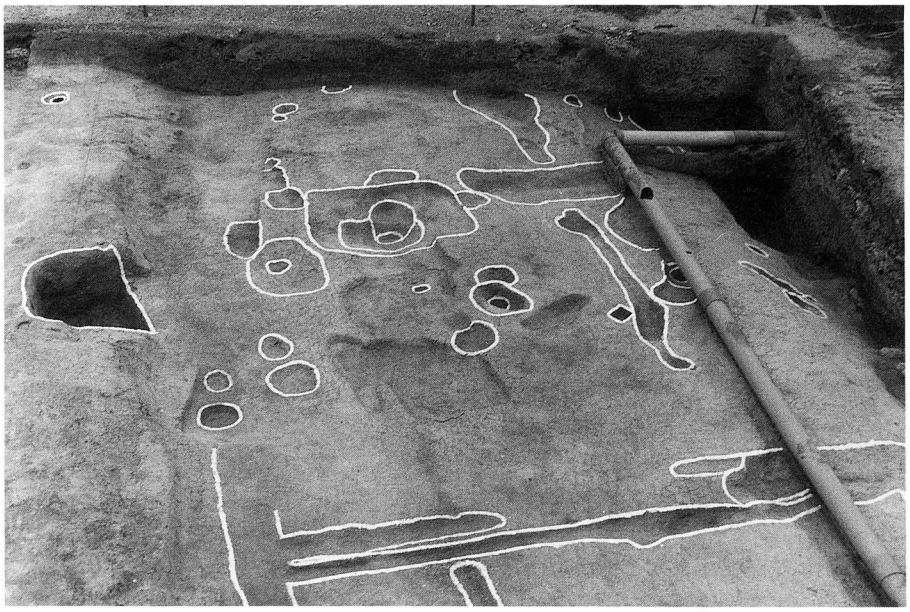
全景（東から）

図版16　田辺遺跡・遺構

遺構検出状況
（西から）

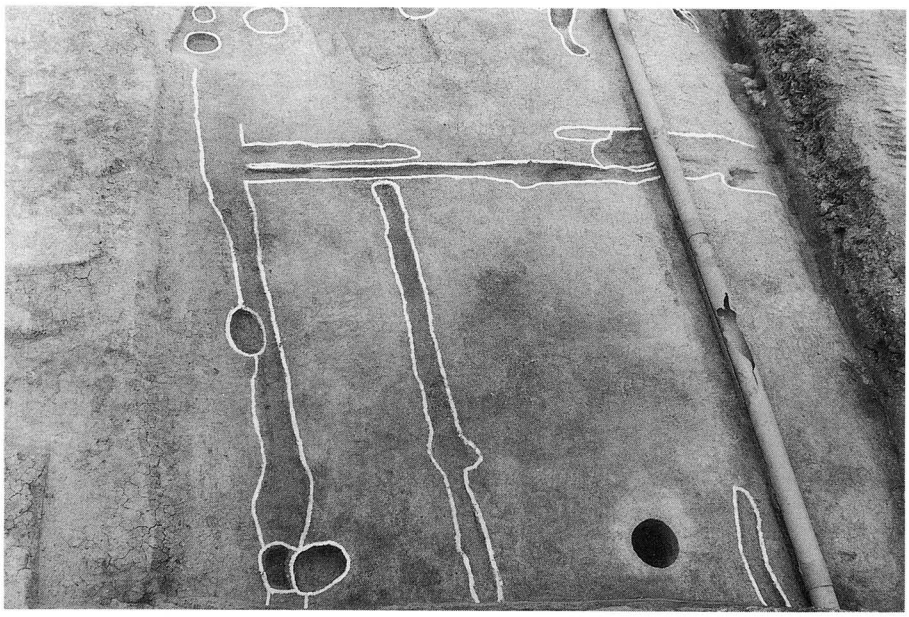


東半遺構
（西から）



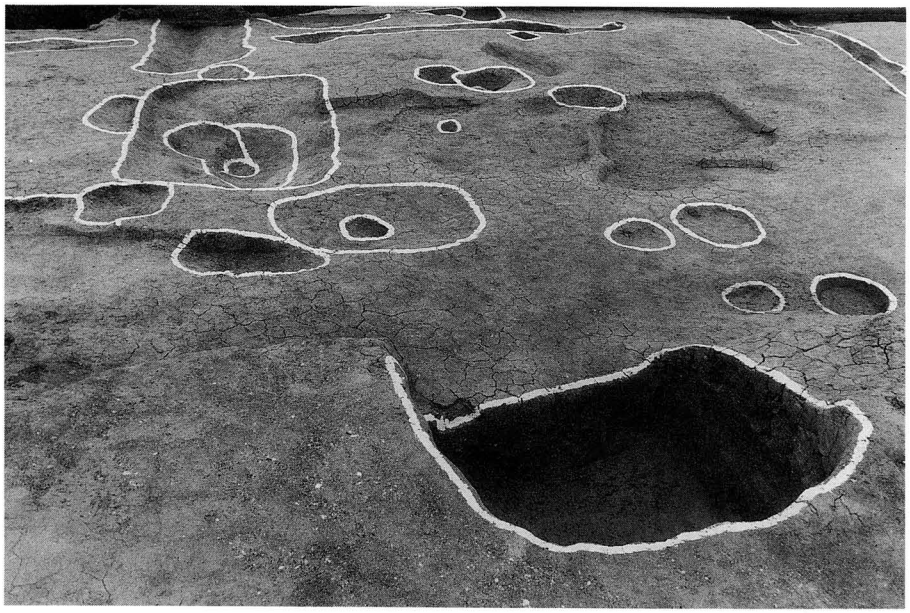
東半遺構
（西から）

図版17　田辺遺跡・遺構



西半遺構
（西から）

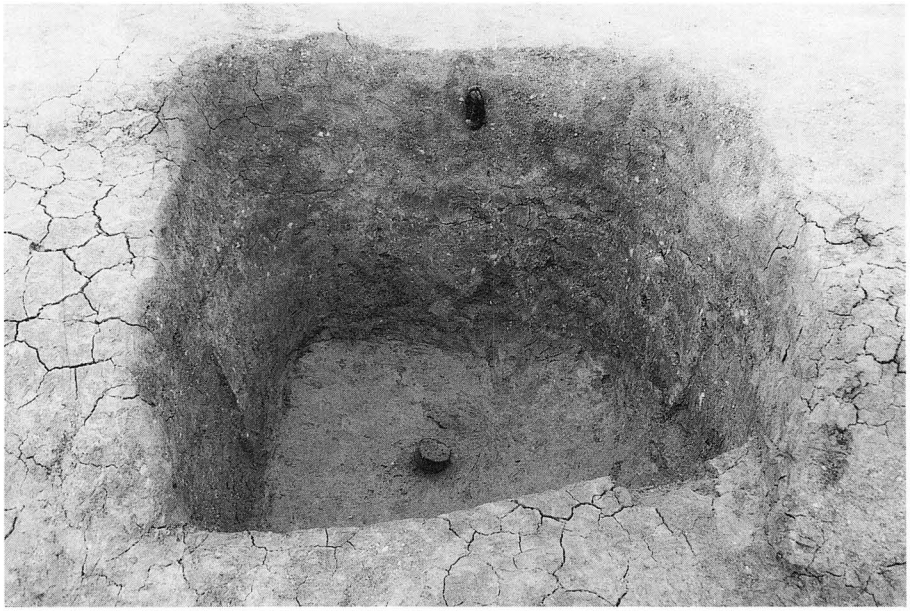
東半遺構
（南から）



東半遺構
（北から）

図版18　田辺遺跡・土坑－２

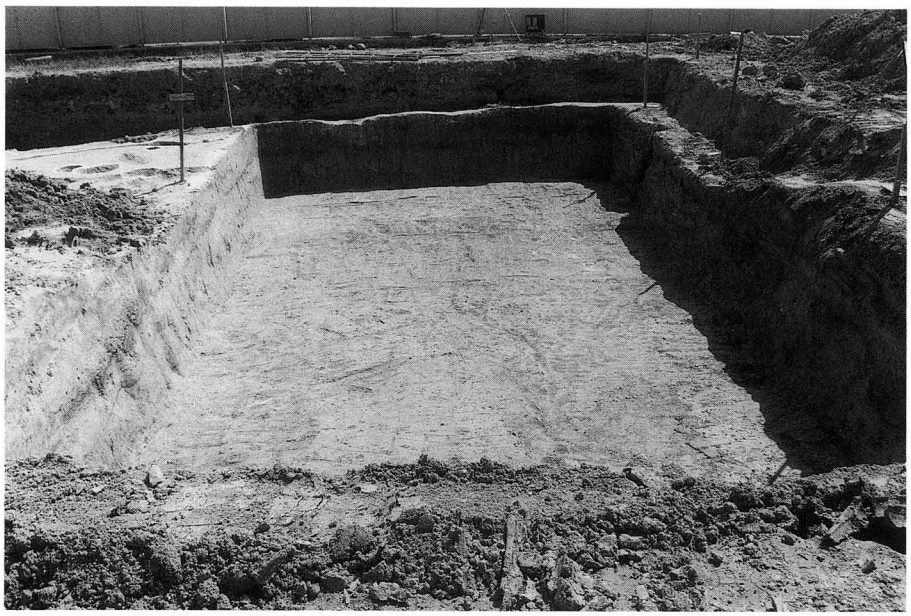
土層（南から）



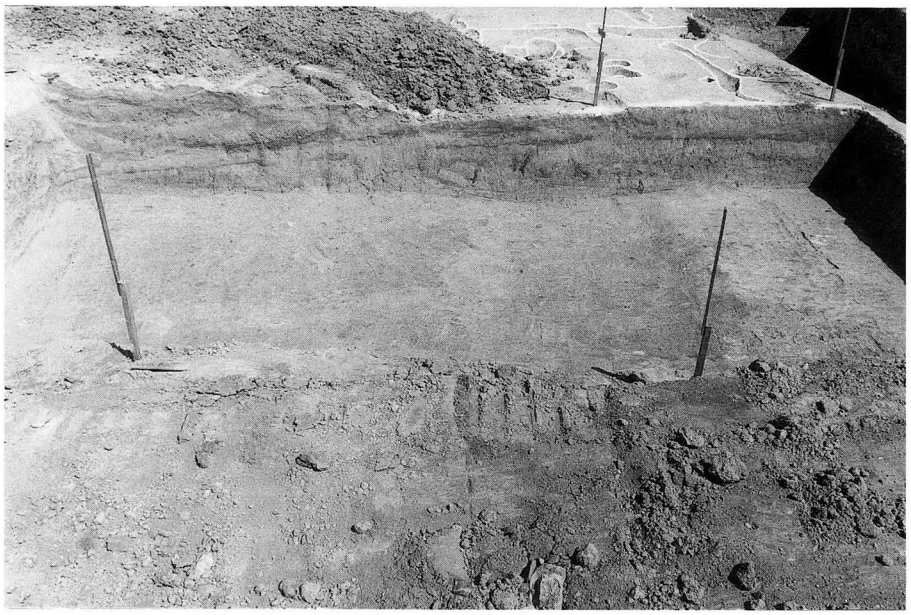
完掘後（南から）

土師器出土状況
（南から）

図版19　田辺遺跡・掘り下げ



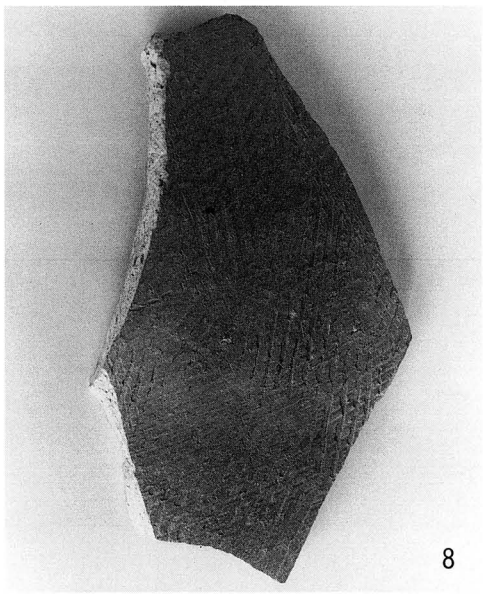
掘り下げ
（北から）

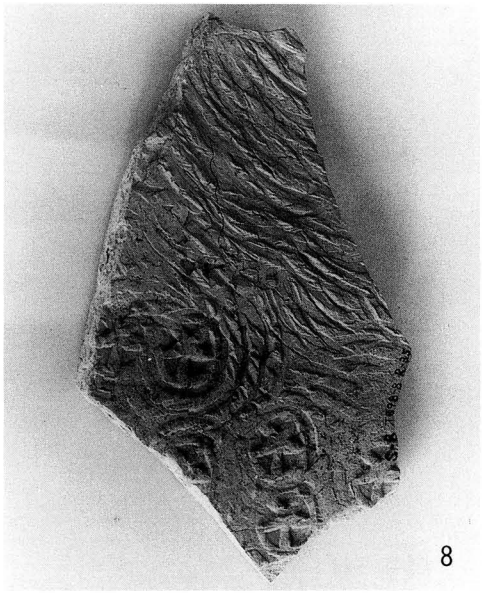


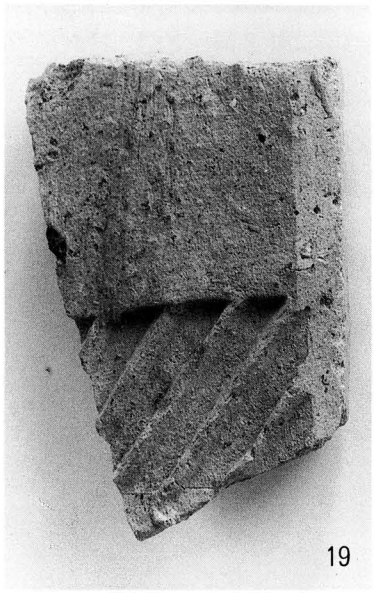
掘り下げ
（西から）

調査風景
（南東から）

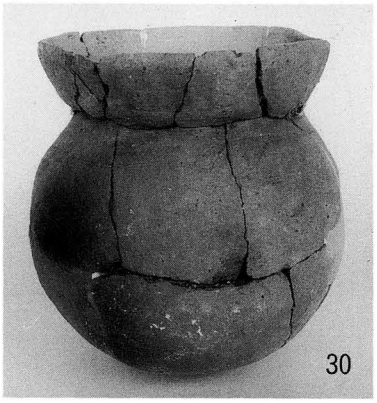
図版20　田辺遺跡・遺物

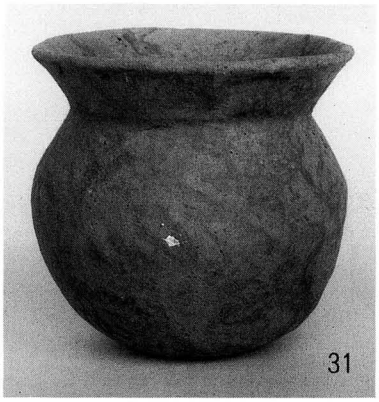


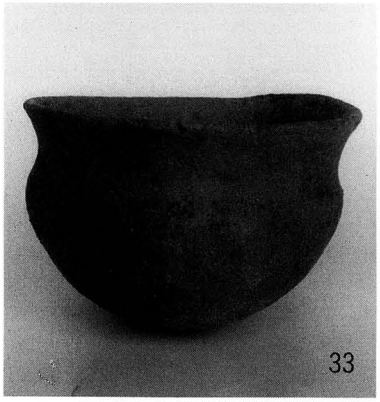


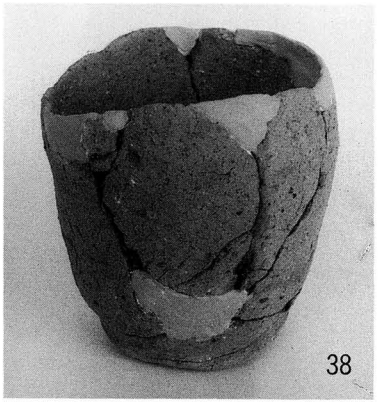


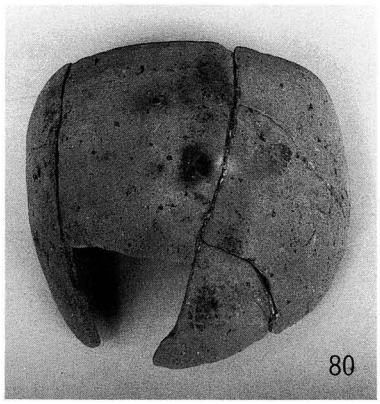
図版21　船橋遺跡・貴瀬氏採集遺物



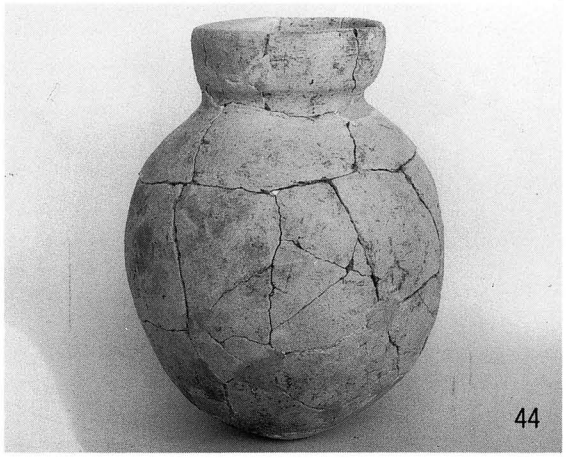


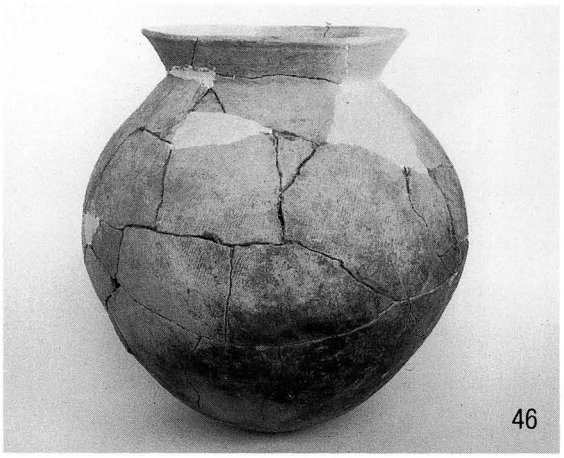


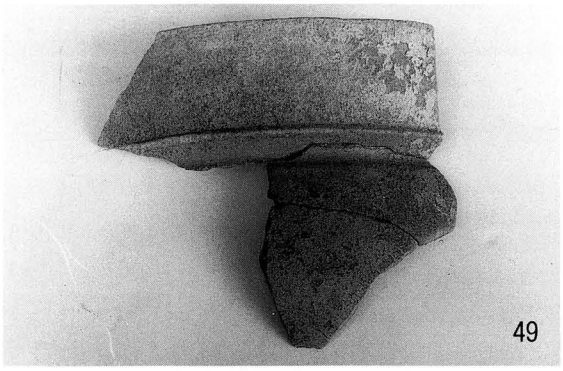


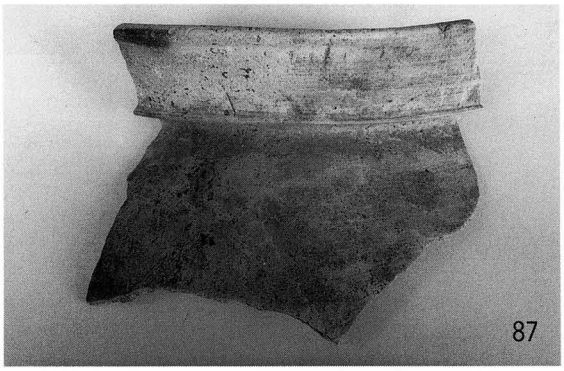


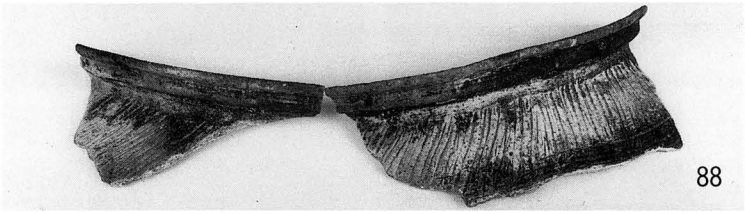
図版22　船橋遺跡・貴瀬氏採集遺物

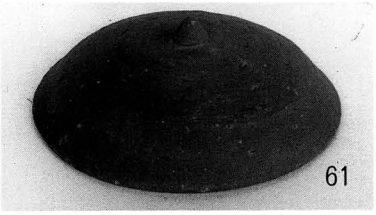


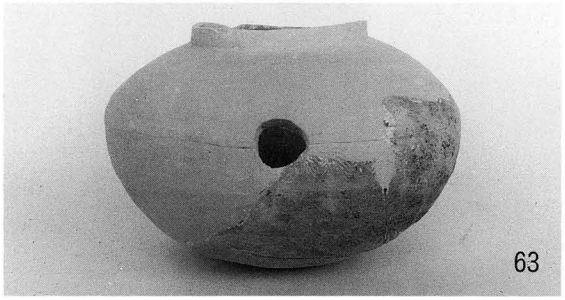


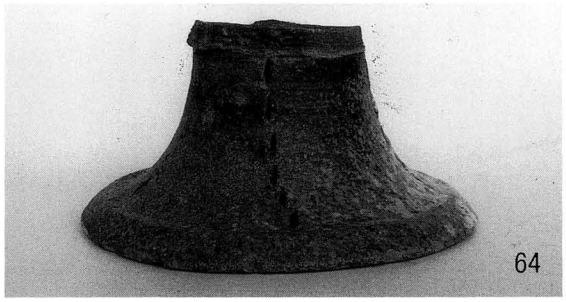




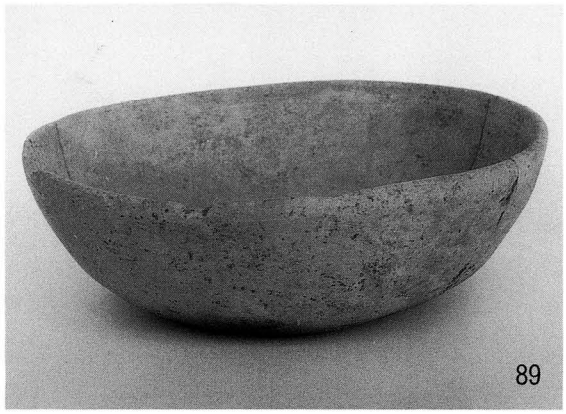


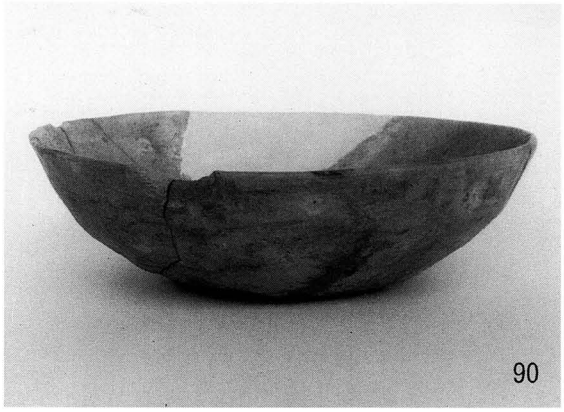


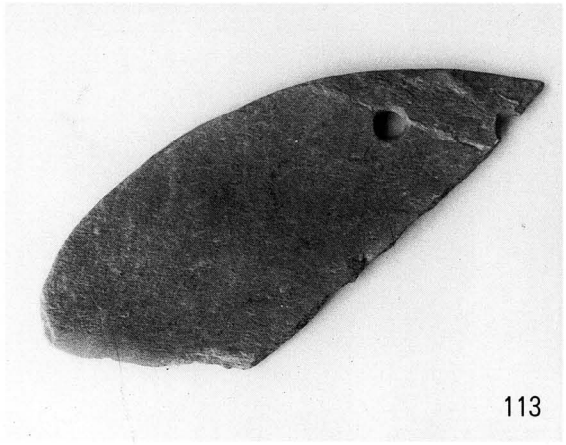


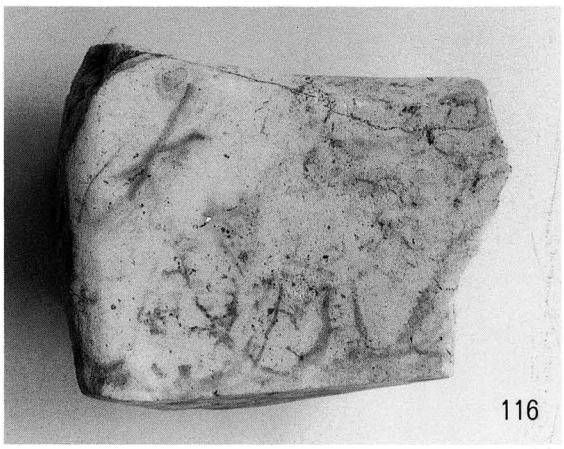


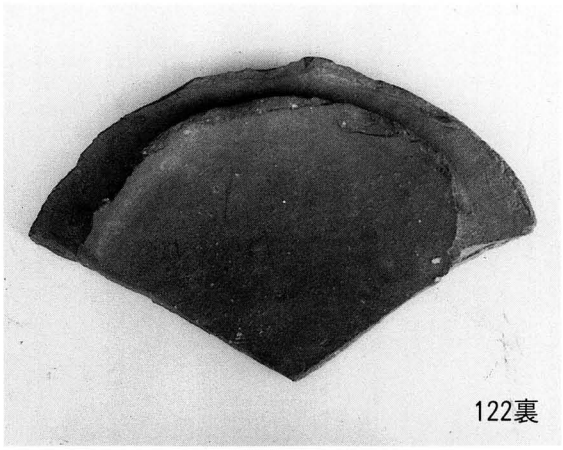
図版23　船橋遺跡・貴瀬氏採集遺物











報告書抄録

ふりがな	きたみねこふんぐん・たなべいせき
書名	北峯古墳群・田辺遺跡
副書名	付・船橋遺跡採集遺物
巻次	
シリーズ名	柏原市文化財概報
シリーズ番号	1998－V
編著者名	安村俊史、槙原美智子
編集機関	柏原市教育委員会
所在地	〒582-8555　大阪府柏原市安堂町1番43号　TEL 0729－72－1501
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたみねこふんぐん 北峯古墳群	おおさかふかしわらし 大阪府柏原市 こくぶひがんじょうちょう 国分東条町	27221	KMK98-1	34度 33分 43～ 47秒	135度 39分 25～ 31秒	19970708 ～0724 19980105 ～0209	749m²	小学校建設
たなべいせき 田辺遺跡	こくぶほんまち 国分本町6丁目	27221	TB98－3 TB98－8	34度 33分 42秒	135度 38分 35秒	19980326 ～0327 19980819 ～0907	213m²	小学校 プール建設
ふなはしいせき 船橋遺跡	ふるまち 古町3丁目	27221	FH	34度 34分 40～ 43秒	135度 37分 15～ 25秒			表面採集

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北峯古墳群	集落	飛鳥～近世	ピット、土坑、溝	土師器、須恵器、瓦、黒色土器、瓦器、土製品	
田辺遺跡	集落	飛鳥～近世	ピット、土坑、溝	須恵器、土師器、瓦、鉄滓、瓦質土器、土管、埴輪	
船橋遺跡	集落	縄文～中世	なし	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製品	

北峯古墳群・田辺遺跡

編集・発行　柏原市教育委員会
〒582-8555　大阪府柏原市安堂町１番43号
電話（0729）72－1501　内線5134

発行年月日　平成11年３月31日

印　　刷　ハンカイ出版印刷株式会社